

528

87



始



12576



輓
近
學
問
論

栗
山
周
一



正
嘉
13. 9 25
内交

528-87

自序

本書題して『最近學問論』と言ふ。此の學問と言ふ意義につきて一言する必要がある。一般に學問と言ふ言葉は極めて通俗的な意味を有して居り、科學と言ふ言葉よりは範圍が廣い。普通『學問論』と言へば何か倫理的な修養書の如く考へられない事はない。然しながら本書に言ふ學問論とは極めて嚴密なる意味に於て用ひたのであつて、即ち科學論と同義である。然らば何故に此の通俗的な、しかも極めてまぎらはしき學問論の名を特に選んだのであるか。之には別に深い理由を有しない。即ち科學論と言はんには餘りに一般に解り難い。さればとて科學概論とすれば、同名の著述が我國に於て二冊まで刊行されてある。そこで幾分まぎらはしいかも知れないが學問論の名を採用したわけである。要は科學論又は科學概論と同意味であると思つてもらへば良い。以上の理由に依て本書は本文に於ても科學と學問の二語を同義に用ひて居る。

軌近科學の進歩は實に目ざましき發達をとげて居る。一般文化方面は申すまでもなく、自然科學に屬する分科の進展は舊時の人々が想像だもせざりし驚くべきものがある。特に理論物理學に於てはローレンツの電子論に次でアインシュタインの相對性理論、プランクの量子論等世界の學界は益々多事ならんとしつつある。一方文化方面を顧れば如何、ヴェントの精神科學はヴェインデルバント、リツケルト等に依て自然科學に包括され、之に代るに文化科學が置かれ、依て以て歴史學は一の確實なる科學的位置を與へられ、舊時の哲學は次第にその研究を深め、範圍は擴大され、自然科學の進展と相俟ちて益々深き思索の要求さるゝ事となつた。

然しながら本書は之等一般科學の最近の成果を概説せんとするものではない。若し一般科學軌近の成果を概説せんとすれば、それはおそらく百科全書の如きものとなるか、乃至は中等學校の教科書を、一冊に總べて綴つた如きものとなるであらう、本書は百科全書でもなく、百科集成でもない。本書の目的とする處は一般科學分科の系統を明にし、依つて以て立つ所の科學の基礎と根據を明にせんとするものである。

る。各種の科學分科は如何なる基礎根據の上に立ち、如何なる關係に於て存し、而して又それ等が吾人の世界觀人生觀の上に如何に統合せられるものであるか。換言すれば科學の内容と形式、即ち目的と方法は、如何なる論理的意義と哲學的價値とを有するかと言ふ事の、極めて大要を叙述したものである。されば本書は當然哲學的形式を以て論述されなければならぬ。かゝる科學一般につきての論理的基礎を明にするには、蓋し哲學より他に之に關し得ないが故である。されば本書の仕事は要するに科學の哲學的批判と言ふ事になる。

本書は叙上の如く科學の哲學的批判である。然しながら誤解さるゝおそれ無しとも限らぬ。學問論即ち科學の哲學的考察と言ふ事は諸科學の現象認識に對する原理の當否を批評せんとするものではない。更には又諸科學を統一してその上に君臨せんとするものでもないと言ふ事である。哲學は一個の科學として存在するものであつて、科學分科の王者ではないからである。只然しながら一般分科はその目的に對して現象界をその對象に持つ。而してよく諸科學に通じて一般的論理的基礎を興ふ

るもの蓋し哲學を以て他に無い。而して又、一般科學分科の依て立つ基礎を明にせん事は、哲學の重要な仕事であらねばならぬ。無論哲學は、持に學問論として叙述する事柄は一般現象界を直接の對象とはしない。依て本書も直接現象を論ずる事は出来ない。學問論は即ち一般科學分科をその對象とするのであつて、その各學の依て立つ論理的根據を究明する事が本書の目的である。

本書は叙上の如き理由に依て余の科學觀の一部をまとめたものであるが、實は尙多くの言はんと欲して割愛した點がある。かゝる本書の如きを叙述せんと志し、資料を蒐集してより此處に約二年、筆を下して書き出してより約一ヶ月、書き終つて翻讀すれば不備の點極めて多く、科學論としては不完全なるをまぬがれぬ。大方の示教に依て訂正増補の機あらん事を豫想するものである。

最後に一言する。『科學概論』の名を持つ著述が既に二冊まで我國に於て出版されてある。その一は數理哲學の大家、おそらく我國に於ける此の方面の研究につきての第一人者文學博士田邊元氏に依て、他の一つは早稻田大學教授平林初之輔氏に依

てゐる。平林氏の高著は今尙拜讀する機を有せず、遺憾ながら本書に参考とする事が出来なかつたが、田邊博士の『科學概論』の如き世界的の述作、高踏的の大著が吾人の鼻の先に突き付けられてある以上、本書の如きが現れる理由が無いかも知れぬ。然しながら本書は之等高著と幾分その赴く所を異にする。しかも尙未だ哲學以前にある人々の爲には又一の入門書とも成るべきか、幸に示教を垂れ賜はむ事を切望する者である。

著 者 識

目 次

第一章 緒論

第一 學問論とは何ぞ

第二 常識と知識、科學と哲學

第三 學問の内容と形式

一 學問の成立

二 學問の目的

三 學問の方法

第二章 學問大系

第一 科學分類の沿革

第二 西南獨逸學派の科學分類

第三 科學分類案私見

第四 發生論的科學分類案

一

一

一〇

一八

一八

二二

三八

五四

五四

八七

一三三

一五九

第三章 個性認識科學

第一 歴史の概念……………三三〇

第二 輓近史觀主潮……………三三六

一 唯物史觀……………三三六

二 實證主義的史觀……………三三五

三 心理主義的史觀……………二六七

四 論理主義的史觀……………二九

五 記述史派の史觀……………二八〇

第三 個性認識學としての歴史學……………二九五

第四章 記述科學……………三二四

第一 記述學に就て……………三二四

第二 輓近生物學界の進歩……………三二〇

第三 生物學問題……………三三六

第四 心理學問題……………三五二

第五章 說明科學

第一 說明學の意義……………三六五

第二 法則……………三六九

第三 假說……………三七六

第四 輓近物理學界の進歩……………三八三

第五 物理學……………四〇一

第六章 抽象科學

第一 抽象科學としての幾何學……………四一三

第二 幾何學の發達と非ユークリット幾何學……………四二四

第三 幾何學と臆說……………四四一

第四 數學先驗論……………四五二

第五 幾何學と經驗……………四六三

第六 發生論的科學系統に於ける數學……………四八一

第七章 結論……………四九四

第一 發生論的科學系統の意義……………四九四

第二 結語……………五〇五

目 次 終

近 學 問 論

栗 山 周 一 著

第一章 緒 論

第一 學問論とは何ぞ

學問論とは何ぞ

本書題して學問論と言ふ。謂ふ所の學問論とは如何なる意義であるか。個々の科學分科に對して、それ等研究成果を概説せんとするものであるか。否、然らず。若し果して科學分科を概説すると言ふならば、おそらくそれは百科全書の如きものとなるであらう。百科全書もとより必要不可缺のものである。然しながら本書は科學分科を要約概説するのが目的ではない。諸種の科學分科は各々異なる科學目的に向つて進みつゝある。而してかゝる成果を要約するとせば、それはおそらく中等學校の

教科書式のものとなり終る事であらう。

更に或は問ふ者あらん。諸種の科學分科の研究理論の成果を審判せんとするものであるかと。否、然らず。かゝる科學分科の理論を審判し、依て以て諸科學の上に君臨せんとするが如きは哲學の仕事としてなし得る所ではない。若し果して如斯をなし得る學問ありとすれば、それこそ實に科學の科學として學問の王者ならん。然し何者か如斯を成し得るものぞ。諸種の科學分科はその科學として絶對的である。獨特であるべき筈である。而して獨特の分科が他の分科に依て犯さるゝと言ふ筈はない。物質的自然界を對象とするものに所謂自然科學がある。又精神現象の研究には精神科學が存する以上、之れ等の他に科學認識を目的とする學がない如く思はれる。實際現象學としては之等の科學分科に盡きて居る。

然らば本書は如何なる事を研究せんとするか。本書の所謂學問論とは如何なる意義であるか。前にも言ふ如く、それは諸科學の成果を審判するものではなく、反つて諸科學の研究成果を基礎として、依て以てそれら諸科學の根據を明にせんとする

諸科學の哲學的考察である。之を換言すれば科學の哲學とも言ふを得べけん。要するに諸分科が各々如何なる根據基礎の上に立ち、それ等は如何なる關係に於てあるか、而して又それ等の科學は各々如何なる形式を備へて居り、如何なる内容に依て意義づけられて居るのであるかと言ふ如き、諸科學一般につきての哲學的意義を明にするのが學問論の目的である。

哲學的意義とは如何なる事であるか。それを説明せんとすれば先づ哲學とは何ぞやと言ふ問題を解決する必要がある。然しかゝる哲學一般論に至つては此處に説明する時間を有しない。又かゝる事は本書の目的でもない。本書の目的は *Philosophie der Wissenschaft* として諸種の分科を系統立て、依て立つ所の根據を明にせんとするのであるが故に、學問論の仕事は一に哲學の一部をなすものであり、本書の研究は當然哲學としての根據に立脚せなければならぬ。而して科學の基礎と方法を明にし、依て以て諸分科の立つ根據を明にする所の學であると言ふ上からは、諸分科の各々を對象とするのである。即ち本書に謂ふ所の學問論は、諸科學分科を對象とし

て、そこに共通なる一般概念を構成せんとするものであるが故に、換言すれば本書の目的は科學批判學なりとも言ひ得る。

學問論の意義依て如斯とすれば、如何なる事が本書の問題となるのであるか。前にも言ふ如く學問論の對象とする所は一般の現象界を直接研究するのではなく、かゝる自然現象を對象とする現象學そのものを對象とする學であるが故に、一見諸分科の上位に居て之等を支配する如くにも見えるが、今日の進歩せる諸分科の研究を綜合して之を支配する如き事は論理上不可能である。各學は各學として、現象の認識を目的とし、各々特別なる方法上、眞理追求を要求するものであつて、如斯夫々特殊なる基礎と根據の上に立つ科學分科が、各々特殊なる科學目的を要求するが故に、學問論は之等科學が成せし所の研究の助力に依て、逆にそれ等の科學を系統立て、根據を明にするにある。かゝれば學問論の目的はかゝる諸科學を直接對象として成立する學なるが故に學問論上の眞理性は逆に諸科學分科の上にも眞理でなければならぬ。而して學問論はかゝる諸科學分科の理論を根據として成立するが故に、

兩者の眞理性は相互に矛盾するものではない筈である。

然らば學問論の問題とする處は何であるかと言ふ事も當然明になつて來る筈である。學問論に於ては、直接には現象の認識に關しないけれ共、直接現象の認識を目的とする科學分科を對象とするが故に、學問論の問題とする處も、科學分科の進歩發展と共に改造されなければならぬ。要之哲學上の諸問題は總て學問論上の問題となる。が然し前にも言ふ如く本書は一般哲學問題にまで立ち入りて詳論する事は出來ぬが故に、與件としての對象たる諸分科の基礎と根據を明にし、諸分科が如何なる系統の上に、如何なる關係を有するものであるか、而してそこに要求する共通性眞理性とは果して如何なるものであるかを明にする事に限定しておかねばならぬ。而して哲學の原理止の問題につきては必要に應じて、必要な場合に簡單に記述するに止めなければならぬ。哲學の依て以て立つ根本原理に至つては他に内外幾多の名著がある。

以上述ぶる處の如く學問論の問題とすべき條件は、之を廣義に解すれば哲學一般

現象學一般に關するるのであるが、之を狹義に限定して考察すれば、要するに本書の叙述せんとする主要問題は次の要項に縮少する事が出来る。

一、科學の成立

二、科學の目的

三、科學の方法

四、科學の系統

余は右要項に依て以下研究を進め度いと思ふのであるが、右要項は一般に科學全般の批判論上當然要求さるべき問題である。即ち余は大體右要項を叙述せんが爲に、本書目次の如き順序を取つたのである。

然しながら輒近に於ける諸科學分科の系統を研究せん爲には、それ等科學の内容と形式換言すれば目的と方法を考察せなければならぬが、逆に科學の目的と方法を明にせんが爲には、諸科學の依て發展したる系統を考察する必要が起る。故に本書は必ずしも右の順序を追ふものではない。更に科學の成立につきましては極めて一般

的哲學的理論に渡り、意識とは何ぞ、直觀とは如何、而して更に一般科學の根據をなす經驗とは何であるかを明にする必要が起る。斯くて科學が如何にして成立するかを明にする事が出来、科學成立の根本的意義を明にする必要があるが、之等は此の小冊子の到底詳論し能はざる處であるが故に、極めて簡略に止めざるを得ざる事となる。要之、前述要項に依り、本書は第一章に於てかゝる根本問題に觸れ、之を簡単に叙述するのであるが、余は之を以て學の根本的意義を充分明に證明し得たと信じない。只第二章以下の依て立つ論理的根據を幾分意義づける事を得れば足りる程度で満足するに止めた。第二章に於ては學問系統を論ずるのであるが、諸分科は古來より如何に系統立てられて來たか、而して現今に於ては如何なる科學分類が哲學的に意義づけられて居るか、而して更にはそれ等科學系統に於ける缺點と長所は何であるか、かゝる問題を明にし余の私見を論述したいと思ふ。かゝる叙述に依て古來より乃至は現今に於ける科學の大體の内容と形式とは明にさるゝ事と信ずるのである。

第三章以下第六章に渡りては諸分科につきての極めて代表的なる、而して問題となるものを説明しやうと考へるのである。第一個性認識學としては、歴史を用ひて之を代表せしめたのであるが、之には異論はあるまいと思ふ。次に記述學としては動植礦物學はその代表者である。然し之は記述學として旗色極めて鮮明であつて、異論の餘地はない。かゝれば之等は第二章中の所々に略述するに止め、問題となる心理學及び生物學論を採る事にした。説明科學としては物理學を採り、抽象學としては幾何學を採つて研究した。然し之を發生論的方法論的に考察するならば、各學は各々その目的と方法、内容と形式を異にするが故に、かゝる一分科を代表者として採る事は嚴密なる意味に於て誤謬であるかも知れぬ。果して然らば代表者と言はずに一例として見れば事足る。而して之等諸問題の他に取り残された問題も多々あるわけであるが、余の科學分類案は以上の説明に依つて簡單ながら論述し得た事となるが故にひとまづ結論としての第七章を附加して本書を結ぶ事としたのである。

余は本書叙述にあたりて一言附加しておかねばならぬが、最近自然科学の進歩は

實に驚くべきものであつて、彼の相對性原理に於ける時空問題、引いて數學の根據、原子觀、量子論、電磁説の如き、哲學が依て以て反省すべき大問題が多々あるのであり、之等の問題を反省する事に依て幾多の思索を要求するのであるが、之等の問題を一々考察する事は到底余の淺學、敢てよくなし得るものではない。而して學問論としては、總ての科學分科につきても、それが現象論的に相當の知識の必要がある。が然しそれは大問題である。偉大なる學者哲人に依てのみ企圖さるゝ所であり得やう。余はもとより自然科学者に非ず。或は思はぬ誤謬を叙せるかも知るべからず。然しながら學問論は直接に現象に關せざるが故に、或る點までは自然科学者ならぬ者も又叙述なし得る哲學的根據を有する。而して諸分科の總てに渡りてその根據基礎を明にする事は一に哲學に依てのみなし得る事であるが故に、換言すれば科學の存在があつて而して後に哲學はその批判的對象を得るのであるが故に、論理的には哲學は科學の後のものである。然し概念上は哲學に依て基礎づけらるゝものであるが故に、科學は哲學の後とも言ひ得られるであらう。要之、余は諸分科につきて、

つとめて専門外なる現象論的事項に入る事を避けた。それは本書として當然必要な事であり、哲學としても直接現象を批判する事は出来ぬのは當然である。以上の理由より先づ科學の成立、内容と形式等に論及し、之等の研究を以て第一章を充し度ふと思ふ。

第二 常識と知識、科學と哲學

總ての知識は常識より發生した。即ち常識は知識の前段であり萌芽である。常識としての認識は科學的のそれと異なる。前者が何等組織系統のなきに比し、後者は組織系統を要求する。前者が何等計畫する事なきに反し、後者は目的を定め、計畫的に認識せんとする。前者が偶然的なるに反し、後者は方法的である。要之常識は得らるゝまゝに得るものなるに科學は之を要求する事に依て得るのであつて、それには目的と方法とが定まつて居る。

即ち常識と言ふ階段に於ては總て偶然的に得られるのであつて、分析したり解剖

したりして實驗的に或る目的を追求して得やうと努力するものではないが、科學は常に有意的に對象を實驗的に觀察し、それを一の系統に組織せうとする。組織と言ふのは種々の部分的認識を有機的に統合したものであつて、丁度有機物の器官の如く相互に聯絡支持し、一部を變改する爲に、他部も又その影響を受ける。如斯は現代の諸科學の成立上常にある事にして、又かゝなければ科學と言ひ得ないのである。如斯知識は常識と異なり、對象の認識に一の組織的なる論理的方法を用ひるのであるが故に、常識の如く部分的でなく、更に常識は普遍必然の法則、構成的概念の要求と言ふことはないが故に、人々に依て主觀的にその認識の結果を異にする事が多い。然るに科學に於ては眞理追求の爲に組織系統に方法的なる手法に依て進むが故に、人々が總て認めて妥當なりと思惟する客觀性を有する認識である。即ち常識は主觀性を有するが知識は客觀性を有する認識である。

方法的と言ふのは人意的に目的を決定し、その目的に向つて進む事を意味する。

Methodosは希臘語の原語 methodos (メトードス)と同義であつて、確定せる目的

への進行を意味して居る。即ち計畫的組織的なる研究の仕方、即ち眞理追求の爲に要求する遣り方を言ふのである。常識と異なる點は此處であつて、常識に於ては無計畫であり無方針である。要之常識は非方法的であるが科學は方法的である。

自然科学、一般に經驗科學の用ひる方法と言ふ意味は哲學と幾分異なる。哲學に於ては極めて嚴密に用ふるのであつて即ち方法とは體系と離れ體系以外にあつてそれに働く他者ではなく、動的に見たる體系そのものである。體系そのものゝ必然的發展の仕方、換言すればその方法なるが故に體系であると言ふ如くである。即ち何れにしても方法的であると言ふ事は、科學成立の重要素であつて、それは眞理追求の爲に當然取るべき仕方である。かゝれば科學の用ふる方法とは批判的である事も又明瞭になるわけである。常識で以ては眞理追求は出來ぬが、科學は眞理追求の可能を許さるゝのも此處に理由がある。

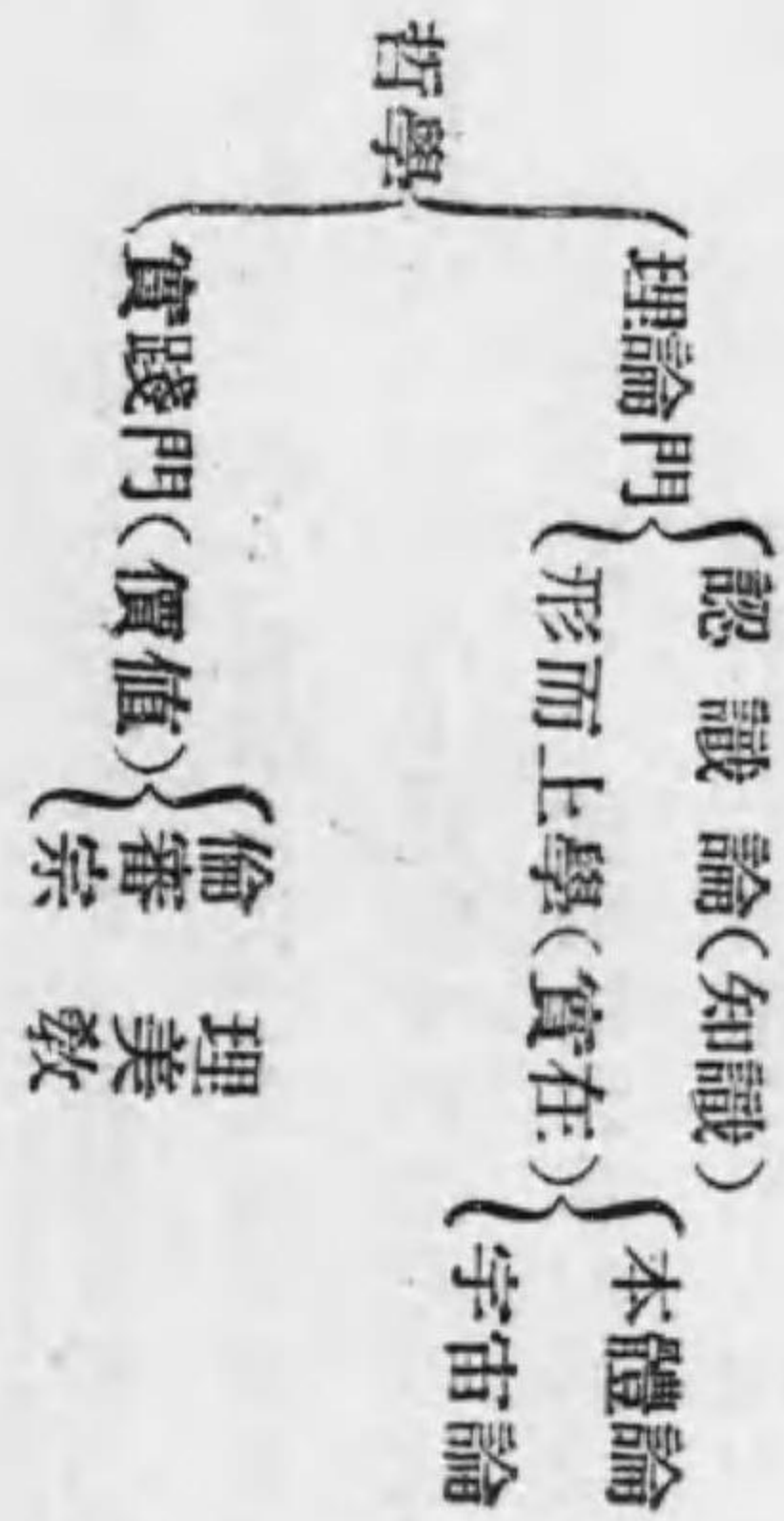
却説然らば一般科學と哲學とは如何に異なり居るかと言ふ事である。既に前項にも述べた通り、一般科學は現象の認識に存するのであるが故に、對象は現象である。

然るに哲學は然らず。その科學分科の依て立つ根據を明にするにあるが故に或る人は學問を科學と哲學とに二大區分する。

哲學は一般科學と比較すればその依て立つ所の本質は自然明となる。ヴインデルバントも言ふ如く、哲學は世界的認識及び人生觀の一般問題を科學的に取扱ふものであつて、一般科學は自然又は人生の一部につきて又は一部を抽象して之をその學の對象とするのであるが、哲學は自然及び人生の全般に渡り、全體としての經驗に依てその統一原理を求めるのである。要之哲學は一般的であるが科學は特殊であると言ひ得られる。

如斯哲學は一般的であると言つたが、如何なるものを一般的なりと言ひ得るのであるか、之は人に依て一般的の意味を異にする。コムト、スペンサーの如きは諸科學の研究成果を一定の原理に基づきて統一するのが哲學の仕事であると言ひ、ヘーゲル、シヨールペンハウエルの如きは、現象の背後の根據本體を以て一般なるものと見、新カント派の如きは諸科學の依て立つべき根本假定を研究し、一切科學の統一根據を

求むるものとする。然しヴェントも言つた如く、哲學は特殊科學に依て得た認識を矛盾なき體系に統一し、且つ科學に依て使用さるゝ一般方法及び假定を其の原理に歸着せしむる一般科學であつて、一方には知識上の統一をなし、他方人生問題に關するが故に、哲學は自然理論的なるものと實踐的なるものとに區分さるゝやうになつて來る。前者には實在問題と認識問題とがあり、後者には倫理問題、審美問題、宗教問題がある。即ち實在問題は形而上學であり、認識問題は知識の學であり、實踐哲學は價值の學である。(ヴェインデルバント哲學概論 Wilhelm Windelband, Einleitung in die Philosophie. を参照せよ。)



かゝる意味に於て哲學は古くより最も根本的なる學問、學問の學問 Science of Science と呼ばれて居る。即ち哲學は一の學問であつて統一された概念的知識であるが、それが一般科學と如何なる關係に於てあるかと言ふ事は人により幾分異なつて居る。無論如何なる科學も根本的概念である。例へば幾何學の根本概念は、空間である。物理學の根本概念は物體現象である。空間や物體現象がなければ幾何學や物理學は成立するものではない。併しすでに空間概念を假定し、而して立つ幾何學なるものは、空間そのものを反省し、一層根本的立場より之を明にする事は出來ない。哲學は之に反して總ての特殊科學の根本概念を反省し、之を一の組織的體系に統合するのである。ベルグソン Bergson の如きは哲學を以て直觀的知識なりと言ふが、其の内容は直觀より得るも、之を概念的知識にあらはす所に哲學存在の理由があるのであるから、直觀的知識はそれ自身直ちに哲學なりと言ふ事は不可能である。哲學は叙上の如く特殊科學の根本概念を反省し、之を統一するが、そればかりでなく、人生の理想即ち當爲の方面に於てもその根本概念を明にするのである。され

ば哲學は眞善美の當爲の根本概念につきても反省に入り來る事となる。即ち世界觀
人生觀の究明にあるが、新カント派の如きはむしろ哲學を當爲が根本であると言ふ
て居る。故に哲學は宇宙人生の最高原理であるとも言ひ得らるゝ事となる。

現象を直接研究の對象とする科學分科の諸々は、現象の奥に潜む實在を研究し、
之を一の普遍必然なる法則に築き上げやうとするのであるが、哲學は之等經驗に依
存せずして思索に依て認識せうとするのではない。それは所謂形而上學に屬し、今
日の思潮よりは認められない事となつた。而して今日の哲學は科學が初めから豫想
する處のものを、科學自身が答へ得ざる點を、究明しやうとするのであつて、要す
るに科學の依て立つ根據を明にするに存する。即ち科學批判は *Wissenschaftskritik*。
哲學の重要な意義をなすのである。然しながら前項に於ても述べた如く、科學批
判と言ふ事は現象學の理論當否を直接に審判すると言ふ意味でない事は明である。
かゝれば科學は哲學に指揮支配されて現象の認識を左右さるゝ事なく、自由にその
目的に向つて進行すれば良いのであつて、哲學は科學の科學ではあるが、その上に

は
は
は

君臨する王者ではない。只哲學は總てに關するが故にかゝる誤解を起す者もあるが、
それは誤謬である。哲學は必らずや科學の自由なる發達を妨げはしない。又その成
果を審判するものでもない。否とよ哲學は總ての現象學の成果を極めて重要視する
のである。かゝる科學成果の優劣を批判するが如き力は哲學には斷じてないのであ
る。されば哲學は一般科學には必らずしも必要としないかも知れぬ。然しながら一
般科學者が、その現象的研究の成果を一步深く思索し、成果たる法則が經驗する事
實と合致すると言ふ事は果して如何なる事であるか、又は吾人の研究する現象學の
目的と方法さては人生觀上何故に此の研究が必要なるかと考ふる時、そこに哲學が
考へ出されないわけにはゆかぬ。即ち科學と言ふものゝ根本的基礎と方法の可能と
言ふ事につきて、自己の科學に反省を加へると言ふ事は自然科學者にとつても必要
不可缺のことであつて、有名なる深き科學者は皆此の點に思索を向けて居る。若し
科學者が自己専門の學を以て一切を説明せんとすればそれは獨斷論に陥らざるを得
ぬが故に、哲學は科學者に取つても必要なものである事は明である。一般科學は一

定の假定方法の上に可能であるが、かゝる假定方法は如何にして立てらるゝものであるか、此處に哲學が科學に先立ちて存する所以である。而して一切の世界觀人生觀を矛盾なく立てると言ふ事は哲學的考察なくして成し得るべきものではないのである。

第三 學問の内容と形式

一、學問の成立

學問は如何にして生れるか、是れが此處に研究せんとする問題である。學問は如何やうに成り立つて居るかと言ふ事ではない。之は本書全部を通じての問題である。此處には認識の意義につきて簡単に述べれば良いのである。

認識は必らずや思惟に依て成立する。科學的なる認識と常識的なる認識との別なく、思惟に依て成立するものである。思惟なき意義の内容は、認識前の状態である。即ち直觀と言ひ體驗と言ふものを背景として此處に吾人の認識なるものが生れる。

認識とは何ぞ、之を簡単に言ひ現はせば、主觀即ち我に對して客觀即ち非我の作用である。認識は要するに直觀とか體驗とかを背景として思惟に依て成立したものである。主觀客觀の未だ分明ならぬ情意状態を體驗と言ふのであつて、リッケルトなども認識以前の経験を體驗と言ふて居る。経験と言ふ事を廣義に解するならば體驗も経験中に包括される事になる。然しながら経験とは客觀的事物の認識であるから、體驗とは異なる如く考へられる。通俗に哲學上の體驗の語を亂用して居るから極めてまぎらしいが、今言ふ如く認識以前我と非我、主と客の區別なき意識されたる内容のみの状態を體驗と言ふのである。

されば認識は必らずや主客の作用に依て成立する、作用以前の状態は認識と言ふ事は出来ぬ。直觀と言ふのは思惟の作用以前で、そのまゝの見方である。靜に受け入れ、靜に映ずる状態である。直觀や體驗が思惟の加工を受けて認識が生れるのである。

認識には今述べた如く認識さるゝ客觀と認識する主觀との要素より成立するので

あつて、認識さるゝ客観とは即ち対象である。科學的対象と雖も常識的対象と雖もかはりはない。之を逆に考へるならば対象は認識作用に依て求めらるゝ事となる。思惟は必らずや或る対象を豫想する。而して認識は可能となる。

學問とは如何にして成立するか、學問は必らずやその背後に認識がある。然し認識は總て學問となるわけではない。學問とならぬ認識もある。然らば學問の背景となる認識とは如何なるものであるか。それは斷定作用を含む高等なる認識作用である。感覺や表象を含む認識作用が之と斷然區別の出来ないのは勿論である。それは素質として含有されて居るからである。そこに明確なる區別を劃する事は出来ないのは心理學の證明する處である。然し學的には嚴密に考察される斷定作用を含む事を必要とする。

學問が常識と如何に異なるかは前述した通りであるが、何れも認識作用を本として成立し、その斷定作用を含む高等なる認識に依て學問が成立する。かゝる精神作用を稱して經驗と言ふ。

經驗は右の如く學問の基礎をなすものであつて、經驗に依存せざる思惟のみの状態、思惟の本質に基づく状態を先驗と言ふ。認識の要素中經驗に依らぬものが存するとする理性論と、總て經驗に依るものとする經驗論とがある。かゝる方面の研究及び認識の本質問題を主として究明するは認識論に屬する。

却説學問の成立につきての概観として、その精神作用の大要は略上述した通りであるが、^{ゲネーテツシユ}發生的に之を考察する事も又必要である。余は前にも言ふ如く、常識が得らるゝまでに得る主観的の知識なるに反し、學問は之を要求し追求する事に依て得らるゝのであつて、前者は一時的の主観的たるをまぬがれぬ。然るに吾人々類の知的欲求はかゝる一時的なる主観的知識に満足する事は出来ぬ必らずや永久的なる確實なる宇宙の眞理を見破らんとする要求の切なるものがある。學問の成立と發達は此の精神に基礎づけらるゝのである。假令學説は變化あり動搖あるを免れないが、學の本質としては斷じて一時的の主観的なる事が出来ぬ。

如何なる民族もその初めは科學と哲學と宗教の一分科として認めて居た。彼等に

取りては宗教は一層根本的なる思索であつた。哲學は實に宗教の概念中に包括されそれを分析し分類せんとする企圖であつた。而して科學は之を驗證し、以てその正否を判斷し、更にはそれを究明し駁論する新方法の發見に存する。吾人が學問發生の時期と認め得る當時に於ては、今日の如く一定の整然たる學問體系を認める事の出來ないのは勿論である。種々雜然たる學が各々その要求に應じて發生し、斯くて永き時代の経過と共に、或る物は消滅し、或る物は合併され、或る物は分離して今日に至つたのであつて、その間に幾多の變遷の跡を残して知識の合流を前進せしめた。而して先づ哲學が宗教より脱し、自然科學が更に哲學と宗教より分離する事となつた。されば古代に於ては天文學、物理學の如きを一の哲學として考へられて居たのであつた。

上述する如く科學は宗教よりその羈絆を脱し、日常必須なる實際的應用方面に於て次第に發展の緒についた。幾何學の如きも陸地の測定と言ふ實用的なる要求に依りて、自明の公理より發し、論理的演繹法のもとに進歩した。動物植物等に關する知

識、農學藥學等に關する基礎も次第に形成されて來た。

學問は如斯常識的階段より次第にその論證を正確にし、對象を整理する事に依りて發展し今日に至つたのであつて、その發達の経路を考察する時、そこに必ずや吾人の求知欲があり、それが實用的に役立つと言ふ事に依りて進歩した。かゝれば對象的に區分整理する、まゝに各々科學分科が分離して來たのであつて、科學分科の發生的考察としては、對象の分離が重要な意義をなしてゐると考へられる。

對象の分離が科學の分類の基礎をなして居る如く見えるのは、科學の發生的考察に於て認められ得る處である。然しながら科學の進歩にとりて對象の分類如何と言ふ事は必ずしも學の根本的要求ではなく、又、それが可能であるか否かも疑問とされねばならぬ事にならざるを得ない。余は第二章に於て之等を詳論する事とした。

二、學問の目的

吾人が今此處に存在すると言ふ上からは、それが何故に存在するか、如何にして存在するか、而して又存在すると言ふ事は如何なる意義を有するかと言ふ事を考へる。若しかゝる事を考へない人間があるならば、その人々には學問の必要はないのである。唯如何なる人もその程度の差こそあれ各々幾分かは考へて居るのである。此の考へると言ふ事、即ち自分と自分ならざる一切を知り度いと言ふ事が學問の起原であり目的をなす根本動機である。

かゝる考へは極めて素朴的ではあるが、考へると言ふ事は何人にもそれ相當にある。而してそれが次第に發展して一の人生觀世界觀に到達すると言ふ事は、學問の最後の目的である。吾人の研究する學問の目的は一に此の圓滿なる眞の世界人生觀の樹立に存すると言ふ事が出来る。

吾人が此處にあると言ふ事を考へる上からは、此處とは何であるかと言ふ事も考へて居る。即ち自分が此處に居ると言ふ事は自分と自分ならざる此處とを考へて居る。即ち自分は主觀 *Subjekt* であり、知らるゝ此處は客觀である *Object* 即ち前者

は能知者であり後者は所知者である。之を哲學的に言ふならば、知る所の我 *Ego* *Ich.* と知らるゝ所の對象 *Gegenstand* とである、而してそれが何故に又如何なる理由に依て吾人に認識さるゝか、換言すれば、經驗の成立の背後にある直觀と思惟との問題、而して何故に又如何にして經驗が成立するかの問題は前項に於て叙述した通りである。

却説、吾人は世界觀人生觀を樹立する上からは、知る必要が起る。主觀が客觀を知るのである。尙主觀たる我自身を知る事も必要になつて來る。即ち學問は此處に生れ、此處より發展する。我が我を知ると言ふ事も我が我を客觀的に見る事である即ち學問には對象と言ふものが必要になつて來る。對象は即ち客觀であり所知者である。即ち物を見るとか聞くとか考へるとか言ふ場合、その見られたり聞かれたり考へられたりする所のものである。總て吾人の精神作用には目的を有するのである。而して知ると言ふ事は知であり、感ずると言ふ事は情であり、何かを欲すると言ふ事は意である。その知り考へ欲する目あてとなるものが所謂對象である。然しなが

ら対象は存在とは別である。無論存在は対象たり得るが、存在しないものも尙學問の対象たり得るが故に、対象とは存在よりも廣き意味を有するのである。

対象は客観としての總てであるが、客観とは今言ふ如く客體の所知者即ち知る感ずる欲すると言ふ主観作用(精神作用、意識作用)の対象となるものであつて、それが物であると心であると、又は實在的であると観念的なるとの論なく、主観から區別さるゝ一切である。故に客観は主観との相關々係に於て之を見なければならぬ。リツケルト Rickett は此の主客の對立に三様あると言ふて居る。A. 自己の身體と精神とより成る自我、即ち精神物理的なる主観、對、空間的外界。B. 全内容を包含した自己の意識即心理的主観に對する超越的客観。C. 内容から區別された自己の意識即ち認識主観に對する意識内容内在的客観である。A. の對立は常識の範圍を出でず、B. は實在論又は觀念論。却説客観とはリツケルトも言ふ如く主観が認識の目的を達する爲に必らず従はねばならぬ所の対象である。即ち客観の概念は対象に依て置換へられる事となる。

客観の意義につきましては諸種の説必らずしも一致しないのであるが、學問論としてはリツケルトの説を以て正しいと見て議論を進めて行つて良からう。理論上より深くそれを究明すると随分複雑な問題も起るが、それは今此處に詳論する事は出来ない。

却説學問は対象を豫想する。対象のない學問はあり得ない。而して対象には種々難多のものがあるが、その客観を總て科學の対象とする事は出来ない。何故とならば主観ならぬ客観は總て學の対象たり得るのであるが、吾人の力はそれ程に無限なものではないのであるが故に、その科學の目的に依て対象は撰擇されなければならぬ。科學者に撰ばれたるもののみが學問の対象となるわけである。

今余は科學者に撰ばれたるもののみが學の対象となり得ると言つたが、之は今少し説明を要する。先づ吾人の經驗世界とは如何なるものであるかと言へば、時間的に及び空間的に極めて廣い範圍に於てあると考へられる、かゝる假定の上に經驗世界が開展して居るのであつて、その總てが時々刻々と移動し變化して居り、その状

態も又多種多様である。かゝれば吾人が圓滿なる世界人生觀の樹立と言ふ事も、無限に多種多様な總てに對して包括的にする事は理想であらうけれども、それはおそらく不可能である。そこで科學分科が現れて各々多種多様な方面より研究する事になる。此の研究すると言ふ事は、その各々の科學目的に依て、對象を或る理由のもとに論理的に撰擇する。科學分科の各々はその科學の目的に従つてその研究の對象を論理的に規定する。此處に注意すべきは對象を分類區分すると言ふ事とはちがふ。對象は分類區分さるゝや否やは後に説くが、此處に言ふ處の對象の撰擇と言ふ事は、此處迄は何科の對象にして此處迄は何科の對象なりと地圖の國別をする如くする事ではない。此の科學はかくかくの目的を有するが故に、それにはかくかくの對象を撰擇すべきであると言ふ論理的規定である。故に一個の對象が甲科學の對象となり更に乙丙の科學の對象ともなり得るのである。要之科學は其目的に依て、かくかくの方面の對象を要求すると言ふのである。

如斯にして科學はその對象を撰擇規定するが、かくして科學はその對象に向つて

進行してゆき、種々の科學分科が現れる。而して物理學と言へる分科は物理學的の世界觀人生觀に進み、倫理學は道德的なる世界觀人生觀に進み、生物學は生物學的の世界觀人生觀の樹立に進む事となるのである。然しながら如斯にして樹立した各々の世界觀人生觀は各々獨立に立てられてゆくが故に、そこに統合と言ふ事がない。即ち最も廣き一般的なる圓滿なる矛盾なき世界觀人生觀は如斯多種多様に分れて居つては樹立し得ない事になる。此處に哲學の仕事がある。哲學はかゝる多方面の世界觀人生觀を統合して一の矛盾なき統一的なる世界像を作るにある。然し誤解してはならぬ。哲學は多種多様な分科の上に君臨してそれを支配しやうと言ふのではなく、分科の依て立つ權利根據を明にして各々の學問の各々の研究をして益々意義あらしめ、更にはその樹立する世界觀人生觀をして確實圓滿ならしめ、依て以てその成果を尊重する事に依て哲學的世界觀人生觀を樹立しやうとするのであるが故に、哲學的世界觀人生觀は諸種の分科の理想とする處と矛盾するものではない。否反つて諸分科の世界觀人生觀をして益々確固たる意義あらしめる事に存するのであるが故に、哲學は諸分

科の研究にも又意義ある事とならざるを得ないのである。

今叙上圓滿なる矛盾なき世界人生觀と言ふたが、その圓滿なる矛盾なきと言ふ事は各々の科學成果が眞でなければならぬ。此の眞理こそは諸科學の目的とする處のものであつて、眞理であると言ふ事は圓滿にして矛盾なき保證となるものであるが故に科學の目的は圓滿にして矛盾なき世界人生觀の樹立、即ち之を換言すれば眞理の追求と言ふ事になる。かかれば科學の目的は眞理追求に存すると言ふ事になる。果して然らば眞理とは何であるか。

眞理 Truth については認識論上三つの見解がある。第一は模寫說 Copy theory, Abbildtheorie. であるが、思考の對象たる實在を完全に寫す時換言すれば思考の結果たる觀念が客觀的實在と、實在相互の間に存する關係とに一致符合し、實在の姿を完全に模寫する時件の觀念は眞なりとする説である。即ち我々の心は平滑なる鏡の如きものと考へ、吾々と獨立に存在するところの外界をそのまま模寫し、而して此の模寫が眞の認識であるとする。然しながら吾人の精神作用なるものは果して實在

を完全に寫象し得るであらうか、此の場合に於ては誤謬の生起し得る理由を説明し得ない。若し又完全に寫象し得ざる場合ありとするならば、觀念と實在との一致は何を標準として之を決定するであらうか。要するに模寫説は素朴的な、認識上幼稚なる見解である。

第二は整合說 Consistency theory, Coherence. である。吾人の思考が論理的思惟の法則に一致し、従つて思考が相互に相整合し、其間に何等の矛盾なきを眞理と考ふるの説である。第三は實用主義 Pragmatism. の眞理觀であつて、實用的なるが故に眞理なりと言ふ。以上の眞理觀の内整合説は最も有力なりと見られる。

カントも言ふ如く、眞理は判斷と實在との一致ではなく、凡ての思考が思惟の法則に従つて又相互に相一致する所に存する。必然にして普遍妥當なる(アプリアリ)原則は經驗を可能ならしむる根本條件であつて、整合説は一切の經驗は思惟の法則に従つて構成せられると説く。即ち思惟の法則は同時に事物の法則であつて、思惟必然性は同時に事物必然性となる。實在は要するに思考の體系であり、換言すれば

一切の眞理は思惟の法則性に其の根據がなければならぬ。整合説の眞理觀は要するに叙上の如くである。

却説眞理とは叙述の如く種々の見解はあれど、要するに眞理の眞理たる所以は、何人も之を認めなければならぬ知識であつて、必然的に普遍妥當性を有する事、吾人の判断は何等かの主張を有して居り眞であると否とは此の主張について言ふのである。此の主張を認め得ざる時は思惟そのもの、成立に反する時、此の主張は妥當的普遍必然性を持つが故に、此の主張が眞理であると言ふ事になる。ヴァインデルバント Windelband は *Einleitung in die Philosophie* に於て超越的眞理 *Transzendente Wahrheit* 内在的眞理 *Immanente Wahrheit* 形式的眞理 *Formale Wahrheit* に區分したが、その所謂形式的眞理こそは時と處と人にと依て、その眞理性を變化せざる、必然的普遍妥當性を有する批判的眞理觀である。

却説上述の如く眞理は形式的批判的にのみ考へられ得られる。而して科學は眞理追求を目的とする事は前に述べたが、却説然らばそれは如何にして追求するのであ

るか。之は科學の方法論に屬する事となるのであつて次項の説明する所である。

科學は眞理追求の爲に對象を撰擇するのであるが、ヴァインデルバント又はリツケルトに依ればその撰擇の方法に二通りあつて、A個性へのみ對象を求めてゆく方法と、B普遍へのみ對象を單純化してゆく方法とであり、前者と後者とは全く反對の方向に認識を進めるのであると言ふ。全く反對の二元主義的な方法に中間範圍を許すと言ふ事も極めて論理的でないけれ共、如斯二元主義的に全く反對なる方向に認識が進むとすれば、自然認識には二様の方向があり、それは眞理の二元主義を許す事になるであらう。眞理の全く反對なる二元主義と言ふ事は果して可能であるか。

之等は本書第二章に於て詳論する豫定であるが故に、それを参照され度いと思ふが、此處に總論として簡単に叙述して見る。ヴァントは經驗科學を二元的に區分して自然科学 *Naturwissenschaft* 對精神科學 *Geisteswissenschaft* とした。彼は精神科學なるもの、基礎と根據を明にし、それが自然現象を研究する自然科学に對して、獨特の位置を占めるものであるとし、それと對等の位置に置いた。然しながらヴァント

の精神科學と言ふものも、實は自然科學の方法と何等異なりはしない。而して又若し自然と精神とを對象的に區分するとすれば、科學の區分は對象を區分する事と同義になり、而して對象の區分そのものが既に不可能になつて來る。對象の異なるとも學の基礎と方法に於て異なるなくむば必ずしも之を區別して研究する必要はなくなる。ウンツが精神科學をして大に系統的に發展した事につきて彼の功績は極めて大なるものがあつたが、それを自然科學の對等の位置に置いたと言ふ事には疑問がなければならなかつた。實際彼自身の此の方面の著述を見ても、それが必ずしも自然科學とは別な方法に依てなされて居るとは考へられない。

ウインデルバントは自然科學に對するものは精神科學に非ずして歴史學であるとし、それを更にリツケルトは發展して、歴史學を廣義に文化科學として提唱したのであつた。彼に依れば精神科學は自然科學に包括される分科として成立し、自然科學と根本的に基礎方法を異にするものは精神科學に非ずして文化科學 *Kulturwissenschaft* であると説くのである。却説然らば自然科學と文化科學とはその基礎と方法を如何

に異にするのであるか。

彼に據れば科學認識に二途の根本的に異なる方向がある。それは個別的なるもの、個性を認める方向と、一般的なるもの、普遍性を有する方法とであると言ふ。而して文化科學は此の個性認識へ進むものであつて、自然科學が進む普遍方面とは全く進むべき方面を異にすると言ふのである。

然しながら彼等の如く個性化と普遍化の二元的に區分すると言ふ如何なる理由があるかと言へば、それは吾人の認識には根本的に反對なる叙上の二種の方法が存すると言ふ假定の上に立つて居る。かゝる假定は果して正しいものであるか。疑ひなき能はずである。彼等は一回限りの一回性とと言ふが、總て如何なる現象も同じと言ふものはない。されば普遍必然なる法則と雖も必ずや一回限りの個性より抽象さるゝのでなければならぬ。而して又普遍性は個性に内在して居るが故に一回起的の個性を認めずして普遍に進む事は不可能でなければならぬ。されば彼等の言ふ如く自然科學の進むべき普遍必然の法則と言ふ事も、必ずや一回起的の個性を認めず

して進み得るものではない。此處に彼等の主張は破産せざるを得ない事となる。何故とならば科學の科學なる所以は普遍必然の真理追求に存する。而して彼等の言ふ如く個性認識と言ふ事は、科學としての第一歩であるが故に、若し個性認識のみに止まる科學ありとすれば、それは發生的に極めて低度の科學と認められ、科學としてよりも藝術に近くなるわけである。

如何なる科學も一回起的の個性を認めないわけにはゆかぬ。それは普遍必然に進む第一歩であるが故に、而して普遍を普遍たらしむる根據は個性に存するが故に、個性を明にせずして普遍に進む事は不可能であらねばならぬ。

以上説く所の如く科學は二途の相異なる方向に進むものには非ずして、必らずや一途の普遍必然性に進むものである。而して尙個性認識に止まる科學も、さては記述に止まる科學も、それは次第に高度の普遍性に進まん傾向を有するものと認められる。一回限りの個性とか、抽象的普遍とか言ふ事を以て科學を二元的に區分すると言ふ事は出来ぬ。一回限りの一回性と雖も尙よく自然科学の對象たり得る。之に

反し、普遍必然性と雖もよく文化科學に存し得る。要は普遍必然の程度が發生的に異なるのみであつて、物理學的法則と雖も、それが絶對的に普遍であるべき證據が何處にあるであらうか。地球上に於ける時間と空間の内に普遍であると言ふ事が、絶對普遍の證據とはならぬ。ましてそれすら疑問ではないか。文化科學の定立する共通性通則性は自然科学の法則と根本的に異なるものではなく、程度の差である。而して何れか絶對普遍を主張し得るものぞ。

前にも言ふ如く科學の目的は圓滿なる矛盾なき世界觀人生觀の建設にある。而して圓滿なる矛盾なきと言ふ事はそれが眞でなければならぬ。更にその眞理と言ふものも批判的に考へられる所の普遍必然性に存する。何人もしか考へ得べくして他の考へ方を許さぬものでなければならぬ。然しながらそれは絶對的のものでなくて相對的のみ考へ得るものである。然らば科學の眞理は蓋し理想であるかも知れない如き科學の目的とする眞理は絶對的のものでなく、批判的にのみ定め得るとすれば總ての科學はその批判的に成る可く一般的なる普遍に進まんとする傾向を有するも

のであつて、リツケルトの文化科學と雖も、個性へのみ進むものには非らずして、一般的法則に進まん傾向を有すると考へられる。現今に於ては尙文化科學がかゝる法則を定立して居らなくとも良い。只かゝる傾向を有する事は認められ得るが故に科學の分類は二元主義的に、絶對反對なる方向に進むものに非ずして、一元的に、次第に高度の論理的法則に進むものである。

以上學問の目的について略述したわけであるが、要之學問の目的は眞理追求にある。而して吾人が世界人生觀を樹立する上からはそれが圓滿にして矛盾なき事を要求する。圓滿にして矛盾なしと言ふ事はそれが眞理でなければならぬ。即ち科學は總て矛盾なき圓滿なる世界人生觀樹立の爲に眞理を追求する處に科學の目的があり方法が規定せられると言ふ事になる。即ち次に學問の方法を考へて見やうと思ふ。

三、學問の方法

總ての學問は常識より發達した。而して常識と學問との關係相異は既に前述した

如く、知識は常識より一步進んだものである。即ち常識が無計畫無方針なるに反し科學的知識は目的を決定し計畫と方針を立て、方法的に進むものであり、組織系統が存する。無論常識に於ても一の組織をなすものもあり得るのであるが、それは科學とは異なる。常識に於ては假令組織的であつても論理的根據がないのである。

却説科學は前にも言ふ如く目的を定め、計畫的に進むのであるが、科學の目的とは何ぞ、それは科學に依て皆異なるものである。目的につきては前述した通りであるが、目的が決定して而してその計畫方針が即ち方法でなければならぬ。然しながら科學の方法と雖もその目的が科學に依て多様なる以上、方法も又異ならざるを得ん事になる。ロイス Royce に依れば一般通則を求むるものとしての科學の研究法は一般に歸納的方法 Inductive Method であつて三つの順序を経て次第に發展する。即ち觀察及び實驗に依て得られたる事實を類似の點に基づきて分類する分類法 Method of Classification を用ふるに止まるもの、動植物學の如きである。次には比較法 Comparative Method 統計法 Statistical Method を用ふる期であつて、地質學に於

ける地層の比較構成、化石の研究比較、心理學に於ける統計的方法の如きである。

此の期に於ける研究は蓋然的であつて絶対でない。絶対確實なる眞理は檢證を経たものでなければならぬ。即ち經驗觀察に依て得られたる事實に基づき、歸納的に因果關係を説明するに足る假説を立て之を檢證する事に依て得られる。經驗と定説との有機的結合に依て、始めて合理的なる科學的知識に到達する事が出来る。ロイスの説は正しいと言はねばならぬ。余は今少し深く立ち入りて究めて見たいと思ふ。

總て科學は實在を豫想する。而してその實在の個々の個物の個性を認識するに始まる。總ての個物は個性に依て存在の意義がある。されば科學は先づその科學目的に従つて實在の多様に種々なる内より、その個性を認め、之を撰擇するのである。

歴史學の如きは即ち此の個性認識の期に存するのであつて、科學としての歴史は個性認識のみ進むものではなく、普遍必然性に進まん爲の個性認識である。若し普遍必然とは反對なる方向に進むと言ふならば歴史は科學でなくなる。何故とならば個性認識と言ふ事は普遍必然の法則定立に進む第一歩であるが故である。個物の個

性を認めずし、普遍が成立するとは考へられない。普遍は個物に内在するものであるが故に、個性認識は普遍と反對なるものにはあらずと言ひ得る。

個性を個性としてのみ意義づけると言ふ事は藝術に近くなる。歴史が藝術と區別され、科學として成立する要求の上からは、歴史の個性認識は必らずや普遍に進むべき性質を有するものとしての個性認識でなくてはならぬ。

總て科學はその對象素材が個性に於て存在する事を認識するのが第一歩である。然しながら吾人の求知欲は只それに止まると言ふ事は出来ぬ。されば經驗に多様な要素より、抽象歸納して以て經驗を可成單純なる要素に還元し、普遍法則に進まんとする。如斯に進まん爲には出来得る限り單純化する。即ち科學は先づ個性認識に出發し、普遍認識に進まん爲に經驗を分析 Analysis する。之が個性認識に次ぐ階段である。もとより常識の階段に於ても、更には個性認識の階段に於ても分析はあり得る。

如斯にして分析した素材は、明瞭な内容を持つた概念にあらはされる。即ち定義

である。定義 Definition と言ふのは嚴密に言へば概念の内包を規定し、之と他の概念との區別を明にするものである。定義は通常定義せんとする概念の直上の類概念 Genus Proximum を挙げ、之に定義せんとする概念を他の同位にある概念と區別するに足るべき特異種差 Differentia Specifica を附加するによりて成り、同一斷定の形式をとる。故に上の方法を適用する事不可能なるもの即ち物、性質の如き最高類概念 Summa Genera 及び個物は論理的に之を定義する事が出来ぬ。

定義には與へられたる概念より出發して、分析的に内包を明かにする分析的定義 Analytic Definition と、概念を構成する過程より出發して、概念の成立を明にする総合的定義 Synthetic Definition 又は發生的定義 Genetic Definition とに分たれる。

却説定義立には一定の必然的法則がある。A. 定義せんとする概念の本質を明にし、即ち直上類概念と種差とを示さなければならぬ。B. 定義は定義さるべき概念と同一の内包を有せなければならぬ。之を換言すれば定義さるゝ概念の内包に非ざるものをその内に含み、又は其の内包の或る者を漏らしてはならぬ。C. 定義は定義せ

らるゝ概念と其外延を一にしなければならぬ。定義さるゝ概念中に含まるゝ總ての場合に適用せられ、他の場合には適用する能はざるものでなければならぬ。D. 定義中に定義せらるべき概念又は之と同意の概念を含んではならぬ。此の規則を犯せば循環論 Circulus in definiendis となる。E. 定義は簡單明瞭にして多義曖昧であつてはならぬ。F. 肯定的斷定の場合に否定的となり、否定的斷定の場合に肯定的となつてはならぬ。

定義は如斯にして或る概念の本質内容を形造る要素を明にするが、かくて多様な對象の内容は明にせられ従つて之を分類し系統的に統合配列する事が出来る。即ち系統的分類 Classification と言ふのは個性認識に次で現はるゝ論理的に一階と高度のものであつて、かゝる方法に依て對象を分類記述する科學を記述的科學 Descriptive science, Beschreibende wissenschaft. と言ふ。動物學植物學礦物學生理學生物學などは所謂記述科學である。

今分類につきて一言すれば、分類は區分に區分を重ね或る事物又はそれに關する

知識を整純して完全なる組織を與へる事であるが故に、類概念を種概念に分つてゆくとは反對に、實在の種類の事物をばそれ等の種類に共通なる性質に基づき一層大なる種類にまとめてゆく事である。分類には二種ある。之は後の方でも言ふであらうが人爲的と自然的とである。リンネの植物分類の如きは前者に屬し、科學的價値少なきものである。分類は自然的分類に依るが正しいのである。自然的分類を一に科學的分類と言ふのは此の理由に依る。例へば植物學に於てもリンネの分類に代ふるにエンゲレル等の科學的分類法が廣く行はるゝのである。然し記述と言ふのは分類記述する事にて、個々の事物の性質をそのまま記載するのではなく、共通性を分類記述するのである。ゼントは記述科學と言はずに系統科學 Systematische Wissenschaft. と言ふ言葉を用ひて居るが (Einleitung in die Philosophie.) 系統的分類と言ふ意味から言へば適切である。

却説此の所謂記述的方法に従ふ科學分科は動植物學であるが、礦物學生理學又は化學の一部は之に屬するのである。今動物學が發展した經路を尋ねて見ると、アッ

ストテレース既に動物を系統的に分類したのであるが、其後動物學は一般に十六世紀に至るまで大した進歩がなかつた。十六世紀に及んで獨逸のゲスネル Konrad Gesner は動物學書五冊を著したのに次で、英のハーヴェー Harvey は血液循環を發見し、伊のマルピギー Malpighi、和蘭のレーヴェンフック Leeuwenhoek は顯微鏡に依る種々の發見あり、和蘭のスワンメルダム Swammerdam の昆蟲の習性發生及蛙の發生の研究あり、又レーレイ Ray は英國の學者であるが始めて種の説を論じ、十八世紀瑞西の有名なる學者リンネウス Linnaeus は動物の系統的分類を試み、動物の名稱を一定して拉丁語にあらはし、始めて動物系統學を大成した。此處に於て動物學者は主として動物の蒐集と分類記述に對して努力するやうになり、十九世紀に於ては佛國のキュービエー Georges Cuvier 比較解剖學及び古生物學の研究によりて植物を分類し、後世比較解剖學の祖と稱するに至つた。次に佛國のラマルク Lamarck は動物進化の説を提唱して動物研究に一新紀元を作り、獨逸のシエワン Schwann は解剖學者として細胞を發見し、マックス・シュルツ Max Schulze は植物の原形質は動

物のそれと同一なる事を断定し、一八六一年ダーウインは有名なる自然淘汰による動物の進化を説いた。かくて動物學は次第に内部組織に注意するやうになり、今日の發達を見たのである。今日の動物學は大凡次の如き諸分科に區別せられて研究されて居る。

- A. 動物構造學 Structural zoology.
1. 形態學 Morphology.
 2. 組織學 Histology.
 3. 發生學 Embryology.
- B. 動物生理學 Zoological physiology.
- C. 動物系統學 Systematic zoology.
- D. 動物地理學 Zoogeography.
- E. 動物生態學 Animal ecology.
- F. 古生物學 Paleontology.

其他、優生學、原生動物學、實驗動物學、動物心理學、海洋動物學等何れも動物學分科として成立して居るのである。植物學に於ても殆んど同様なる分科として研究されて居る。即ち形態學、解剖學、生理學、分類學、分布學、生態學、化石學、病理學、應用植物學等の如くである。

動植物學は生物學の名に於て總稱せられ、更にはその生活機能を研究する生理學がある。生物學は生命學なりと考ふる人もあるが、生命學は生物學の一部門として見られ得るのであつて、ハックスレーの如く、生物學は生物を對象とする科學の總稱と見るのが正しいと思はれる。

以上記述科學は要するに分類記述を目的とするものにして、それが科學としては發生的に次第に高度の科學に進まん傾向を有するものと考へられ得るのであつて、科學の目的たる普遍必然の法則を定立せんとすれば、更に高度の説明科學に進まなければならぬ。

もとより記述學はそれ自身として自由に研究發展するものであるが、科學の理想

は分類記述に止まる事は出来ぬ。法則を定め假説を立て、真理の殿堂の扉を開かん鍵は尙遠く高き位置に置かれてあるもの、如くに見える。そこで次第に抽象の歩を進め、抽象に抽象を重ねて可成一般的な簡単な概念へ進んでゆかうとするのである。如斯絶對的普遍必然なる法則 Gesetz へ抽象の歩を進めてゆく方法を歸納法 Induction と言ふ。科學がその目的理想とする真理の殿堂の扉は此の歸納法に依て開かれる如く見える。即ち歸納的に法則定立を目的とする科學を一般に説明科學と言ひ物理學及び化學は之に屬するのである。説明とは歸納的に定立した法則に依て、今度は逆に演繹的に現象を説明するが故である。現象より抽象歸納された法則は普遍必然の一般概念として超經驗的現象をも規定し得るものと考へられる。或る特定の現象が起れば、いつも同様の結果を來すと言ふ因果關係に依て未だ經驗せられざる現象をも説明する性質を有する。物理化學などは即ち此の法則を立て現象界を説明しやうとするものであるが故に、之を説明科學と言ふのである。換言すれば歸納的に定立した法則が、逆に演繹的 Deduction に現象を説明 Explanation するが故である。

歸納法は如斯科學の方法として重大なるものであつて、説明科學は唯此の方法に依て完成される如く見える。如斯にして立てられたる法則は一般的原理として特殊の事實又は原理を説明するが故に、因果的には經驗外の事をも規定する力を有して居る。物理化學等は此の説明科學の代表者である。

物理學は十七世紀に及びガリレオ Galilei、ニウトン Newton の力に依て實驗觀察的に數學を基礎として大に發展し、十八世紀に於ては電磁氣に關する發見あり、エネルギー不滅の説かるゝあり、十九世紀レントゲン線の發見に次で、二十世紀に及びラヂウムの發見せらるゝに及び物理學は此處に放射現象なる新領土を開拓し、其後ローレンツ Lorentz の電子論、アインシュタイン Einstein の相對性原理、プランク Planck の量子説等相次いで出で、ニウトンの物理學は全く新しき概念のもとに書きかへらるゝの機に到達したのである。化學は十七世紀ロバート・ボイル Robert Boyle が系統的に研究したのに依て一段と組織だてられ、ボイルの定律を立て、元素と化合物とを區別した如きは彼の大なる力であつた。當時シュタール

Stahlの燃焼によるフロジストン Phlogiston 説盛行はれ、當時の化學をフロジストン時代と言ふ。然るにジョセフ・プリーストリ Joseph Priestley 及びシエーレン Scheele は酸素を發見し、ラヴォアジエー Lavoisier はそれに依て燃焼を化合作用として説明し、物質不滅論を説いた。次でジョン・ドールトン John Dalton は物質の化合に量的關係ある事を發見し、一八〇七年原子説を公にするに及びてゲールサック Gay-Lussac アボガドロ Avogadro 之を補ひ以て近代化學の基礎此處に成るに至つた。

化學は普遍には理論化學——物理化學——を化學量論、化學力論に區分して研究されて居る。從來有機化學と無機化學とに區分されて居た事は、現今に於ては論理的に誤謬である事が證明せられ、一の便宜的區分としての名稱にすぎざる事となつた。それは丁度一八二八年ヴェーレル Wohler が有機物の一種なる尿素を發見人造してより、有機無機の根本的區分はなくなり、現今に於ては炭素諸化合物を研究するを有機化學と稱し、便宜的にその名稱を存するに限らるゝに至つたのである。

以上説明科學は法則定立を目的とし、更には此の法則を以て一般現象を説明 Erklarung. Erklarung せんとするものであつて、記述科學が現象に於ける定義定立を目的とし分類記述に依て對象を統合しやうとしたのに次で、今度はそれを一段と論理的に高度の位置に歸納し、一の普遍必然なる構成概念を定めやうとするのである。然しながら説明科學と雖も分類記述がないとは言へない。更に記述學と雖も説明に關するが故に、發生的には又それが當然なるが故に、記述とか説明とかは根本的に確然と區分さるゝものに非ず。要は科學の發生論的程度の差と言ふを得べきものであると思はれる。

科學は如斯、常識に起り、個性認識より、記述學、説明學に及んだのであるが、更に抽象的に、現象の問題を離れ、その理論方面形式方面に及んで研究さるゝやうになり、此處に抽象學が現れる事になつたのである。抽象學は右に述べた如く、根本的に現象に關しないのではなく、抽象學が成立する迄には必らずや抽象的に現象より發展したものである。然しながら、抽象に抽象を重ねると、その度に比例して

現象より遠ざかる事となり、幾何學の如く、抽象科學としての代表者が現れる事になつて来る。而して發生論的に考察すれば抽象學と雖も現象に關するのであるが、その取扱ふ處は抽象された形式に關するが故に、之を形式學と言ふ事も出来るのである。

以上説く所の如く諸科學は發生論的に四つの階段に統合配置さるゝわけであつて、それは確然と區分する事は不可能であるが——それは發生論的に當然な事ともはれるが——總て常識の階段より次第に高次の科學に進み、個性の認識にはおまゝり、記述、説明の域より抽象の域に進んだのである。かゝる意味より言はゞ總て科學は高次へ高次へと進む傾向を有するものと考へられる。即ち之を總括すれば、

- A、個性科學 Individual wissenschaft.
- B、記述科學 Beschreibende wissenschaft.
- C、説明科學 Erklärende wissenschaft.
- D、抽象科學 Abstrakter wissenschaft.

以上は科學の論理的發生的見地より考察したものであるが、その科學目的に依て自然方法が規定せられるわけであつて、右の四階段の如きは一の方法的の進化發展とも見られない事はない。即ち方法上は、

- A、蒐集分析——個性認識
- B、分類記述——定義定立
- C、歸納——法則定立
- D、抽象演繹——形式構成

叙上の説明は科學方法論として極めて簡單であるが、要之總ての科學は右の四階段に包括され、個性認識學に於ては歴史があり、次第に高次の抽象學に及びて、眞理追求の爲普遍必然の概念に進まんとし、動植物學は生物學へ、生物學は生理學へ而して生理學は化學へ、化學は物理學へ、更に物理學は數理學へ還元せられやうとして居る。余は以上説く所を更に詳細に研究せんと欲し、次章以下を説く所以である。

第二章 學問大系

第一 科學分類の沿革

科學とは何ぞ、科學とは如何なる形式をそなへて居り、如何なる内容を有するものであるか。余は此處に余の科學系統案を述べんとするに先だち、古來より多くの哲學者に依りて如何に觀察され來つたか、而して又其多くの科學系統が如何に特質を有し、缺點を有して居るかを知らる爲、古來より有名なる科學分類の沿革を略述し之に短評を加へんとするの必らずしも蛇足ではあるまいと思ふ。

科學分類は極めて古くより試みられて居た。即ち希臘時代に於て、プラトーン Platon. アリストテレス Aristoteles が有名なる學問分類を行つて以來、現今に至る迄、種々の人々が様々な標準に依て、其の當時存在して居た學問（科學と言はずに學問と言つて置く、それは古代に於ては現今の如くに科學と嚴密な意味に於て言

び得ないものもあつて、現今の既成科學と比較する事は到底出來ない。）を分類したものである。然し當時に於て諸學の分科未だ十分に發達して居らず、その不完全なる諸學問を對象として分類したものであるから、現今より見れば極めて幼稚なものであると言はなければならぬ。只現今の科學分類も、かゝる幼稚な時代から次第に發達して來たものであるから、太古よりの分類の諸法を研究すれば、現今の諸科學の系統と特徴を知るに便利な點が多い。余は極めて大略述べる事とする。

傳ふる處に依ればプラトーンが科學を分類したのが最も古いと言ひ得られる。彼の區分は次の如く精神能力 Geistesvermogen. の三種の區別から考へ出された。即ち三能力に従つて三つの學問が成立する。

A、概念的認識——辯證學 Dialektik.

B、感性的知覺——物理學 Physik.

C、意欲及願望——倫理學 Ethik.

彼の著書對話篇 Dialogues. の中に、自ら此の三學に關する著述の分れて居る事

を見てもわかる。即ち、

- A. Dialektik——Theaetetus, Parmenides, Sophistes.
- B. Physik——Timaeus, Phaedo,
- C. Ethik——Republica, Politicus, Philebus, Gorgias.

辯證學は實在の本質及概念を研究する學問であつて、形而上學、論理學、認識論等を含む。物理學は感性の對象たる自然現象を研究する學問で、自然科学、自然哲學、心理學を含む。倫理學は今日の倫理學の如く、人間の道德行爲を研究する學問である。

以上の分類はプラトンの學問分類として傳へられたものである。プラトロン自身が如斯明確に區分して居つたのであるか否かは別問題として、門人クセノクラテロス Xenokrates に依て明にされたものである。クセノクラテロスはプラトロンに及び、アカデミーを主宰したが、ピタゴラス Pythagoras. 的の神秘的宗教的要素が多い。彼に依れば感覺界即ち下界、天界、叡知界の三界に應じて、認識は知覺と表

象と思惟とに分たれる。而して眞の認識を供するは思惟であると考えた。彼はプラトンの學問分類を前述の如くに表示したのであるが、此の三つだけではプラトロン學派 Platonisten の有する總ての學問を包含せしめる事は出来なかつた。次にアリストテレス Aristoteles. が之を改定したのである。アリストテレスはプラトンの分類より進んでそれを大成したものと云ふ事が出来る。彼は學問的活動の目的 Zweck der wissenschaftlichen Tätigkeit から分類して、

- A、理論學 Theoretische Wissenschaft.
- B、實踐學 Praktische Wissenschaft.
- C、詩學 Poetica.

の三區分を立てた。之に依ればプラトンの辯證學及び物理學はAに、倫理學はBに屬する。Aは眞を對象とするものであり、Bは善又は有用を對象とし、Cは美をその對象とするのであつて、之に加ふるに諸學研究の豫備として論理學 Logicを

以てしたのが彼の哲學の體系であつた。アリストテレイスの主著を彼の學問體系に
配當すれば次の如くなる。

A. 論理學

「範疇論」 *Categoriae.*

「命題論」 *De Interpretation.*

「分析論」 *Analytica.*

「蓋然論證論」 *Topica.*

「似而非推理論」 *De Sophisticis elenchis.*

後世之等諸篇を集めてオルガノン *Organon.* なる總稱のもとに編纂し、今日此
の總稱に於て傳へらる。

B. 理論學

「形而上學」 *Metaphysica.*

「物理學」 *Physica.*

「動物史」 *Historia animalium.*

「靈魂論」 *De Anima.*

「天界論」 *De Coelis.*

「氣象學」 *Meteorologica.*

C. 實踐學

「ニコマコーコス倫理學」 *Ethica ad Nicomachum.*

「オイクシモモス倫理學」 *Ethica ad Eudenum.*

「大倫理學」 *Magna Moralia.*

「政治論」 *Politica.*

D. 詩學

「詩學」 *Poethica.*

「修辭學」 *Rhetorica.*

右の内ニコマコーコス倫理學はアリストテレイスの子ニコマコーコスが初めて公にし

たと傳へられるもの、オイデーモス倫理學は彼の弟子オイデーモスがその筆寫に基づきて編したるもの、大倫理學は前二者を拔萃せしもの、政治論は應用倫理學である。

要之アリストテレイスやプラトーンの學問分類法の如きは、其當時に於てこそ重要な意義あるものであつたであらうけれ共、當時未だ學問の分化明瞭ならず、特殊科學の研究が各々獨立的地歩を占むる能はず、現今の科學的觀察を以て批評を下す事は到底出來難いのである。科學研究が次第に發達し、科學の分化獨立完備して來た近世に於て、極めて論理的な分類をしたのはフランシス・ベーコン Francis Bacon である。故に以下ベーコン以後の諸説を略述する事とする。

ベーコンは一六二三年 *De dignitate et augmentis scientiarum* に於て此の大科學系統案を説いた。彼は科學分類の標準を夫々の科學研究に必要な精神能力の差別に置いた。彼の考に依れば眞の知識を得るには學問體系の根本的革新と先入的偏見の根本絶滅とを必要とする。如何なる科學研究も總て知的活動であつて、科學は知

的世界を形象するものである。新しき基礎の上に知識を確立せなければならぬ。爲之彼は *Idola* に依て傳承的迷妄よりの解放を力説した。*Idola* が悉く除かれた後その地盤に於て新たなる歸納法を用ひるならば此處に初めて眞の知識が獲得される。吾人は書齋より出で、大自然の中に突立ち、自然を知り之を利用すべきである。如斯にして自然の原因と法則を知るには、觀察と經驗に基づく *Induction*. なるを要する。此の歸納法が自然認識の眞方法である。知は力である。*Scientia est Potentia* 純理的の研究定まつて、而して應用科學起る。科學分類に於ても主として純理的に強固なる基礎を立つべきである。それ故に彼は心理的に一切の人間の知的能力の主形式たる記憶、想像、悟性に對應して、史學 *History* 詩學 *poetry* 理學 *Philosophy* の三種に區分し、如斯にして諸種の科學を何れか此の三種に包含せしめやうとしたのである。

A. *History* ……(記憶)

B. *Poetry* ……(想像)

C. Philosophy... (亞略)

史學は分れて人類史と自然史となり、人類史は更に區別されて教會史、政治史、文學史となる。之等は要するに人間の記憶と言ふ能力に依て生れるものであつて、歴史及詩を科學と見て居る。今之を表示すれば、次の如くである。



理學は分れて自然神學、宇宙論、人類論の三つとなる。今日の哲學はもとより、科學の大部分を包含する大部門で、此の科學分類中最重要なる處である。之等は人間の悟性と言ふ能力に依て生れ出る諸科學である。宇宙論は次の如く區別される。



人類論は更に區別されて個人的のものと社會的のものとなり、前者には生理學と心理學が入り、後者には政治學が入る。即ち、



以上はベーコンのなした科學分類の概要であるが、彼が十七世紀の初葉に發表した此の分類法は、十九世紀に至る迄殆んどその儘襲用せられ、尙現今に於ても全く捨てられず、輒近科學分類の根底となり豫備となつた事を思へば、此の科學分類には極めて重大な意義がなければならぬ。即ち彼の立てたる科學分類は、諸種の科學

の特色を比較的正確に認識し、それに依て系統を立てたものであるから、十九世紀に於ける自然科学の一大進歩するに及んで、その分類に不完全なる點を認められては來たものゝ、約四百年の長さ、殆んどその儘襲用され、現今の完全に近い科學分類の基礎をなした事を思はねばならない。彼は悟性能力に依る科學としての理學に、生理學と心理學とを區別し、自然科学に於ては記述科學と説明科學とを區別し、後者に物理學と化學を配した點は確に達見と言はねばならぬ。

併しながら此の科學分類には根本に於て一個の難點を持つて居る。それは吾人の記憶想像悟性と言ふ精神能力を分類の標準とした事である。先づ詩が科學であると言ふ事である。ペーコンに依ればそれは想像に依るものであると言ふが Poetry と言ふ事は散文に對して律語の文學を意味し、戯曲、抒情詩、叙事詩の三形式がある。即ちかゝる文學的の創作を意味するものであるならば、それは科學とは言ひ得ない事となる、詩の藝術的特色は、ヘーゲルも言つたやうに、音樂と同じく聽覺に訴ふる形式的の側面と、他方に於ては造形美術の如く對象を表現し、描寫する内容的の側

面とを有し、従つてそれ等が総合的の位置にある。詩を特種の對象として、特にその形式的方面を研究するところの詩學 Poetik なるものはあるが、それはかゝる科學の大部門として獨立する科學とは稱し得ない。又假令かゝる科學が成立すると假定しても、それは單獨に獨立すべき科學ではあり得ない。而して又若しペーコンが言ふ如く、文學の理論方面を研究するもの、又は文學の心理的社會的方面の事を研究するものならば、それは明に悟性に依るべきものであつて、想像に依るとは考へられない。想像に依ると言ふからには、それは文藝的の創作を意味する事になり、果して然らば科學として價值づける事は不可能である。又そんなものが理學や史學と對立するとは考へられない。

次に歴史が記憶であり、理學が悟性であると言ふ事であるが、理學と言ふものが生理や心理又は物理や化學の如き、今日の所謂自然科学なるものを指すのであれば、悟性のみ依る事不可能であり、過去の事象經驗を記憶し、その普遍的要素を以て將來に及ぼさうとするのであつて、そこには記憶も必らずや必要になつて來

る。記憶を離れては自然科学もその素材を得る事が出来ぬ。要するに彼の分類はその人間の精神能力に依て區分すると言ふが、それが根本的に原理上の誤謬である。

次に宇宙論に於て自然科学と純正哲學とを對峙させて居るが、之等が宇宙論に屬し、理學に連ると言ふ事は考へられぬ。純正哲學が宇宙論に屬すると言ふ事は不自然非論理である。

詩學が科學分類の内に歴史や理學と對峙して入ると言ふ事の本合理な事は前に述べた。只此處に注意すべき事は、詩學を除けば史學と理學と言ふ二個の對立となると言ふ點に於て、假令その細部は異なりとするも、西南獨逸派の自然科学對文化科學の主張に似通つて居る。西南獨逸派の所説は本書の後の方で言ふが、然し假令理學と史學の二科學があるとしても、それは記憶とか悟性とかと言ふ精神能力で以ては區別し得られないのである。

次に考ふべきは史學である。史學が單に記憶に依てのみ成立するものでないと言ふ事は、過去の記憶そのまゝが歴史でないと言ふ事に依て明である。過去の記憶そ

のまゝならば、それは何處迄も記憶であつて歴史とは言ひ得ない。又人類史に對して自然史を置いたが、自然史の如きものは進化論か乃至は博物學の如きものであつて、そんなものまでも History と言ひ得るか否かは疑問である。更に又人類史と言ふ部門に教會史、政治史、文學史を配して居るのであるが、かゝる分科は人類史と稱し得べきか、かゝる方面の歴史は人類史に非ずして人間の文化史には非ざるなきかを疑ふ。人類史とはかゝる文化史とは異なり、自然科学的なものとはならないか。要之ベーコンの科學分類は缺點が多いのであり、現今の諸分科を配する事到底不可能である。

十八世紀佛蘭西啓蒙期の哲學者なるダランベル D'Alambert がデイデロー

Diderot 等と共にエンチクロペディ Encyclopedie ou dictionnaire raisonnée des sciences, des arts et des métiers. を編纂し、(彼等を普通、百科全書家と言ふて居

る) 彼自身序文を草し、且つベーコンの處に於て彼自らの學問分類を擧げて居るのであるが、大體に於てベーコンの分類を襲用して居り、只詩學を科學より分離し、

數學を自然科學に配した事に於て幾分ベリコンの分類を訂正した。彼等エンチクロペディストは啓蒙思想を通俗化し、一般人の蒙を啓き、教科を普及した學者としては力があつたが、學說としてはさほど深い何物もなかつたらしい。只流石は數學者であつただけ、兎に角自己専門の立場から數學をして科學的位置を與へた事は遠見であると言ひ得られる。然しそれが自然科學に屬するか否かは別問題である。

十九世紀に於て科學分類を企てた學者は少くはなかつた。ベンザム、アンペール、コムト、スベンサーなどは其主なる者である。

ベンザム Jeremy Bentham. (1748—1832) は英國の法學者で功利主義の倫理學者である。彼は最大多數の最大幸福 "The greatest happiness of the greatest number" を倫理的行爲の標的として功利主義の倫理學說を組織した事に於て有名であるが、彼は科學の對象を二種とし、自然科學に對するものは精神科學であるとしたのは後の科學分類に影響する處が多かつた。

彼は科學の對象を二種に區別した事は右の如くであるが、それはあそらくヴント

Wundt のなした處と等しと言ひ得る。即ち自然科學は Somatology を精神科學は Pneumatology. を各々その研究の對象とする科學であると主張するのであるが、要するに彼のなしたる科學分類はヴントと等しく對象的區別であつて、對象の區別をする事に依て、二つの科學が成立するものであると考へたのである。後にヴントの處で説明する如く、かゝる分類の不合理なのは論を俟たない。ヴントもあそらく彼に影響されたものであらう。

アンペール Andre Marie Ampere (1775—1826) は佛蘭西の物理學者で "Essai sur la philosophiedes sciences" を著し哲學的意見を述べて居る。彼に依れば學問は二つに區分される。即ち、

A. Sciences cosmologiques.

B. Sciences noologiques.

而して其細部に渡つて極めて詳細に分類して居るのであるが、彼に依れば本體 noumenaとは物の恒常的關係の根底たる實在で、吾々の認識作用は事象間の關係に

依て表象の結合される事であると説く。要するにアンペールの科學分類も Cosmologiques に對して、精神 Noologiques が存在し、物質と精神とを對立せしめる點に於てペンザムと變りはない。二元的對象的區別である事は明である。

ベンザム、アンペール、共に二元的科學分類を立て、自然科學に對して精神科學を置いたのである。彼等の區分には今より考ふれば不合理な點が存するのであるが、精神科學を認めたと云ふ點に於てヴントの科學分類に影響したと言はなければならぬ。兎に角當時に於ては自然科學こそは非常な進歩をして來て居つたが、精神科學に至つては各々分科が極めて不完全であつて、一個の立派な獨立科學としては分明でない點が多かつた。それ等自然科學に屬しないものが總て精神科學に屬するや否やは疑問であり、假令精神を研究するものを精神科學と言ふにしても、それは自然科學的認識と異なるものではない如く考へられる。若し左様でありとすればそれは原理上自然科學に對するものではなくなり、現今に於ける心理學の如きは、精神科學として獨特のものであるが、それは自然科學の一分科としての位置を有する

ものである。故に精神科學は自然科學に對立するものではないが、然しそれは別問題としても、要するに精神科學なるものに重要な位置を認めたる事は否むわけにはゆかぬ。

ユムト Comte, は一八三〇年に於て一種の科學分類を發表した。彼の科學分類は分類と言はむよりは體系と言ふが當然かも知れない。彼は佛國に於ける傳統主義と啓蒙哲學及びその結果なる革命の失敗を、その個人主義の咎に歸した。社會を根本的積極的に救済するのには一切の生活々動の根本的支配者たる普遍妥當なる實證的純知的科學の原理に依らなければならぬ。實證論の哲學は彼の唱導する處であつて、社會や歴史の本質は物理や數學と同じく實證的精密科學として説明するに及んで、社會や生活々動の混亂は救はれると彼は考へた。

彼は學問の發達に三階段ありとし、第一に神學的、第二に形而上學的、第三に實證的であると言ふ。而して實證的科學の系統順序、即ち彼の科學分類は單純なる事實を取扱ふ學問より次第に複雑なる事實を取扱ふ者に及び、數學に初まり星學、物

理學、化學、生物學（心理學を含む）を経て社會學に至るのであつて、彼に依れば學問研究の精神作用は同一であるべき筈であり、精神能力とか對象の區別とかと言ふが如き事を以て分け得られるものでないと言ふ。即ち此の理由に依り、彼は一元的直線的に排列するより方法はないと主張する。即ち

數學——力學——星學——物理學——化學——生物學——社會學

單純な普遍的なものから、漸次複雑な特殊性を増してゆくにつれて系統は進んでゆくのである。單純なる現象は複雑なる者を形成する要素であり基礎である。然しながら複雑な階段はそれまでの要素（單純な階段の）合成たる以上に新しき要素を含むが故に、單に單純なるものから、直ちに複雑なるものが導き出されると言ふ事は出來ない。例へば生物學は社會學よりも單純であるから社會學の要素をなすが、逆に社會學は決して生物學的關係に盡きずして新しき要素を含んで居ると言ふのである。彼の科學系統案は確に一種獨特のものである。

彼が心理學を生物學中に認めた事についてはスペンサーに於て非難があるが、之

は後にも述べるけれ共、只單に不合理なりと斷定する事は出來ぬ。無論先驗心理學なるものは生物學と關係がない。然し普通の經驗的自然科學的心理學は生理學と極めて近い關係にあるものである。コムトの如く心理學を生物學中に認めたと言ふ事は極めて意義ある事であり、必ずしも不合理ではないと信ずる。只心理學特に精神科學なるものは現今に於ても極めて旗色鮮明でない科學であるから、之は此處に論じないで後に記述する事とし、要するにコムトの心理學の位置については、余はスペンサーに反しコムトに賛する事を述べて置く、尙スペンサーはコムトの此の點を批評して置きながら、スペンサー自身の科學系統中には心理學を生理學の次に持ち來つた事である。かゝる意味に於て言ふならばスペンサーが史學を社會學に包含せしめた事こそ問題となる。

更に又コムト案に對してスペンサーは抽象と普遍とを混じたる如く批評するが、コムトは必らずしも兩者を混同して居らぬ。無論普遍は抽象と同じくはない。が然し普遍は個々の個物に内在して居る。絶對的普遍は科學の理想であるかも知れない

が個物に内在する普遍性を抽象する事に依て科學的目的に進むのであるから、そこに不可分離の關係を認めなければならぬ。かく言へばとて余は根本的にコント案を賛する事は出来ぬ。例へば果して如斯科學の順序が正しき系統なりや否や、更に又星學がかゝる位置に配置さるべきものなりや如何。余の主張は後の方に於て述べんと欲するが故に此處に略する。(Cours de Philosophie positive I)

スペンサー Herbert Spencer は右に述べた如く、コムト案に反對し、直線的系統案を捨て、群團式系統案とも言ふべき一種の科學分類案を建てた。彼の此の方面の研究は "On the Genesis of Science" を見ればよく彼の主張を知る事が出来る。

A、抽象群——數學——抽象力學

B、抽象及具體群——具體的力學——物理學——化學

C、具體群——星學——地質學——生物學——心理學——社會學

此處に一つの疑問を提出するならば、コムト乃至スペンサーの如き系統案に於て現今の諸分科を總て斯如配置する事が可能であるかと言ふ點である。余は疑ひなき

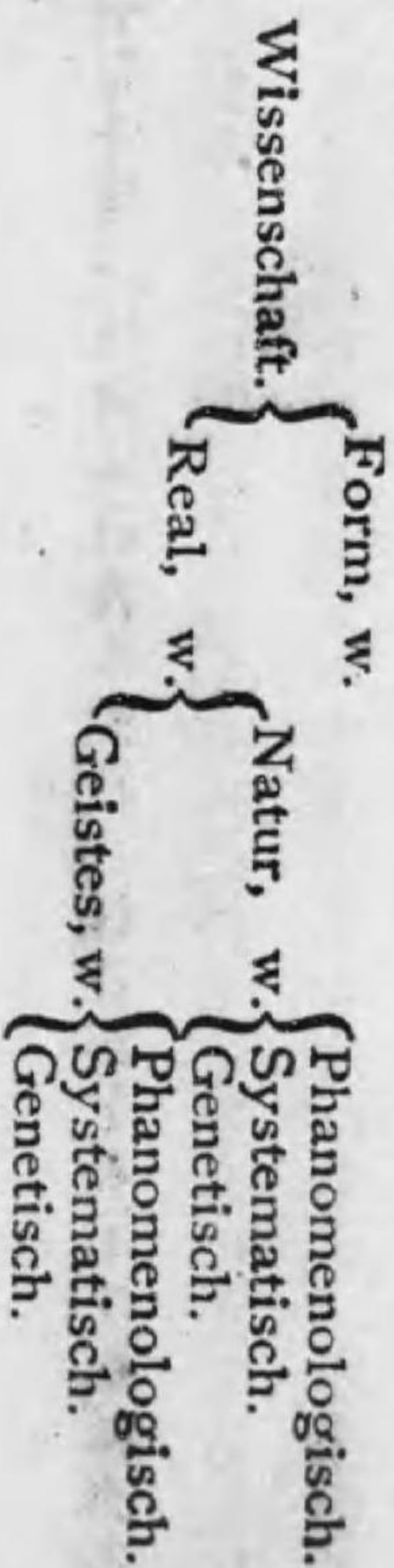
能はずである。現今の諸分科は、その多くが一の明瞭なる系統案に配直さるゝ程に旗色鮮明でない。おそらく將來に於ても明確にかゝる系統案に直線的に簡より複に一絲亂れず整合さるゝものでないかも知れない。現今の多數の分科をかゝる意味に於て系統立てる事はおそらく困難であらう。要之かゝる簡単な系統案の如きは、到底複雑なる現代の諸分科を配すべく十分でない事明である。

スペンサー案を批評すれば、彼は抽象及具體群と言ふ極めて矛盾した科學の一團を作つて居る事である。而して又彼が具體群中に配した分科は抽象と無關係無交渉であらうか。特に歴史を社會學中に包含せしめた如きは正しいと言ふを得ない。之を現今の科學分類派の説に比較すれば、抽象群とは先驗的科學であり、他は經驗的科學に當るのであつて、此の兩者の區別の當否は別問題としても、抽象及具體群と言ふ如き言葉の間に既に矛盾の存する群團を認める事は不合理であると思はれる。

以上十九世紀迄に於ける重要なる科學分類の沿革を大要叙述したのであるが、之

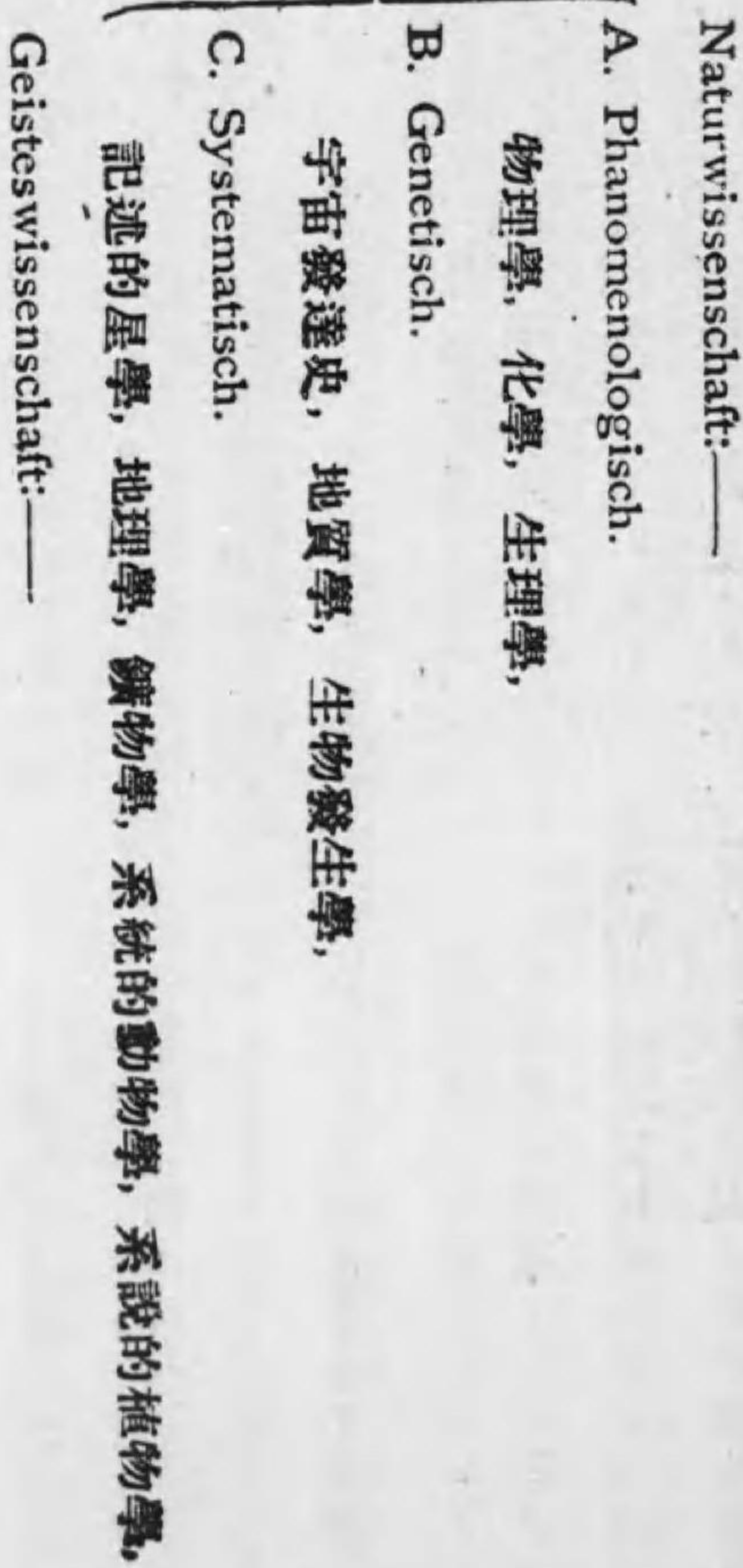
等の諸分類を論理的に組織して包括的な大科學分類をしたのはウイールヘルム・ワント Wilhelm Wundt である。余はワントの研究の概要を叙べその特徴と缺點とを考へ度しと思ふ。

ワントは先づ科學を二つに區分した。第一には先驗的形式的の科學 Formwissenschaft. 第二は實質的經驗的の科學 Realwissenschaft. である。前者には數學が配られ、後者は更に分れて自然科学 Naturwissenschaft. と精神科學 Geisteswissenschaft. となる。自然科学は精神科學に對立し、各々は分れて三つとなる。即ち現象論的科學 Phänomenologisch. 組織論的科學 Systematisch. 發生論的科學 Genetisch. である。而して各々の科學は總て此の三つに包括されるのである。今之を表示すれば次の如くなる。



このワントと彼のライントアルハントとは別なることを注意すべし

今各分科が如何に前表に配置されるかを表示すれば次の如くなる。



C. Systematisch.

系統的法理學，系統的經濟學，

(Wundt, Logik II; Einleitung in die Philosophie.)

ワントは先づ科學を先驗的形式的なるものと經驗的なるものとに區分し、前者に數學を配した。之は從來の科學分類に於て見る能はざる新しき方案であると言ひ得られる。彼のエンチクロペディスト等が科學分類中に數學を加へ、それを自然科學中に置いて以來、多くの學者は數學をもつて Naturwissenschaft. として取扱つて居たものであるが、ワントは之を經驗的實質的なる自然科學から分離して、Apriori なるものとして之と對等の位置に置いた。

數學は自然科學の如く經驗的實質的なる實在界を對象として居るのではない。又その眞理は經驗に依て興へられず、經驗の可能に束縛せらるゝものではないのであるから、之を經驗的實在界を對象とする自然科學と見る事は誤りであると言ふのである。彼が數學を抽象的形式科學として先驗的の位置を興へたのは此の理由に依る。

ワント乃至は現今の多くの科學分類派の人々は、數學を以て先驗的の科學であると認めたとである。數學は之を發生論的に考察するならば自然科學と深い關係があると言ひ得られる。即ち數學と雖も經驗的に自然科學に關係して發達した。數學が獨立する迄には之等經驗的實在界から抽象せられなければならない發生論的因果關係があつた。然し論理的に考へるならば自然科學とは全然獨立なものでなければならぬ。自然科學としては數學を根底とする事はあるが、數學は自然科學を豫想する事はない。即ち數學は實質的經驗科學 Reale Wissenschaft に對して形式的先驗科學 Formale Wissenschaft と考へられ得る。此の理由でワントは數學先驗説を説いたわけである。

次に再びワントの科學分類に戻り、彼に依り經驗科學が如何に區分せられたか。先に示した通り、二元的に Naturwissenschaft. v. Geisteswissenschaft. に對立的に區分されたのである。即ち自然科學も精神科學も共に經驗的事實であるが、それは經驗を把持する主觀(精神)と所與としての客觀(自然)とである。そこで前者を研

究するのが Geisteswissenschaft であり、それは吾人が直接経験を対象とするのであるが、後者を前者から引き離し、客観的経験内容として研究するものは Naturwissenschaft であると言ふのである。即ち前述する通り Naturwissenschaft は客観的間接的経験學であり、Geisteswissenschaft は主観的直接的経験學である。

次にヴァントは諸多の科學を此の二大區分に配するに前述した三つの細別に依た。即ち A. Phänomenologisch. B. Genetisch. C. Systematisch. である。A は現象の解釋をするもの、C は組織的に配列するもの、B は A C を結合するとも見るべき中間範圍として生成發達を研究する發生論的のものである。

ヴァントに依れば精神科學は二つに區分される。即ち、

A、精神過程の學

B、精神所産の學

前者には心理學及び之に類似の學が屬し、此の原理法則は同時に全精神科學を支配し、又諸精神科學は心理的原理法則に歸結せしむる事になるを以て、之を一般精神

科學と言ひ、特殊精神科學に對立する。精神所産の學は精神所産を対象とし、その精神所産の組織關係を主として考察するのが組織論的 Systematisch の科學であり、發生的關係を主とするのが Genetisch の科學である。即ち Genetisch には歴史が配され、前者には文獻學、社會學、經濟學、法律學、宗教學、政治學、藝術學等が屬する。

要之自然に對するものは精神であるが、然し自然と精神とは對象として別々に存するものではなく、経験を抽象的間接的に見るか、具體的直接的に見るかと言ふ見方の相異なるに存するのである。

以上述べた處のヴァントの説は要するに實質的對象論的相異に依て科學を分類したものであり、比較的多くの諸科學を配してそれ々の特色に従ひ組織的に至つて包括的に系統を立てたものであつた。其の最も特色とすべき處は大要次の如きである。

○ A、數學を自然科學より分離して先驗的のものとした事、

B、客觀的研究に對して主觀的精神科學を認めたる事、
C、諸科學の異同特色を明にし遺漏なく組織した事、

之が妥當な解釋であるか否かは別問題として、兎に角之等はウントの科學分類に於ける特色と言はねばならぬ。而して一般歴史及び特種の文明史、美術史、文學史、宗教史、法制史等は、精神科學の内に發生論的科學としての位置を認められ、自然科學に對する精神科學の一部門としての配置をされたのである。

流石は一代の大心理學者であつただけ、その専門の立脚地より、精神科學を認め之を詳細に研究發展せしめた事は確に彼の大功績と言はなければならぬ。兎に角、精神科學が自然科學に對立するか否かは別問題として、精神科學の根本的立脚とその本質とを鮮明にしたと言ふ點に於て、確に斯界を刺戟する處が多かつたのである。

然し彼の分類には一つの難點が存在する事を認めねばならぬ。彼は前にも言ふ如く自然と精神とを客觀的と主觀的との兩様に考へたのであつて、根本的に對象的の

區分ではないが、然しそこに對象の區分を豫想して居るのである。何故とならば經驗を間接的に見るのが自然科學で直接的に見るのが精神科學だと言ふけれども、精神科學が必らずしも、主觀的直接的の研究によつてのみ成立するものとは考へられない。まして自然とか精神とかと言ふ名に於て二元的區分をすと言ふ事は、吾人の經驗を此の二元的に區分する事となり、要するに對象の區分を豫想して居る事となるのであつて、對象的區分の科學分類である事となる。

諸科學の特色をその對象に依て區分すと言ふ事は換言すれば科學の分類は對象を分類すると言ふ事になる。對象を區分する事が困難な上に、假令對象が異なつたとて其認識の方法迄が異なるとは考へられない。例へばウントの心理學は所謂精神科學であるが、その對象は精神でも、認識の方法は自然科學と異ならないから、心理學特に精神科學は自然科學の一部門なりと言ふ結論に到達する。

更に前にも言ふ如く重大な問題は對象を區分する事が出来るかと言ふ事である。若し科學は對象に依てのみ區分されるものならんには、對象を區分し得ざれば科學

は獨立し得ないと言ふ事になる。若しかれば科學は永久に獨立する事が不可能であらう。之は後の方に於ても述べやうと思ふが、對象の區分そのものが疑問であり、假令對象を區分し得るとしても、それを以て直に學問分類の特徴とする事は不可能である。西南獨逸派のリツケルト等の主張の如く學問の正しき分類は基礎と方法の差異に依らなければならぬと言ふ説の方が妥當でなければならぬ様に思はれる。故に精神科學を認めるのは良いが、それは自然科學の一部門でなければならぬ。

科學と言ふものは最初は常識より發達したものであり、最初より確然と區分されつゝ發達したのではない。それが不完全ながらも對象的に區分されつゝ發展したのであり、最初から現今の如く各分科が確然と獨立して居つたものではない。要之科學の前段は常識であり、而して次第に發展したものであつて、各分科はちぼるげなるまゝに對象を區分する事に於て分類されて居たものである。故に科學を特質づける爲にその對象に依ると言ふ事は極めて元始的な方法であるかも知れない。此の

意味より科學をその對象に依て區分する事は科學發生論的に適當な方法であつた。然し先にも言ふ如く假令對象が異なるも其の基礎と方法に異ならざれば必ずしも哲學的見地より之を分離する必要を認めない。尙又對象も吾人の認識と獨立に與へられたものでなく、反つて對象は認識に依て成立するものであると考へられるから、最も根本的の區分法は他にあると考へなければならぬ。此處にウントの科學分類よりも西南獨逸派の分類が首肯さるゝ所以である。兎に角西南獨逸派の分類はウントよりも一歩進んだものであり論理的であると言ふ事が出來得るのである。

更にウントの區分に於て現象論的とか發生論的とか組織論的とか言ふ區分であるが、主として現象方面を重く見るものとか、主として發生方面を重く見るものとか、又は主として組織と言ふ概念が中心をなすものとかと言ふ風に見る事は出來るかも知れぬが、かゝる三種の區分が嚴然と並び存するものではない事明である。宗教史と宗教學、法律史と法律學、藝術史と藝術などが不可分離の關係である事を見てもよくわかる事である。精神的所産は歴史的生成であるから、此の兩者を全然切

り離つ事は到底出来ない。むしろ互が相補充し合ふ事に依て全き研究が出来ると考へられる。故にザントの右の三區分の如きは深き意義あるものと考へる事は出来ないものである。

⑦ザントの考察に依れば歴史が精神科學である事になつて居るが、果して歴史なるものは主觀的直接的の考察であるか。歴史研究は物質的自然的な世界と無關係であるであらうか。殊に發生論的とか現象論的とかの區別が根本的でないならば、更に疑を深からしめるのである。或る人は言ふ、歴史が精神科學であるならば、それは心理學や社會學とよく似たものにならないか、まして科學が普遍必然の法則定立を目的とするものならば、歴史より發見する處の普遍的必然性の法則は、おそらく社會學的の又は心理學的の法則の如きものとならないか。歴史の歴史たる所は現れず反つて心理學や社會學的の法則に進むものではあるまいかと。之につきては後段余の卑見を述ぶる際にゆづるが、要するに余は、如斯なりても可なりと信ずるものであつて、ザントの科學分類の根本的缺點を指示したる以上、更に續々述ぶる必要な

系大間學

ウーの歴史考察
と次からザント
の歴史考察を
比較するは學
問的

かるべしと思ふ。要は歴史が精神科學でない事は確實である。

以上説明する處に依て古代よりの科學分類に對する大體の重要なる説を記述したと思ふ。而してその根本的なる包括的なるものとしてザントの科學分類を挙げたのであるが、その分類も未だ論理的に完全なりとは言ひ得ない。そこでその難點を改め、新しき時代の新しき諸科學を配して、殆んど遺算なき迄に整然たる體系を立てたのは西南獨逸派のヴァインデルバントやリツケルトなどである。余は項を改めて研究して見度と思ふ。

第二 西南獨逸派の科學分類

我國に於て獨逸西南學派 Die Sub-west deutsche Schule. と言ふのは、一はバーデン學派 Die Badische Schule. と言ひ、北獨逸のマルブルト學派 Die Marburger Schule. と共に新カント派 Neukantianismus. と稱されて居るのである。前者を代表する學者は有名なるヴァインデルバント Windelband. とリツケルト Rickert.

であり、後者を代表する學者はコーエン Cohen. とナトルプ Natorp. とである。Neukantianismus. と言ふのは普通ヘーゲル學派 Hegelianer. の分裂後カント哲學 Kantianismus. の興起を目的として起つた一派を指すので、今日のバーデン學派やマールブルヒ學派とは異なつて居るのであるが、が然し要するにカントの精神を復興し哲學の職分を専ら批判に認めやうとする事に於て異なつて居らない。マールブルヒ學派の一部に於ては自己の學派を批判主義と言つて居るが、通俗にならひ新カント派と言つて置いても良い。又唯單にカント派と言つて置いても良い。マールブルヒ學派の數學的自然科學を基礎として批判哲學の精神を復興し各方面に論及するに反し、西南獨逸學派は主として文化問題に批判哲學を應用せんとして居る。本書の問題となるのは西南獨逸學派の文化科學問題である。

ウイルヘルム・ヴァインデルバンツ Wilhelm Windelband. は一八四八年ポツダムに生れ、イエナ、ベルリン、ゲッチンゲン等に學び、殊にフィッシャー Fischer. の感化を受けた。其後チューリッヒ、フライブルヒの教授を経て八二年シユトラスブル

ヒの教授となり、九四年には總長となつた。其の際演說せし「歴史と自然科學」 Geschichte und Naturwissenschaft. (Praludien II) は所謂科學分類の新提唱であつて此處にヴントの科學分類に反對し、論理的方法論的に文化科學の前提とも言ふべき歴史科學を建設したものである。彼は一九〇三年舊師フィッシャーの後を承けてハイデルベルヒ Heidelberg. の教授となり、一五年歿する迄その重鎮として専ら文化科學の建設に務めた、彼の遺稿として出版された「歴史哲學講義」 Geschichtsphilosophie. も極めて權威ある著述である。

バーデン派の所謂文化科學の提唱は、如斯クヴァインデルバンツに於て創唱され、その歿後ハインリッヒ・リツケルト Heinrich Rickert. に依て繼承完備された。リツケルトは實に現今西南獨逸學派に於ける唯一の學者であつて、同學派は現に彼一人の背負ふ處であると言つても過言ではあるまい。彼は一八六三年ダンチヒに生れ、長くフライブルヒの教授であつたが、ヴァインデルバンツの歿後ハイデルベルヒの教授となり、その思想を繼承して大に大成する處があつた。彼は經驗主義心理主義を排

斥して先驗主義論理主義を鼓吹し、ヴァインデルバントの歴史科學を成就して所謂文化科學を建設したのである。要するに西南獨逸學派の科學分類特に文化科學については今はリツケルトに依らなければならぬ。創唱者はヴァインデルバントであるけれども、それを大成したのはリツケルトであるから、文化科學の問題は自然リツケルトに關係する處が多い。

ヴァインデルバントが哲學の方法論上歴史に如何なる意義を認めて居つたか、歴史認識論上如何なる意見を持つて居つたかは彼が一八八三年に公にせし「批判的方法か發生的方法か。」*Kritische oder Genetisch Methode?* に於て研究するのが良し。又九一年出版の「哲學史教本」*Lehrbuch der Geschichte der Philosophie.* に於ける「自然と歴史」と言へる一節に於て彼が歴史を如何に考察して居たかを研究するに便利である。尙彼の哲學大成とも見るべき晩年の著述「哲學序論」*Einleitung in die Philosophie.* 1914 及び彼の遺稿として出版された「歴史哲學講義」*Geschichtsp-hilosophie.* 1916 などは彼の歴史哲學を研究する重要な書物である。然し之等の

名著を此處に一々紹介し批評する事は出来ない。それ等のものゝ多くは我國語に譯されて居るやうであり、又一部の説を紹介したのもあつて、今此處に詳説する要はあるまい。又かゝる詳細な記述は到底一小冊子のなす能はざる所であり。本書としては不必要である。唯此處には彼が文化科學の創唱者として極めて大略彼の思想に觸れれば良い。而して前にも言ふ如く彼の思想の大要は、換言すれば彼の歴史科學の認識論を組織的に論じたものは一八九四年ストラスブルヒ大學總長就職講演として述べたる「歴史と自然科學」*Geschichte und Naturwissenschaft.* に依るのが最も便利であり、論文集 *Präludien.* II. に收められて居るのである。

彼に依れば哲學及數學は「合理學」と言ふ古い名稱に依て包括し、それが經驗科學に對立する事の妥當である事を認めて居る。哲學や數學は直接には經驗に於て與へらるゝものゝ認識に向けられては居らない。つまり合理的のものであると言ふのである。即ち兩者には如何にその研究及發見に對する事實的心理發生的機會が經驗的動機の内存するとしても、哲學及び數學の主張は決して箇々の知覺又はその内

に於ては支へられるものでは決してないと言ふ事である、之に反して經驗科學とは實在を認識する事をその任務とする科學である。その形式的の特徴は普遍的な公理的前定及び規範的思惟の正しいと言ふ事の他に、知覺に依りて與へられたる事實の確定を要すると言ふ事である。以上はヴントのなしたるものと結果に於て等しいと言ひ得るが、然しその經驗科學の分類に至つては異なつて居るのである。彼は言ふ現今實在の認識に對する科學の分類に關して、自然科學と精神科學の區別は一般に用ひられて居るのであるけれども、併しそれはあまりに適當なりとは言ひ得ない。自然と精神と言ふ二つは、近世形而上學に於てはデカール、スピノーザ、シエーリング、及びヘーゲルに至るまで嚴格に保持された一の實質的對立である。然るに最近哲學殊に認識論的批判の影響を正當に味ふならば、一般の表象及び表現の仕方に附隨して居る此の科學分類は、今やもはや其儘にては用ひられない事を認められるであらうと思はれる。尙此の對象の對立は認識の仕方の對立と合致しないと言ふ缺點がある。

彼は如斯その對象の相違に依り自然科學と精神科學とを對立させる事に反對した。要するに科學分類は決して對象の對立に俟つべきものでない。認識の仕方の對立と言ふ事が根本的問題である。換言すれば諸種の科學の認識上形式上の特質に依り、その従つて生ずる研究の方法を以て分類すべきであると主張するのである。此處にヴントの經驗科學に對する分類は改められざるを得ぬ事となる。

ロックがデカールの二元主義を主觀的公式に還元して外部的知覺と内部的知覺、即ち感覺と反省を一方に於ては外界自然の認識、他方に於ては内部的精神界の認識に對する二つの區別されたる機關として相互に對立させたが、最近代の認識批判は内部的知覺の假説を大に疑はしきものとならしめた。即ち精神科學なるもの、事實は、只内部的知覺に依りてのみ確立せらるゝと言ふ事は決して承認されないであらう。

心理學は其の對象に従へば精神科學として、又は他の一切の精神科學の基礎として特質づけらるべきものである。併しその研究の方法は始終自然科學と何等の變り

がないではないか。實質的分類の原理と、形式的分類の原理との不整合は、心理學をして自然科学と精神科學の何れにも適當に配置する事が出来ないものである。自然科学に對立するものではなくて、心理學は自然科学そのものである。心理學は自然科学と等しく、事實を確定し、蒐集し、かゝる素材に依て其の普遍的合法性を理解しやうと言ふ目的に進むものである。精神科學、殊に心理學の如きは、常に如斯事象の法則であつて純然たる自然科学そのものである。如斯困難を示す分類は到底論理的にその成立を許されないのである。

然らば精神科學に屬すると稱せられる心理學以外の諸多の科學は如何であるか。それは個々の。一度的な、時間に於て制限された實在を表現又は叙述する事に努力して居るのであつて、是等の對象の各々は夫々自己の特種性に適合する取扱ひを要求する。而してその認識の目的は常に一度的に實在に於て現れる人間生活がその有り儘に理解されと言ふ事である。歴史科學の認識は要するに如斯ものであると考へられる。

此處に吾人は確實なる論理概念に立脚して純方法論的なる經驗科學を分類する事が出来るかと考へられる。其の分類の原理は經驗科學の認識目的の形式的性質であつて、

A、普遍法則を求むるもの………普遍的判斷、

B、特殊的歴史的事實を求めるもの………單稱的命題、

の二つである。されば吾人は之よりして次の如くに言ふ事が出来る。

經驗科學は實在的なるものゝ知識の内に………

A、自然法則の形式に於て普遍者を求めるか、

B、歴史的に規定されたる形態に於て個別者を求めるか、

前者は法則科學であり、後者は事件科學である。前者は常にあるものを教へ、後者は一度有りし事を教へる。前者は法則を發見する事を目的とし、後者は事件を記述する事を目的とする。ワインデルバントの用語に従へば、

A、前者は法則定立的 *Nomothetische* の學、

〔B、後者は事件記述的^{イデオグラフィッシュ} Idiographische. の學、
と言ふ事になる。

此處に注意すべきは、此の分類は何處迄も方法論的の對立であると言ふ事である。決して知識の内容を分類するものではなく、知識の取扱ひかたを分類するのである。かくて同一の事物が法則定立を目的とする法則的取扱 *das nomothetische Verfahren.* にも、事件記述を目的とする事件的取扱 *das Idiographische Verfahren.* にも對象となされ得るのである。

兎に角此處に法則定立的科學と特質記述的科學とが區別されたのであるが、兩者は經驗知覺の事實を出發點とするのである。然し經驗と言ふ事は通俗に素朴的な人々が考へる如く、常識的な經驗と言ふ事ではない。科學的に純化せられ、批判的に鍛練せられ、而して概念的に吟味されたる經驗を要する。

此くて自然科學に於ては思惟は特種者の確定から普遍的關係の把持に進み、歴史科學に於ては之をその儘固持せんとする。自然科學研究には所與の對象は決してそ

れそのまゝでは科學的價値を有せず、普遍的法則定立の材料として、其の類概念を展開させる爲に役立つのである。然るに歴史に於ては之と異なる。歴史研究にありては過去の事象を個性的形態に於て新に觀念的現在に生かす事が任務である。藝術家が其の想像中にあるものについて成就すると同様な任務を、歴史家は現實にありしものについて成就すべきものである。此處に歴史は藝術に極めて近いものとなる。

以上述べたる如くであるから自然科學的思惟に於ては抽象への傾向、歴史的思想に於ては直觀への傾向が支配する事となる。歴史的批判が事象を取扱ふに當つて必要なる概念的働きの如何に精巧であるにしても、その目的は過去の事象の眞の姿を明瞭に描き出す事にある。之に比すれば自然研究は其出發點が如何に直觀的であっても其認識の目的は理論であつて、結局は運動法則の數學的公式である。即ち生滅する感覺的のものは總て非本質的なものとして棄て去り、無時間的不變性を固持して、一切の事變を支配する必然的法則性を認識せんと努力するのである。だから自

然科學の世界は色もなく音もなき原子の世界である。自然科學は過去の事象に對しては全く無頓着である。變動變化の内より不變な形式を求めるのである。永久に不變なるものを認識しやうとするのである。

ヴァインデルバントは此處に極めて面白き趣味ある、而して尙將來の研究を要する問題を提出して居る。即ち吾人の認識目的に對して一層價值の大なるものは法則的知識か事件の知識か、換言すれば普遍必然の無時間的理解かはた又個性的時間的の理解かと言ふ事である。普遍必然の法則的知識は、時と處とに關せず將來を豫見し、事象の進行に於ける合目的干渉を可能ならしめる。然し之と同様に歴史的經驗は人門の共同生活に於ける一切の合目的行動を可能ならしめる實際的價值を持つて居る。されど之等は總て實利的の問題である。問題となるのは内部的知識價值についてある。然し研究者の個人満足、發見發明に對する主觀的満足は總ての知識に共通である。然らば此の問題は如何に解決すべきであるか。彼は *Geschichte und Naturwissenschaft* に於て種々證明する處がある。之は重大な問題ではあるが、彼自

身も確然たる解答を與へて居らない。之は後に論ずる。

以上ヴァインデルバントの科學分類につきて極めて大要を叙述したのであるが、之を要するに彼はヴァントの科學分類乃至は彼以前の科學系統に反對し、自然科學に對して個性記述的なる歴史科學を認めためたのであり、而して此處に歴史なるものは經驗科學中重大なる一方面的任務を有するものとされたのである。而して又その本分とする處は過去の事變の個性を表現するものであるから、歴史的制作は藝術的制作に極めて近縁なるべきを認めためたのである。以上ヴァインデルバントの科學分類を總括すれば、經驗科學を自然科學と歴史とに區分し、前者は *das generale apodiktische Urteil* に向ひ、後者は *der singulare assertorische Satz* に對するものであるとして前者は自然科學の認識目的に、後者は歴史認識の目的に答ふるものであると言ふ二元主義的科學分類説である。

ヴァインデルバントの思想を發展し、大成したのは、リツケルトであつて、此處に初めて一の體系をなしたと認め得られるのであり、現今多くの世界の學者の承認す

る——無論反對説も少くはないが、大體に於ては多く之を承認するのである。——
 科學の大系はヴァインデルバントを祖述するリツケルトに於て完成されたのであるから、余は次にリツケルトの思想を大要述べる事とする。

リツケルトの思想は氏の著 *Die Grenzen der Naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. Eine logische Einleitung in die Historischen Wissenschaften. Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. Geschichtsphilosophie.* 等に依らなければならぬ。而して之等の著述は彼の歴史哲學、尙自然科學に對する意見、更に西南獨逸派の科學分類につきての研究には必ず必要な文獻であるから是非参考すべきである。が此處にはそれ等を詳述する事は出来ぬ。尙米田博士の「リツケルトの歴史哲學」なる著述もあるから、それ等を参考とすれば大體原語の讀めない人にもよくわかつて思ふ。此處には極めて大略彼の思想のアウトラインに觸れる事とする。

リツケルトの科學分類は前述せし如くヴァインデルバントの發展である。故にその論據はヴァインデルバントの説に出發し、經驗科學を歴史と自然科學とに區分した方

法を襲用して、歴史科學に置換へるに文化科學 *Kulturwissenschaft* を以てしたのである。

吾人は今之を常識的階段にまで考察する時、そこに何物か或るものを得る事が出来るやうに思ふ。常識的に考察する場合、對象について唯一回限りのものとして他と異なる特別のものとしての存在に興味を有する事があり、又他方面に於て幾度も反覆する經驗につきそれ等より歸納的に共通な點を抽出して以て一の興味を起す事もある。之正しく吾人の興味之二方向を證明するものであつて科學分類の二元主義を生み出す根本的特質である。

吾人は如斯常識的階段に於てすでに個性的なるものへ又は一般的普遍的なるものへと全然反對なる方向への認識的興味を有して居るのであるが、科學も發生的に考察すれば總て常識的發展であるから、此處に科學分類の基礎が成り立つのである。此の基礎は科學に於ても取り入れられ對象を相反する二方向に依て自由に選擇されるのであり、大自然をその儘模寫する事は不可能であるから（模寫説）、對象を認識

の目的に於て選擇する必要が起る。即ち前の二方向によつて個性的に及び普遍化的に正反對な方向に向つて選擇される。換言すれば吾人の認識の對象の構成を、一は合理的 *Rationales* なるもの、他は非合理的 *Irrationales* なるものとし、従つて前者は普遍化に後者は個性化に向はしめるに依るのであつて、即ち吾々の認識の論理的構造上の二元主義に制約せられて、吾人の認識成果は之より離るゝ事を許されぬから之等の特種の認識目的が生じ、自然科学と歴史との二科學が發生するのである。

そこで自然科学に於ては對象を認識目的に依て選擇し、個々の事象を精密に分析し觀察し、同類のものを分類記述する記述科學に始まり、概念を思惟に依て構成する。而して其の構成概念は經驗的事象より抽出されたものではあるが、普遍必然の法則に定立する事に依て經驗外までの事をも規定し、個的事象と雖も之に包含せしめて證明するのである。即ち法則は無時間的無條件的に普遍なものでなければならぬ。だから自然科学は複雑なる現象を單一なる法則に抽出する任務を有する。然る

に歴史科學は之と反對に吾人の興味——價值——に關係して對象を選擇し、個々のものにつきての特性を發揮せしめ之を記述するのである。もとより兩者の區別は認識素材の區別ではなく、又素材的區別が兩者の論理的性質を確定するのではない。

歴史は如斯記述的科學である。が然し事象そのまゝを模寫する事は前にも言ふ如く不可能である。模寫說の不合理なる事は此處に述ぶる必要もあるまい。故に模寫そのまゝが歴史である事は出来ない。そこで認識目的に依て重要なものと否とを區別する。然らばその重要と否とは如何にして區別するか。それは認識目的に依るのである。價值である。價值とは興味である。然しそれは主觀的の興味ではない。個人の好惡などと言ふ主觀的のものは論外である。要するに價值は文化的のものでなければならぬ。人生の理想的文化價值でなければならぬ。自然科学に取つては其の對象は沒價值である。法則定立の一實例にすぎない。換言すれば法則の支配する事象に他ならぬ。が歴史に於ては之と異なる。それは何處迄も價值關係的である。歴史の對象は文化財である。Kulturwert である。此の Kultur. を研究する處の科學

は總て歴史學の方法に依るのである。此處に於てヴァインデルバントの Geschichts-
wissenschaft. 及び Kulturwissenschaft. に置き換へられる事となるのである。

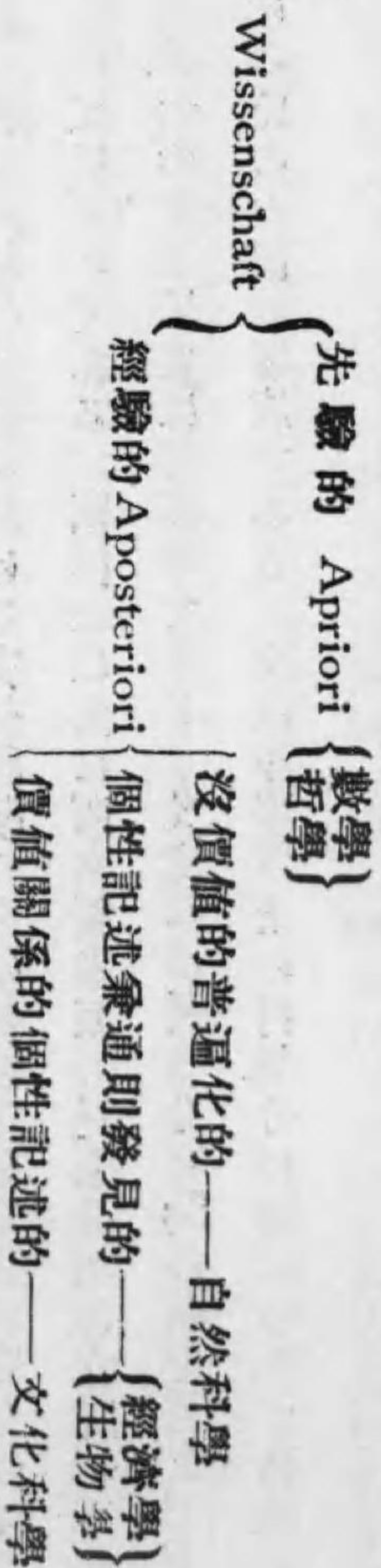
- A. Naturwissenschaft.
- B. Kulturwissenschaft.

此處に注意すべきは文化科學と歴史科學とは別物ではない。前者は後者よりも廣
い意味を有する。一般に Geschichte の研究方法を用ひる科學を文化科學と言ふので
反對に文化科學は歴史的方法に依るとも言ひ得られる。最も簡単に言ひあらはせば
文化科學は文化財を研究するものであると。

系 大 問 學

Natur と Kultur とは前にも言ふ如く經驗的に區別されて居るのではなく、相異
なる認識目的に依て相異なる系列に組織される迄である。此處に Geschichte, w. と
Kultur w. との關係につきて注意を要する Natur w. に對するものは Kultur w. で
あるが、歴史科學又は文化科學は即ち歴史的方法科學の意である。要するに方法論
的見地に立脚したものであるから、ヴァインデルバントの提唱に依る Geschichtswi-

ssenschaft. はリツケルトに依て改められたのではなく、それよりも擴大せられて
Kulturwissenschaft. と言ふ事となり、それに包含するゝ分科は Geschichte. もあり、
其他此の方法に依る分科は總て此の内に包攝するゝ事となるのである。之を要する
にリツケルトの科學分類は、



類分學科の派逸獨南西

此處に説明を要すべきは經驗科學の内、認識の二途に於ける中間範圍である。リ
ツケルトは二元主義的に經驗的 Aposteriori の科學を、一は沒價值的普遍的なる
自然科學と、他方價值關係的個性記述的なる文化科學に分類した中間に於て、個性
記述的兼通則發見的の科學を認めたるは不合理な事であると考へられる。我左右田

法學博士は大著「左右田喜一郎論文集」巻第一に於て經濟學に對するリツケルトの説を修正されて居るのであり、それに依て經濟學が中間範圍である事は訂正せられ、それが文化科學であると言ふ斷案に到達せられたのである。尙我國に於ける數理哲學の權威田邊元博士は大著「科學概論」に於て、此の中間範圍の不合理を指摘せられ、博士の科學分類に於ける文化科學の中の個性記述兼通則發見の科學中に包含せられて居るのである。兩博士は共に西南獨逸派の科學分類に立脚せられて居り——兩博士の哲學思想は別問題である。此處には科學分類論のみを言ふ。——我國に於ける此の方面の權威である。余は今兩博士の科學分類論につきて略述する事とする。

先にも言ふ如く法學博士左右田喜一郎氏は左右田銀行頭取であり、我國に於ける否世界に於ける經濟哲學の泰斗である。氏は大正六年十二月「左右田喜一郎論文集」巻第一「經濟哲學の諸問題」を出版せられ、西南獨逸學派の科學分類に於ける不正合を修正されたのである。今その經濟學につきての氏の説を同論文より摘録する事

を許してもらひ度い。尙同博士は獨文の著書 *Die logische Natur der Wirtschafts-Gesetze. 1911.* を公にして居られるのであるが、之は極めて此の方面の著書として興味あるのみならず、極めて眞劔なるものであるから、併せ讀む時は博士の大なる思想に親炙する事が出来る。尙同書の日本譯もある由聞き及ぶのであるが余は未だ讀まないから紹介が出来ぬ。兎に角我國語を以て綴られたるかゝる權威ある著述を原本として讀む事を得るは我國民の至幸である。

リツケルトに依れば科學分類は前述の如く經驗科學を二元的に分類し、自然科學と文化科學とが對立するのであるが、科學とはその何れかの一に屬しなければならぬ。而して其の何れにも屬しないものは科學外へ追やるべきである。然るにリツケルトは自然科學と文化科學との混成體たる中間範圍を置いたのであるが、かゝる中間範圍を作ると言ふ事はそれ自身矛盾であらねばならぬ。自然科學と文化科學とは全く相異なる兩極端に對立して居るのであつて、その兩極端の中間に混成體を位置せしめると言ふ事は二元的分類の主張としての矛盾である。博士は次の如く言ふて

居られるのである。

吾人の考へざるべからざる事は科學認識の成立に關して Dinghaftigkeit, Kausalprinzip の如き構成的範疇と、Gesetzmässigkeit, Historischer, Kulturwert の如き方法論的形式とを分ち、後者を第二次的となし、之を以て假令心理的經驗論に於て言ふ如き認識主體に對せしめざるも、尙判斷意識一般に對峙せしめざる爲、自然科學的概念としての自然も、カントの考へたるよりは一層經驗的主觀の要素を含有するに至つた事である。即ち方法論的形式は他の論者の場合よりも一層經驗的なる認識主體の考へ方又は概念形式 *Auffassungs- oder Begriffsform.* なりとしたる點にある。従つてリツケルトの説にして眞なりとし、其の二元的規範たる自然法則性と歴史的文化價值とに係りて各其概念を得、之に依りて各學は學として其の獨立の存在を得べしとするも、リツケルトの説に依りては各學の成立は二元的方法論的形式の孰れかに又は其學の各部に於て双方に與る事を得ば足れりと論ぜらるべきであつて、之に反して各學は必らず唯その一にのみ與らざるべからずと言ふ結論は之を導く事を

得ない。換言すれば各科學が科學的知識の體系たるが爲には其の何れかの認識目的に必らず係はらしめざるべからざるも、而もその認識目的の一を有するも可、又二を併せ有するも可なりと言ふ結論に達するのであつて、各科學はその認識目的として必らず其の一をのみ有せざるべからずと言ふ結論は出て來ない。是方法論的形式を以て認識の構成的範疇とせずして、之に第二次的の地位を與へたるより來る當然の歸結である。實際に於てリツケルトは、力學物理學に對峙せしめて、歴史を擧げて其の異なる認識目的を有する學問として其の兩極端に於て相互の獨立を主張するの他面には、此の兩學の過渡的の中間範圍 *Mittelgebiet* として生物學經濟學等を擧げて居る。即ち前者の對峙に於て各認識目的の一が方法論的規範として認識主體の認識を要求し、之に依て各自より分つ獨立の學的知識が形成されるものであるが後者の *Mittelgebiet* に屬するものにあつては、其各部の知識は、必らずその認識目的の何れかに與る處あつて形成せられたりとするも、其の此の如く異なりたる認識目的を有する知識の雜然たる集團を稱して或は生物學であり經濟學であると言ふ

事は疑なきを得ない。(論文集第一、S. 160)

リツケルトが科學的認識の二元主義を立つる根據を方法論的形式が單純なる經驗的認識主體の *Auffassungsform*. なりとする點に求め、従つて此くして生じたる二元的認識成果の混成體を目して尙一獨立學なりとする意見には賛同する事を得ない。若し構成的範疇と方法論的形式との區別を排して、共に之を構成的範疇なりと見る時は、假令認識成果は二元的となるも、或る一學が他學と分離して獨立の存在を保つが爲には、其の學の認識目的は必ず此の二範疇の一に與る處なかるべからずと言ふ結論を生じて來るのである。既に其の一の認識目的に係はらしめて、一學が獨立して存在し、其の學に特有なる認識對象を得たる場合には、其の認識論的表面に於ては異なる數種の *Auffassungsformen*. を許すべし。而もその形式の素材としての其の學の認識對象は、必ず認識目的の二元的なるもの、唯一つにのみ係はる處あるを要すると言ふべきである。以上は認識の生成と言ふ方面から觀察したる論であるけれども、認識成果と言ふ方面から見ても同様に論じられる。即ちリツケ

ルトは或る一獨立學の概念が相反する二個の認識目的に係はらしめて各自成立せしめられ、此の如くして成立したる異なる認識目的を抱括する諸概念的知識によりて成れる一學全體は一個の混成體たり得と説くけれども、一獨立學が一の確定したる且獨立したる認識目的を有する事なくして存在し得と論ずるのは論理の矛盾たるを免れない。認識目的それ自身に一種の混成體を考ふる事は論理上全然不可能である。若し一學が論理上に獨立したるものとして、カントが自然科學に於てなしたる意味に於て基礎づけ *Begründen* せんとするならば、其の學に特有なる認識目的を立證しなければならぬ。然らずむば一の學問は獨立したる學として見られ得ぬと言はなければならぬ。即ち一學が獨立して存在し得る根據としての認識目的それ自身には如何なる意味に於ても混成體を認める事が論理上矛盾なりとの方面から見て、各學は一の獨立學としては唯一の認識目的を有すべしと言はねばならぬ、此の如く各學は二元的認識目的の唯だ一にのみ係はらしめて獨立を保有し得ると言ふ時は、各學は自然科學及歴史の何れかに屬せしめなければならぬと同時に、此の二學

の範圍内に於て種々の學が成立するのである。(論文集卷第一、S. 166)

博士は叙上の如く論ぜられ、總て特殊科學はそれが法則科學なると事實科學なるとを論ぜず、凡てその範圍内に於て獨立の認識目的を有する以上、其の認識目的の異なる程度及異なる性質に於て内容的に制約せらるゝ事によりてのみ一途に究極の二認識目的に歸納せらるゝ事を避け得るものであるとせられ、特異の内容的制約を許すに依て各學が獨立の學として存在するを得ると論ぜられ、要するに認識目的の内容的制約の相違に其の論理上の根據がある。依て凡ての學問は、二の認識目的の必らず唯その一をのみ有せざるべからざるのみならず、其各範圍内に於て更に獨立の學問的地位を有するが爲には論理上特異の内容的制約を許したる認識目的を有せざるべからずと主張されて居る。

却説經濟學も叙上の意味に於て一の獨立科學たる上からは他の特殊科學と同様に認識目的の何れか一にかゝはり、そこに所謂博士の内容的制約がなければならぬ事となるが、經濟生活は人類の文化生活の一面的解釋であつて、經濟學が對象とする

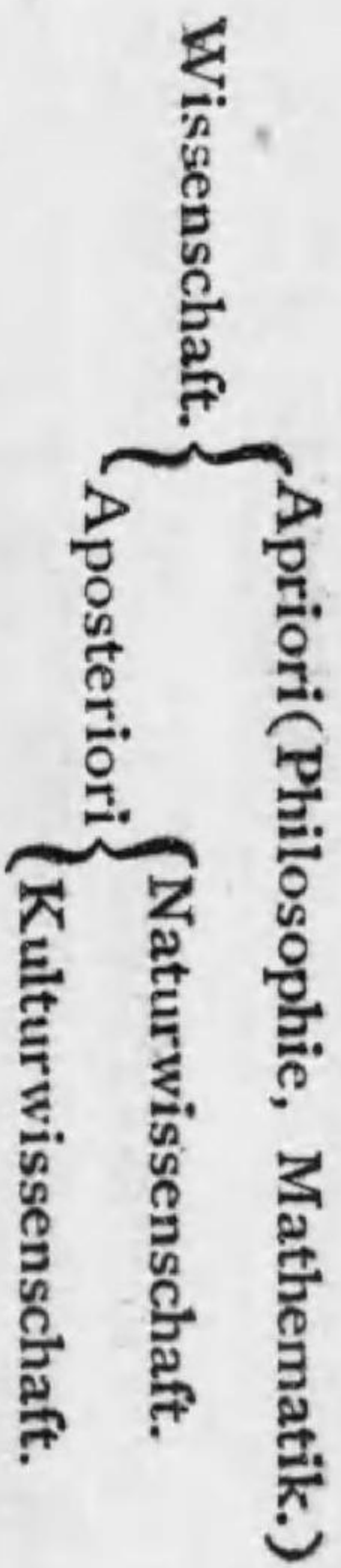
處は、人類の經濟生活に存するのであるから、經濟學はリツケルトの言ふ混成科學に非ずして、所謂文化科學であると言ふ事になつて來る。

即ち經濟生活は歴史的文化生活であり、詳しく言へば其の一面的解釋である。即ち經濟生活は歴史的生活として文化價值に係はらしめて初めて論理上可能となり得る所の價值生活である。經濟學は此の經濟的文化價值と言ふ内容的の制約を史學一般の認識目的に對して經たるものである。換言すれば文化科學一般の認識目的の内より、經濟的制約を所有する對象をその對象とする科學である。そこで經濟學は一の文化科學であり、自然科学ではなく又中間範圍でもない。若し經濟學が自然科学であればそれは自然科学的心理學の如きものとなり、經濟學獨特の之に依りて學として獨立する事を得る *das endgultige Erkenntnisziel* がなくなる。要するに歴史や經濟學は文化科學の内に包攝せられる事となるのである。

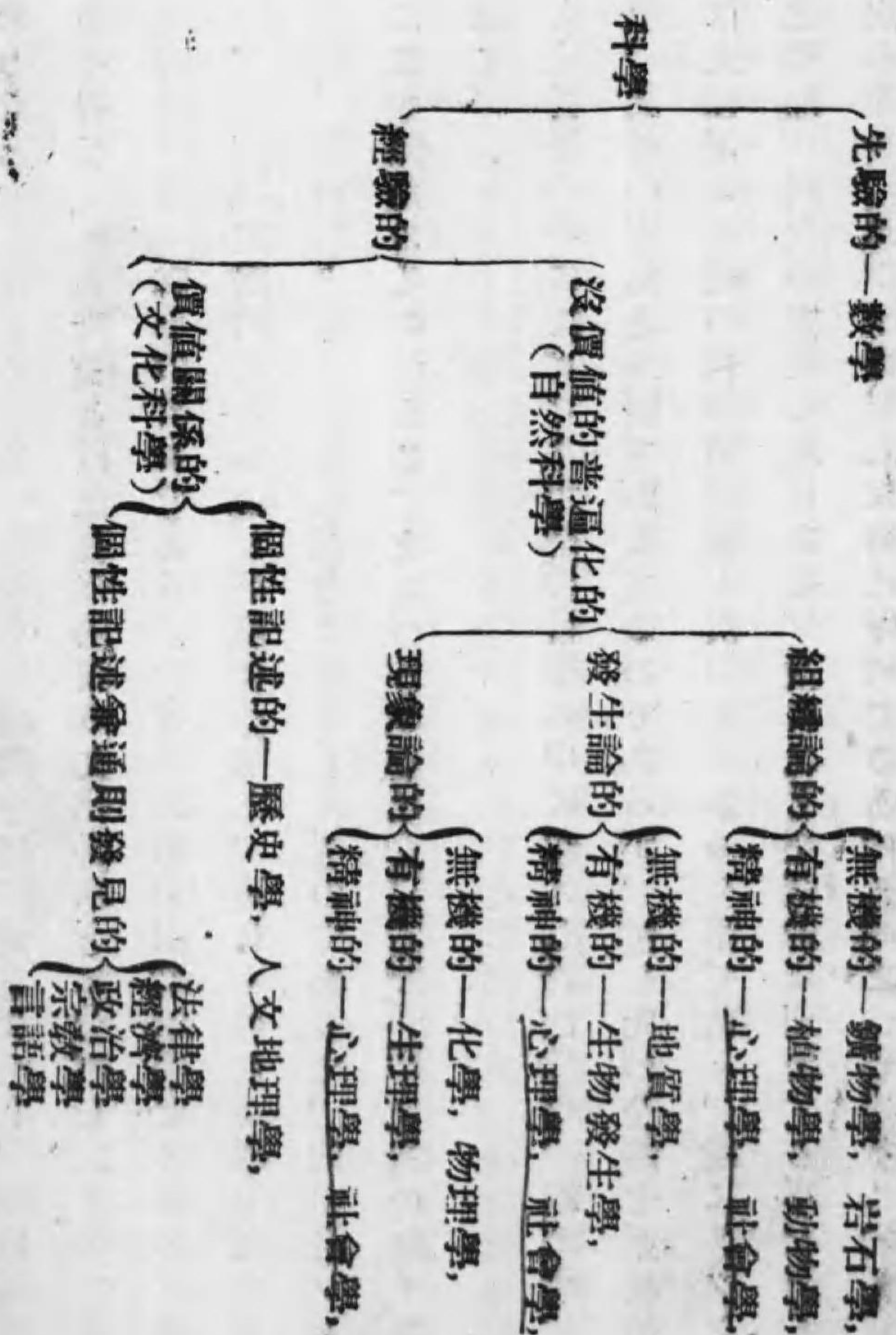
以上は左右田博士の經濟學が科學分類に如何に配さるべきかの所論の大意である。尙同博士の「論文集卷第二文化價值と極限概念」は是非一讀すべき好著である

事を附加する。

以上を總括して西南獨逸學派よりの科學分類の要項を表示すれば、



次に我國に於ける數理哲學の泰斗、前東北帝大教授現京都帝大教授文學博士田邊元氏はさきに「最近の自然科學」を公にせられ、更にその依て來る根本論とも言ふべき「科學概論」を公にして一の新しき科學分類を公表せられて居る。博士は大體に於てヴント及び西南獨逸派の科學分類を基礎としてそれを修正されたのであるが、——博士はカント派の哲學者であるが、その思想がバーデン派に屬するか否かは余は知らない。只その提唱された科學分類案なるものはバーデン派のそれを基礎とされて居るやうに思ふ——其の分類は極めて複雑詳細に渡つて居る。今博士の科學分類方案を高著「科學概論」より表示すれば次の如くなる。(前頁科學分類案と比較せよ)。



此の表に於て見るに、先づ科學を先驗的と經驗的とに分ち、經驗科學を沒價值的普遍化的なる自然科學と價值關係的なる文化科學とに分類したものであるが、之は西南獨逸學派の説そのまゝである。尙自然科學を組織論的なるもの、發生論的なるもの、及び現象論的なるもの、三區に分類し、更にそれに各學を配するに無機的、有機的、精神的と言ふ對象的區分に依てしたものであつて、此の邊ツントの科學分類にさも似たるものである。之につき博士は「科學概論」中に次の如く述べられて居られる。

文化科學の中にはツントが精神科學の中に編入した法律學、經濟學、言語學、宗教學、其他の文化史的研究が屬するのであるが、併し此の全體を系統的に開展するのは文化價值系統の哲學的開展を俟つて成さるゝ事であり、既にリツケルト自身の研究の如き未だ不完全の域にある。故に之を系統的に開展する事を全く試みず、唯以上の諸科、及び歴史、人文地理學の如きものも亦之に屬するものなる事に注意し、専ら自然科學の方のみを系統的に開展した。(科學概論 S. 212)

自然科學は已に前表にある通り、無機、有機、精神の法則研究を含み、博士は數學及自然科學に於て極詳細な點まで説明を試みられた。が文化科學については博士の説明は不十分な點が多い。今二三の重要點を摘録する事を許され度い。

リツケルトの説は科學方法論上一時期を劃する深い考に基くものなる事を否定し得ない。大體に於てその眞理なることを承認しなければならぬ。唯リツケルトが經濟學の如きものは自然科學と文化科學との兩要素を混入すると言ふ考の不都合なるを改めて見度い、個性記述に價值的見地を要する事疑ひないが、逆に價值的現象も全然法則的見地を許さないと云ふ事は出來ない。成程自然科學は沒價值的見地に立つものであつて、之は勿論法則發見より他に目的とする事は出來ぬ。然るに價值的現象は個性記述の史的研究を必要とする事勿論であるが、同時に必らずしも個性記述のみより他に容れないと言ふ如きものではない。或る對象の個性は其の一般性と分離並立するものでなく、一般性の特種なる結合が個性をなすものであるから、我々は價值的見地から選擇した現象を一方に於て個性記述的に研究すると同時に、他

の價值的現象と比較して、同類の關係のみを分析し、之を一般法則に定立する事が出来る。勿論此際一般法則を定立すると言ふも、それが特殊の文化現象の法則たる爲には、何處迄も夫々の價值的見地から統一せられた對象の價值的關係の上に於ける一般的關係でなければならぬ。依て此の價值的關係を無視する程度に分析を進めて普遍化を行ふ事は許されない。斯くすれば特殊の文化現象の一般的法則たる意味は失はれてしまふ。従つてその普遍化は自然科学に於ける如く絶對的の意味を要求する事は出来ぬ。唯類型の通則とも言ふべきものに止まらなければならぬ。其の現はす處は自然科学の法則に於けるが如く *Mussen*——斯くあらざるべからざること——でなくして、單に *Sein*——斯くある事に止まる。此の限界内に於ては文化現象の普遍化、一般法則的認識と言ふ事も可能なのであつて、例へば經濟學の如きが歴史研究と同時に法則的研究を含むのは之が爲である。之は直ちにリツケルトの考へる如く自然科学的研究を混入すると言ふ事にはならぬ。自然科学の法則は沒價值的の絶對的普遍化を目的とするものであるが、之等の文化科學の法則は價値の立場

から夫々の理想實現の過程に於ける共通的關係を内容とするものである。故に文化科學は一般に價值的見地を其の特色とし、其の内に歴史的研究と法則的研究とを含みつゝ、それが自然科学に對立するものと考へる。故に此の見地からはウンツが精神科學に編入したものの大部分は文化科學に屬すべきものである。(但しウンツが精神科學の現象論的部門に入れた心理學社會學は自然科学である)。(科學概論 S. 204

—S. 208)

博士は叙上の如く説明し、博士獨特の科學分類の斷定とも言ふべき説を立てられて居られる。曰く、

其故余は自然科学の内を前述の如き客觀的構成の原理上の相違に依て大體物質的と精神的とに大別し、以て所謂自然科学と心理學社會學の如きものを夫々に包括せしめやうと思ふ。此は一方から言へば勿論對象に依る區別であるが、已に科學の最大別が方法に依てなされた後、其の小別は對象に由るのは已むを得ざることであり、加之對象も又實は更に根本的方法を實際に適用する仕方の細別に依て成立す

るものなのであつて此は物的自然科學其物の細分にも必要なものであるから斯かる區別は不可なきものと言はなければならぬ。之れ余の探らんとする立脚地である。(科學概論 S. 209)

以上の理由に依り、博士は大體に於てウントの用ひた現象論的組織論的發生論的の三分法を、従來行はれ來つた説明的記述的の區分に比して一層適切なりとして採用し、前記科學分類表を立てられたのである。博士に依れば自然科學に於ては、最初に、

學問大系

1、經驗の對象を類に従つて分ち、其の共通の性質を記述する事を主とする——此の分類記載が組織論的部門——之は自然科學中最も論理的に低度の段階である——論理的に低度と言ふのは其の發達が後れて居るとか實際上の價値が少いと言ふ意味ではない。

2、自然科學の研究は到底此に止まる事は出来ぬ。それで法則を立て、絶對不變の一般的理論を定立し、之に由て個々の事實を説明し、經驗に實現し得ざる概

念をも立するのである。——之が現象論的部門である。

3、發生論的部門はウントと同じくその法則を記述的對象の發生に適用して、對象の生成發達を一般的に説明せんとするものである。其故之は組織論的部門と現象論的部門との中間階段をなすものであつて、方法論上大なる意義を有するものとは思はれない。

即ち自然科學は博士に依れば絶對普遍の理論を定立せんとする現象論的部門が自然科學中論理的に最も高度の階段であると言ふ事になる。換言すれば、自然科學の極到は論理的に現象論的部門であると言ひ得られるのである。以上が博士の科學分類に對する意見の概要である。

西南獨逸學派の科學分類

以上、余は西南獨逸學派の科學分類案及文化科學論の概要を觀察し、引いて西南獨逸學派の立脚地に立つ左右田博士田邊博士の科學分類修正案を研究したのである。之等の諸家の説はそれぞれその著述に依らなければならず、此處に詳細に紹介する事は出来ぬが、大體に於て余が次に述べんと欲する處に必要な諸家の思

想の大要には觸れ得たりと信ずるのである。余は以上の諸説を一貫して流るゝ根本的思想に觸れ、更に余の言はむと欲する卑見を述ぶる順序となつたのである。

第三 科學分類案私見

前兩節に於て余は科學分類の沿革、及び西南獨逸學派並に現代に於ける主潮についての重なるものを極めて大略紹介し得たと信ずる。而して此處にそれ等についての一般的總括を試み、余の卑見を述べるべき順序となつたのである。科學分類の沿革につきては前述せしが如く其の依て來る極めて古く、プラトロン、アリストテレスの昔に溯らねばならないのであるが、往古の科學分類は今より考察すれば極めて不完全たるをまぬがれぬが、と言ふのは、往古は一般に諸科學が獨立せず、今日の如く判然たる完成を見なかつた當時であるから、その不完全なる科學を分類したものが、又不完全であるべきは當然である。近世に至つてようやく諸分科の旗色鮮明となり、その依て屬する部門を研究せむ事も又學者に依て試みらるゝに至つたの

である。而して少くとも科學分類についての評論批判はヴント以後に於てしなればならない事になる。余は右理由に依てヴント以後を近世に於ける主潮としたい。

余は最初に一言附加すべき事項があるからその説明をして置き度いと思ふ。科學者や哲學者の内にて、科學分類を試みたる人々は、前述する通り數に於て隨分に多いと言はなければならぬ。本書に於て記述した人々以外にも、一般的に又は部分的に研究した學者は決して少くはない。余は之等科學分類を試みた人々を總稱して、「科學分類派」と言ひ度い。而して余の此處に言ふ科學分類派と言ふのは、それが如何なる哲學的系統の人であつても、如何なる方面の學者であつても顧みないのである。要するに往古より科學分類について研究し評論し發表したる學者を總稱して余は科學分類派と總稱したのである。

却說科學分類の卑見を述ぶるに先だちて之等科學分類派の人々の研究を一通り批判する必要がある。が然し前段は後段で改められ、後段は更にその次の段で修正されて居り、要するに西南學派の科學分類は、現今に於ける最後の修正案とも言ひ得

るのであり、殊に我國に於ける左右田、田邊の兩博士の意見を聞くに及んでも、西南獨逸派の立脚に出發して居るのであるが爲、余は科學分類最後の修正案たるバードン派の意見を根本として評論して見度いと思ふ。自然左右田、田邊兩博士の説は、余は西南學派の説と同様、共にカント派の流れをくむ説として、總稱して現今に於ける科學分類派の人々と言ふて置く。

現今に於ける所謂科學分類派の人々の一般に主張する分類の根本的區分は、ウント以來大體に於て一致する所であり、多くの人々の首肯する二元主義的大區分法に依るのである。即ち Apriori. なる合理的 Rationales. に基礎づけらるゝ哲學（理性 Vernunft. に關す。）と、純正數學（純粹直觀 Reine Anschauung. に關す。）とを以て一部門とする形式的科學に對して、他の諸科學分科を實質的科學に包括する二元主義である。現代の科學分類派の人々がかゝる二元主義をとるのはウントに始まると言ふべきである。（それ以前に於ても二元主義はあるが、それはウントの成した處と意義を異にするのである。）

科學を分ちて形式的先驗的のものと實質的經驗的のものとに區分する Apriori. と Aposteriori. との對立につきましては、現今に於てあまり異論がないやうである。そして又 Apriori. なる Rationales. に基礎づけらるゝ大部門についても諸家の説は大體に於て一致して居り、あまり異論はないやうである。異論の多いのは經驗的な Aposteriori. に關する諸部門である。

ウントは經驗的實質的科學を更に二分して、自然 Natur に對するものは精神 Geistes であると考えた、それは既に前述した通りであるが。然しウントの所謂 Natur とか Geistes とか言ふ區別は如何にして可能であり得るか。かゝる區分對立は如何なる基礎に置かれてあるか。彼は經驗内容の相異なる二つの要素として、Subjekt と對する Objekt を對立せしめ、即ち客觀的經驗内容をのみ研究する自然科學と、直接に經驗する處を其儘研究するものとしての精神科學とに區分したのである。依て之を表示すれば、

A. Objekt としての Empirie に關して——Natur, w.

B. Subjekt としての Empirie に関して——Geistes, w.

と言ふ區分になるのであるが、Empirie をかゝる二つの相異なる要素に區分すると言ふ事は、要するに對象を區分する事になり、それは論理的に不合理であると言ふ事になるのである。例へば直接とか間接とかに經驗する事象と言ふけれども、吾人の經驗對象にはかゝる區別が存在するとは考へられぬ。ヴントが直接經驗と考へた精神科學も、果して純粹直接經驗が可能であり得るか、假令それが直接的のものであつても、吾人の經驗的對象として何等異なる方法を要求しないとすれば、特に區分の必要は學的に認め得ないのである。之を修正したのが西南獨逸學派であるが、西南獨逸學派はヴインデルバントの言葉に従へば *das generelle apodiktische Urteil*. に向ふ自然科學に對して *der singulare assertorische Satz*. に向ふ文化科學であると言ふ事になり、精神科學と言ふ對象的區分に依る部門は改められて、根本的基礎と方法に依る文化科學に置き換へられたのである。如斯吾人の Empirie に二途の對峙の存する事は既にカントの「純粹理性批判」又はプロレゴメナに於て、吾人

の認識に二途の *Imkommensurable Grossen*. がある事に論及して居るのであつて、ヴインデルバントに言はしむれば、そこに二途の認識方法が存在し、一は *Nomothetische* に進み、一は *Idiographische* に進む事となるのである。現代の科學分類派の人々は多く此の二元主義的對立を是認して居るのである。

田邊博士の大著科學概論にも、「尙將來の研究に俟つべきものである。」とか、「之に優るものを差當り考へ得ぬ。」とか言つて居られ、博士自身も十分完全なるものとは考へて居られぬらしいのである。余は博士のなされた、引いては西南獨逸學派の方案につきて疑點があるのであつて、博士並に大方の識者の示教に俟つべきものとして此處に提出する事を許され度い。細部に渡つた問題より論ずるのが便利であるから、次に大要論述する。尙此の項は少々長くなるが諒せられ度い。

田邊博士の分類案に依れば經驗科學を自然科學と文化科學との二元的に區分する事は西南獨逸學派の分類に依つたものである。次に自然科學を三分して組織論的と發生論的と現象論的としたのであるが、之はヴントの區分に依つたものである。

而して其各部門へ配された諸科學は總てヴントの配列したそのまゝと言つても良い事となる。只異なる點はヴントの精神科學へ入れた心理學社會學等が自然科學に配された事だけである。要するに博士の科學分類はヴント案を用ひて西南獨逸學派の大系統に配したまでであり、そこに成功もあれば缺點もある。

先づ自然科學とか文化科學とかと言ふ言葉がすでに對象的名辭であると言ふ事である。それは後に論ずるが、西南獨逸學派の主張は總てヴントの對象論的區分に反對したものである。兎に角自然とか文化とか言はずに方法論的名辭を用ふる事が必要である。

次に博士は諸科學を配するに無機的と精神的と有機的の三區分を取られたが、之は博士の説明に依ると勿論對象の區分であるが、科學の最大別が方法に依てなされた後、其の小別は對象に由るのは止むを得ざる事であり、加之對象も又實は更に根本的方法を實際に適用する仕方の細別に由て成立するものであると言はれるが、科學分類が根本的にその方法に依てなさるゝ上から、その細別は對象の區分に依る

と言ふ事は前後不統一であり矛盾であると言はねばならぬ。もとより科學は宏大無邊の宇宙を悉くその對象とする事は博士の言はるゝ如く不可能である事は余も信ずる。此處に於て對象を選定してかゝらなければならぬ。此處に問題が起る。若し科學がその對象を選択して成立するものであるならば、逆に諸分科より論理を進めてゆき最大別もその分科より總合してゆかねばならぬ。諸分科が對象に依て區別されて居る以上、その諸分科は對象の性質に依て特質づけられてゆく筈である。然らばその諸分科の一部一部を結合してゆく小部門も又その對象の性質に依て特質づけられねばならぬ。さすれば科學分類は西南獨逸學派の主張する如く大部門の區別より始めずに對象の區分より始めて次第に近似の特質を一部分とし、歸納的に大部門に進むべきである。若し如斯方法を許すならばヴントのなしたる缺點をそのまゝに反覆する事になり、唯一の科學の存在も對象の特徴に依て特質づけらるゝ事になる。かくすれば自然科學と文化科學の名は許すとしても、普遍化的のものと價值關係的のものとはなくなり、科學の基礎はその對象の區分になり終るのである。

博士の科學分類案中、その經驗科學に屬する自然科學の表示は次の如く書き改めても同様である。(前出分類表参照)



之は博士の分類案を書き換へたゞけであつて、意味は等しいと思ふ。此の分類案に依て見ると極めて不自然な區分である事がわかる。前に掲げた博士の分類案に依ると一寸その不合理を發見するのが困難な様であるが、右の如く書き改めて見る

と、組織論的とか發生論的とか現象論的とか言ふ區分は生物學的のものと無生物學的のものに限られ、精神的のものには區別がつかなくなる。尙又經驗科學としての精神學は心理學と社會學との二つに當る事になる。吾人々類の精神を研究する學としての社會學とは一たいどんなものであるか。疑問と言はねばならぬ。無機有機精神と言ふ三區分は自然科學てふ對象的の大區分に對する小區分であつて、此の小區分も等しく對象的であり、その精神のみを研究するものとして社會學が心理學と獨立に存在すると言ふ事は、然らば博士の所謂社會學とは如何なる内容を有する科學であるか。無機有機精神の三者を明瞭に區分する事それ自身困難な上に、精神研究の學として心理學以外に他の科學の存在する場所ありとすれば、それは一體如何なる認識目的を有する科學であるか。少くとも今日社會學 Soziologie. と稱する科學の意義についてはコムト、スペンサー以來、ジョン・スチュアート・ミルやギツヂングス Giddings. 等、其他の學者の説として、社會學が純粹の精神科學なりと斷定するには至らなす。ジムメン Simmel が社會學を以て社會の形式たる人類の心的相

相互作用を研究する科學であると言ふが、之とても社會學が純精神科學也とは斷じ得ない。まして博士の精神學としての組織論的社會學、發生論的社會學、現象論的社會學などの社會學の區別は如何なるものであるか。その各々の社會學が如何なる目的と内容を有するものであるかは極めて疑問である。余の淺學未だかゝる社會學の種類を聞かないのである。

有機とか無機とか精神とか言ふ區分は果して可能であり得るか。哲學の研究には總て根本的の論理に立脚する事が必要である。便利であるとか止むを得ないとか言ふ考で勝手に區分する事は許されぬ。以上の三區分法の如き博士は如何に區分せらるゝであらうか。常識的に考ふるならば心理學は精神的であり動植物學は有機的である。然し精神とか有機とか言ふ事は絶対的の區分法でない事は各その諸分科に於ても認めて居る事である。又有機とか無機とか言ふ區分法の決定は果して哲學のなすべき範圍であらうか。動植物學や礦物學を顧みずしてかゝる事を哲學が決定する事は妥當であり得るか。博物學に屬する諸分科はその科學目的に依り分類記述し、

以てかゝる決定に進まんと努力して居るのであり、かゝる事を顧みずに哲學が勝手氣儘にかゝる範圍に入り込むと言ふ事は大なる誤謬である。若しかゝれば博物學の存在は不必要ではないか。要するにかゝる現象論的科學に於て未決定に屬する現象の對象の區分の名を直ちに哲學が取り入れ、以て科學分類の根本的區別を立する事は早計と言はねばならぬ。

博士は心理學を精神的部門に入れられて居られるが、之には異論はない。唯心理學なるものは有機的部門と無交渉なのであらうか。更に又生物發生學と言ふが如き分科が獨立して存在すると言ふ事は如何であるか。それは進化論の如きものであり、生物學中に包含さるゝものではあるまいか。又地質學の如きが礦物學や理化學と別々にあるものとは考へられぬ。若し果して然りとするならば博士の所謂發生論的科學なるものゝ存在は極めて無意義なものとなり終るのである。かゝる無意義なる科學の部門を特設する必要を余は認め得ないものである。實際に博士が此の部門に配された諸分科を見ても、科學分類に配さなければならぬやうな根本的基本的の

科學はないではないか。

余はかゝる科學の分類を以て哲學的に根本的論理的のものと信ずる事が出来な
い。現代の既成諸科學は種々雑多であつて、それは常識の階段から次第に進歩し、
最初は對象的に區分されて居たのであるから、現代の既成諸科學の如きは極めて非
論理な名稱に依て依然として存在して居るのであるが故に、科學の目的とする又は
その内容とする處を十分に極めなければならぬ。而して又そこに諸分科の一部の復
合になつたものや混成したもの、一分科中に内在するもの等があつて、一の基本的
なる獨立科學の系統を立てる事が先決問題である。例へば宇宙發達論とか生物發生
學とかと言ふ如き科學が基本科學として科學分類中に存在する事は如何であらう
か。更に又岩石學と言ふ特別なものが他の諸分科と對等して存在するは如何、岩石
學を許すならば土壤學も許すべし、而してそれ等が礦物學と離れて如何なる認識目
的を有するものであるか疑問である。

總て小區分は對象の區分にあると言ふ事であつたが、その對象を區別すると言ふ

事が可能であり得るか。例へば礦物學と岩石學との對象の區分を如何にして可能な
らしめ得るか。總て對象の區分が困難な上に博士の科學分類中に配された諸科學か
乃至は現代の諸科學が同等同權の資格に於て存在するものであらうか。動物學が動
物を植物學が植物をその學の對象として居るのであらば、物理化學は如何なるもの
を對象として居るのであるか。物理化學が自然界の一般現象をその學の對象として
居ると言ふならば、動植物界もその内に包括さるゝやうにもある。兎に角總ての
現代の既成科學が同等同權の資格に於て肩を並べて居ると見るのは謬見である。

「既に科學の最大別が方法に於てなされた後、その小區分は對象に依るのは止むを
得ない。加之對象も又實は更に根本的方法を實地に適用する仕方の細別に依て成
立するものである」とは田邊博士の科學概論に於ける説であるが、かゝる對象を細
別し區分する事はそれ自身哲學の仕事ではない。若し如斯も又哲學の仕事なりと言
ふべくむば諸多の自然科學の仕事はなくなる。哲學は有機とか無機とか言ふ對象の
自然科學的區分にまで立ち入る力がない。權利もない。それ等は自然科學に屬する

諸分科の大事業であつて、分類記述は要するにかゝる方面の研究である。自然界に於けるかゝる區分を哲學に於て決定してしまふ事が出来れば、それは便利であるかも知れない。が然しそれは哲學の仕事ではない。かゝる自然科学的に未知數に屬する區分を哲學が直ちに取り入れて決定を與へる事は早計と言はねばならぬ。博士の「對象も又更に根本的方法を實際に適用する仕方の細別に依て成立する」と言ふ事は既に哲學の仕事ではなくて自然科学の仕事ではあるまいか、自然科学的な仕方の細別なるものではあるまいか。現象界の細別に適用する仕方は現象科學の方法であつて哲學の仕事ではないと信ずる。

田邊博士は物理學を以て自然科学の代表者とせられて居る。而して組織論的部門に屬する諸科學が自然科学中最も論理的に低度のもものと論ぜられて居るが、之は余も賛成である。植物學とか動物學とか言ふ名稱は對象に依て名附けられて居る。而してその對象たる動植物は現象界に存在して居る。而してそれは極めて具體的である。然るに物理學の對象は極めて之等と異なる。物理なる名稱はすでに動植物など

と異なりて極めて抽象的である。之は別としても兎に角低度と言ふ事は博士の言はるゝ通り發達が後れて居るとか價値が少いとか言ふ意味ではない。論理的に低度である。科學の目的が普遍必然の最高眞理に存すとすれば、それは物理學を以て最高度と見るに躊躇するものでない。

既成科學の關係及哲學的批判につきては後述する處にゆづり、更に田邊博士の文化科學について一言したい。博士は沒價值的現象の個性記述と言ふ事はないが、個性記述科學の通則發見は可能であると言ふ論據より、文化科學に於て個性記述兼通則發見の科學を置かれて居るが、之には極めて苦しい説明をして居らるゝ如くに見える。二元主義的な兩極端に相背反する科學分類に於て一般の通則を定立するとは言ひ條あまり論理的な分類法と言ふを得ぬ。博士は個性記述の通則定立は價值的見地から統一された價値關係の上に於ける一般的關係であるが故に、價值的關係を無視する程度に分析を進め普遍化を行ふ事は許されないと言はるゝけれ共、如何なる普遍化と雖もそれは價値關係的個性記述的である方法の反對なるものである。通

則発見と言ふ事は少くとも價值關係的個性記述に矛盾する途を取る。價值關係を無視しても法則定立が可能であるならば必ずしも無視する事を許さぬと言ふ必要はない。特殊の文化現象の一般法則たる意味は失はれても、一般的の自然現象の一般法則として定立する事が出来れば必ずしも之を禁止する必要はない筈ではないか。特殊の文化現象より抽出した法則と雖も一般現象の法則となり得ない論據はない筈である。普遍は總て個物に内在して居る。故に個物より一般的普遍を抽出する事は可能である。然らば文化現象と雖もそこには特殊の普遍的通則のみに非ずして、一般的の普遍が内在して居る事が認められ得る。通則発見とはかゝる一般的普遍へ進む途と途を等しうする筈である。通則と普遍とはその範圍に於て異なるが性質に於ては等しい。故に文化現象の通則発見の可能である事は余も賛成であるが、それを以て價值關係を無視する事を禁ずる必要はないと思ふ。自然科学と雖も總て選擇された對象より抽出する特殊法則ではないか。而してそれが一般的現象を説明するのであつて、自然科学と雖も一般現象より一般法則を定立するものではない。

總て科學は對象を一般にまで擴大なる範圍に廣げる事は不可能である。自然科学は選擇した特殊現象の内より、普遍法則を定立するのであつて、その普遍法則を以て現實の現象外の事まで説明する可能を力説するのである。何ぞしらんそれが可能であるや否やは將來の研究に俟つべきであり、それが果して一般普遍必然の法則たりや否やは證明の限りではない。只一般の現象が比較的に近似すると言ふ點に於て満足しなければならぬ。自然科学は只力説するに止まる。眞理は科學目的の理想であるかも知れない。

自然科学の選擇した對象より抽出する法則は絶対普遍であるが文化現象より抽出した法則は絶対普遍でないと言ふ理由はない。如何なるものより抽象したりとて法則の法則たる以上普遍性を有する。而して文化現象のみ除外であるべき論理は成立しない。成程文化現象は自然現象と比して對象に廣狹の範圍差があるかも知れぬ。然しそれは廣狹多少に止まる。總て全宇宙の森羅萬象を包括して對象とする事は總ての科學に於て不可能である。左右田博士の絶対二元主義は前述した通りである

が、田邊博士の案の如く、かゝる個性記述中に通則發見を許す事は二元主義的科學分類方案としては矛盾たるをまぬがれぬ。假令價值關係内に於ける通則であつてリツケルトの所謂中間範圍ではないにしても、かゝる中間的存在は兩極的背反的の二元區分法案としては論理的なりと言ふを得ない。

更に歴史につきて一言したい。法律學經濟學政治學宗教學言語學等が特殊の文化科學として個性記述の内に通則を發見する事を許されながら、歴史は何が故に同じ文化科學として通則を發見する事が許されないものであらうか。博士は此の點について十分なる説明を與へては居られないのであるが、然し個性記述的なる文化科學に價值關係の範圍内に於て法則定立が許されるならば、又それが博士の言はるゝ如く絶對的の要求の出來ないやうな通則的なるものであるならば、歴史と人文地理學に於てのみ許されない理由が何處にあるのであらうか。若し果して博士の論ぜらるゝ如くむば文化科學に於ては、通則發見を絶對に許されぬものゝ部門と、それが許さるゝ部門とに區分されるわけであり、その間に方法上如何なる差があるわけであらう

か。博士の科學分類は此の點に於て大なる缺點がある。何故とならば文化科學内に於てかゝる二區分の部門が並立すると言ふ何等の理由を認め得ないが上に、同じ文化科學に包括さるゝ諸分科を驗して、そこに絶對に通則發見の許されぬ科學の存在を認める事が出來ないからである。

自然科学の定立した法則は絶對的の普遍性を有し、絶對的の要求に應じられ得るが、文化科學は假令法則定立が出來ても絶對的の要求が出來ない理由があると云ふ事は疑問である。同じ經驗科學でありながら、文化科學の定立する法則は絶對的でないと云ふならば、その法則自身が眞理性を缺く事を證明する。何故かなれば一般的絶對的でない法則が經驗科學として眞理である事を認め得ないからである。法則は普遍でなければならぬ。文化科學と言ふ經驗學に於ける眞理は、それを自然科学へ導來しても矢張り眞理であらねばならない。それは經驗に一致する事に於て——經驗が眞理に一致する事に於て——同じ意義を有すると考へなければならぬ。自然科学の H_2O は自然科学としての眞理であらう。それが文化科學に導來されても矢張

り眞理性を失ふものではないから、神武天皇時代の水もエロでなければならぬ事は文化科學としての眞理ではないか。人間の生れるのは自然科学としては約十ヶ月であるから、應神天皇の御出産は十ヶ月でなければならぬ事は文化科學としての眞理である。文化科學に於てのみ應神天皇の二十ヶ月御出生は許されぬわけである。

由來科學は科學分類に依て出來上つたものではない。諸種の科學は各々その目的とする對象に依て發達したのである。文化科學が價值的關係であると言ふが、如何なる科學と雖もその前段常識の階段に於ては必ずや吾人の興味と好奇心に出發して對象の個性を認識しやうとしたのである。自然科学もなく文化科學もない時代に於ける吾人の好奇心は、自然の總ての現象を對象として之を説明しやうとしたのであつた。即ち「科學以前」である。それが次第に進歩して來て此處に科學が生れたわけである。即ち既成科學は或る科學體系のもとに出來上つたものではなく、所謂科學以前の常識の階段が進歩したものである。如斯人間の自由勝手な興味と好奇心より生れ出た科學であるから、既成科學は發生論的考察をするならば極めて種々雑多

の階段にあると考へられる。

左右田博士は經濟學の對象とする處は經濟的文化價値に依て選擇さるゝ素材であると言はれるが、經濟學乃至は文化科學のみならず、總ての經驗科學は皆その素材に依て價値づけられ特質づけられて居る。物質や現象の個々の個性を明にせずして、そこに如何なる共通點も抽象も歸納も普遍的法則も立せられるであらうか。總て宇宙間に於ける物も心も現象も、唯一回限りの、反覆せざる、單個の個性に依て存在する。之は後述するが、總ての人類の文化現象もそれが自然でなくて何であるか。如何なる文化も、それは大自然大宇宙に包括さるる一の現象にすぎざるものである。若し果して然りとすれば科學分類の方法論的區分も、文化とか自然とか言ふ不鮮明な對象的名辭を弄んで論理的に十分完全である事を期することは出來ない。文化とか自然とかは論理的に方法論的に區別する事不可能であると思ふ。

科學の目的とする處、眞理の追求に存する事は申すまでもない。而し眞理追求の爲には事象を認識する必要が起る。之には西南獨逸學派乃至は現代の多くの科學分

類學派の人々の主張する處に依れば、前述した通りに二種の全く相反する相異なる方法がある。即ち之を要するに現代の多くの科學分類派の人々の主張は二元主義である。自然科學の目的が普遍必然の法則發見にあるに對して、文化科學の目的は個性記述に存する。が何れにしても要するに科學である以上は眞理の追求を目的とする事疑ひない。然らば此處に次の問題が起る。普遍必然の法則發見に進んでも、價値關係の個性記述に進んでも、その相反する兩極端の何れの方向に進んでも眞理が追求されると言ふ事になり、眞理の追求には自ら二方面の全然異なつた、と言ふよりも根本的に全く正反對の方向がある事を許さなければならぬ。若し果して然りとするならば、眞理の追求には自ら異なる二種の方法があり、その認識の方向も性質も全く反對であるとするれば、眞理そのものにも二種の全く相反する方向と性質がなければならぬと言ふ事になる。此處に於て科學の二元主義は引いて眞理性の二元主義を許す事になつて來る。

此處に眞理が二種あると言ふ事になる。前にも言ふ如くに没價值的に普遍妥當に

進む自然科學的の眞理に對して、個性記述的に文化科學の眞理がなければならぬが此處に文化科學の眞理は普遍妥當でないと言ふ事になる。然らば文化科學の眞理は如何なるものであり得るか。没價值的普遍妥當と言ふ事とは根本的に相反する方向に進み、根本的に相異なる目的を以て認識しやうとする文化科學的眞理が最後に於て没價值的普遍妥當であるとは考へられない。然るに眞理は普遍妥當でなければならぬ性質を有するものであると假定するならば、文化科學的に個性記述に向つてのみ進むと言ふ事は眞理の本質とは全く相反する方向に進む事とはならないか。而して又それは科學的眞理でなくて文藝的眞理に極めて近いものとはならないか。科學に普遍妥當でない眞理を許す事が出来るであらうか。更に又眞理を追求しない科學を許す事が出来るであらうか。

無論此の點に於ては眞理とは何ぞやと言ふ根本的な問題に觸れなければならぬ。

然し之は此處に論ずるには餘りに問題が大きい。ヴァインデルバントは「哲學概論」に於て眞理を三種に區分して居る。即ち超越的の眞理 Transzendente Wahrheit. 内

在的の眞理 Immanente Wahrheit. 形式的の眞理 Formale Wahrheit. である。超越的眞理とは模寫説であり、内在的眞理も模寫説を予想したものであるが、形式的眞理とは時と處と人に依て其の眞理性を變ぜざる、必然的普遍妥當性を眞理の標準とする所謂批判的眞理觀である。余の所謂眞理とはかゝる標準に於て成立するものである。即ち眞理とは何ぞやと言ふ定義を簡單に述べる事は困難であるが、然し眞理なるものは所謂批判的に考察すれば必然的普遍妥當性を有するものでなければならぬと言ひ得られる。即ち何人も認めなければならぬ知識と言ふ事になる。所謂客觀性を持つ、形式的眞理と言ふのはかゝる意味を有する。

然し實在性と言ふ事を經驗的個體が時間と空間に於て一義的規定に依て存在する事に限るならば、即ち單個の實在物は單個として存在し決して類似も共通もなき根本的一義的單獨の實在物であるとするならば、勿論普遍概念は存在するものでない。然し科學の對象なる自然乃至は事象は、その單個の存在的個物を構成する組織的のものであり、單個の個性としては繰返す事なき一回限りの空前絶後のものでは

あるが、それを構成する組織内容實質に於ては共通類似同質が内在して居るのである。普遍とはかゝる共通的内在の共通性認識を言ふのである。即ち普遍は吾人がそれを思惟すると否とに關せず個體の經驗を貫通して之に内在するものである。然し個體とか個物とかはそれ自身普遍なりと言ふ事は出来ないものであつて、それは個性的實在性は有するが、普遍ではない。然らば個々の個物の個性的存在を認識する事は眞理ではないかと言ふ問題が起つて来る。

有名なる生理學者クロード・ベルナル Claude Bernard. は「事實そのまゝは科學に非ず、事實より導きたるものが科學である」La science ne consiste pas en faits mais dans les conséquences, que l'on entire. と言ふて居る。個性そのまゝを認識すると言ふ事は、假令それが誤つては居らないとしても、個性は個性であり事實は事實である。事實そのまゝは科學ではない。科學は事實より導かれなければならぬ。而して科學的の眞理性も事實そのまゝではなく、實在の確證より導かれた普遍性のものである。眞理は偽の反對であると言ふ極めて通俗的の見解は略する。或る

事實が總て偽であると言ふ事も眞理であるから、かゝる通俗的見解に論理を進める事は出来ない。要するに普遍は單個の特殊の内にその組織要素として實在するものであるが、その單個の事實は二つとなきものである。個性は普遍と反對である。個性は一つの存在しかない。單獨の存在である。之に交代せしむる何物もない。而してその個性に内在する組織的性質又は要素を抽出する時、此處に普遍が成立する。而して普遍は一個の法則として經驗的事實の反證に反する事は出来ない。つまり經驗的事實に一致しなければならぬが、又經驗以外の事件も之も豫想せしむる事が出来る。即ち未だ經驗せられざる對象の認識をも支配せらるゝ力を有しなければならぬ。之が眞理である。

單個獨特の極致は個性であり、普遍必然の妥當的極致は眞理である。而して先にも言ふ如く普遍は個物に内在するものであるから、個物そのものを否定すれば普遍は成立する事不可能である。普遍の成立不可能であれば眞理の成立も又不可能である。要するに普遍や眞理は個物に内在するものであるから個性に立脚する。經驗科

學の眞理は經驗的個物なくして存在する事を許されぬ。而してかゝる普遍的なる眞理性は超經驗の事象までも規定する事を要求する可能性を有して居るものである。

經驗科學の理論は經驗に還元せられる事を要件とする。此處に眞理性の保證がある。經驗科學の依て以て法則とし普遍とする眞理は總て經驗より導き出されたものであるから經驗と一致しない眞理はない。經驗と矛盾する事を許されない。即ち經驗と離れて眞理性を維持してゆく事が出来ない。故に經驗に依屬して眞理性は改廢せられる事がある。故に經驗科學の眞理は蓋然的である。絶對的根本的確實性を有せしむる事は出来ぬけれ共、理論上は無限に接近せしめ得ると考へられる。

普遍と言ふ事は要するに一群の對象の全體に共通なる性質であり、それは實在するものではない。只普遍が吾人に認識せられると言ふ事は實在的經驗的個物を通じてある。各個物は何れも經驗的のものであるが、それより抽出された普遍と言ふものは思惟に依てのみ可能である。故に特殊を離れて普遍はない。故に特殊があつ

て而して普遍があるのである。普遍あり而して特殊があるとは考へられぬ。實際に於ては普遍は超經驗的性質を有するが故に、普遍あり而して特殊が創造されるゝと考へられる場合又はしか考へる事が便利な場合もあるが、若し普遍があり而して特殊ありと考へるならば、經驗に依て法則の改廢されるゝ理由がない。法則や普遍が經驗を左右すれば良い。然し、結果は何れにしても同じ事である。將來永久に經驗と矛盾せざる、經驗に依て改廢せられざる法則、そこに批判的眞理性がある。

個性とは何か、個性について今少し深く入る必要がある。個性とか個物とか個體とか言ふ事は言葉が多技であるかも知れない。それは Individualität と云ふ事である。個體の個體たる所以はその個性に依てである。對内的には一の統一的全體であつて、如何なる他者に依ても置き換へ得ざるものである事は前に述べた。如斯個性は獨特のものであるが、それは種々の要素の集合體であると考へられ得る。集合的性質の歩合や多少に依て個體獨特の個性を作るものであるが、集合と言ふ言葉が悪ければ、諸種の性質が内在すると見ても良い。そこでその内在の度が各々個體とし

て異なつて居るから、個體の個性は各々個々の獨特のものとなつて存するのである。故に個性は獨特のものであるが、そこには普遍が内在して居る。故に普遍は個性に依て基礎づけられるのであり、對象の個性なくして普遍の成立する事は許されない。つまり個性は絶對的一義的のものでなくて集合性を持つ。若し集合性のものでなければ抽出作用は行はれない。が然し又個性には抽出し得ない一義的の屬性をも持つて居る。此の一團のものを個性と言ふのである。花と言ふ事は個性的ではないが此の花と言ふ事になると個性的であつて、此の花と言ふものは一般の花の特性普遍を所有して居るが、又此の花特有の此の花に限り所有する要素もある。此の花と言ふ事は此の花の一般性及び特殊性が此の花に組織されて此の花の存在を明にして居るのであつて、假令此の花なるものゝ個性の組織に内在する總ての性質が總て殊く一般化普遍化に抽出されてもその個性に内在する一般的普遍的要素の組織の狀態分量又は其他に依て此の花なるものゝ個性的存在があるわけである。要するに普遍と言ふ事は特殊の場合状態を共通性に依て抽出する事が發展したものである。そ

の共通なる要素に還元して行く事は、之は特殊なり之は普遍なりと認めて取捨してゆく必要が起る。之は特殊なりと認めなければ普遍を抽出する事は出来ぬ。倫理上之は善なりと認めるには、同時に悪をも認める事である。美學上之は美なりと言ふ事は同時に醜をも認めて居るのであつて、美學は一面に醜學なりとも言ひ得られる。現今の科學分類派の人々が普遍性を抽出すると言ふがそれは只漫然と普遍者を抽出する事は出来ぬ。要するに特殊を特殊であると認めて共通性より除外しなければならぬが、除外するには特殊を何處迄も調査して、果して普遍性を持つて居らぬかを究めねばならぬ。故に抽象普遍の没價值的の科學は、一面から見れば價值關係的個性記述の科學でなければならぬ。

通俗的には個性と言ふ意味を極めて不鮮明に用ひて居るのであるが、哲學上に於て言ふ個性とは個物に所屬する性質——屬性——である。個物の屬性と言ふのは前述せし如く普遍へ抽出する事の可能なる性質と、一義的特殊の性質との總ての集合的組織状態を指すのであつて、普遍抽出の出来るものだけを取り出した後に残つた

獨特の一義的性質だけを指すのではない。普遍的に抽出され得る屬性をも個性と言ふのであつて、組織的のものである。然るに一般に通俗には抽出後取り残された後に残つた一義的のもののみを個性と言ふやうであるが、それは誤つて居る。

個性果して如斯とするならば個性認識と言ふ事は普遍認識に對する豫備の階段である。何故とならば科學は普遍妥當な概念構成を目的とするものであるから、個性を個性として認識するだけでは科學として満足が出来ない事になる。此處に於て科學は普遍者と特殊者との二元的に分れて對立するものではなく、特殊者の認識は普遍的なる法則定立の豫備である。若し個性そのものが根本的一義的のものであつて、集合的組織的のものでないならば、絶対に普遍的抽出の素材となる事は不可能であるが、個性は組織的であるが故に抽出が可能となるわけである。

吾人の認識の對象となる個々の個性は總て異なつて居る。而して科學はそれ等に共通する普遍性を抽出するのであるが、然し抽出されたものと雖も必らずしも皆同様なるものとは言へない。故に普遍とは要するに論理上成立するに止まる。普遍と

言ふものが實在するのではなく、普遍は個體に内在するものを論理上成立せしめるのである。而して抽出された共通性相互の間に於ても又その共通性を抽出し、斯の如くして次第に純粹の普遍に進み法則を定立してゆき科學の目的とする眞理性を立てもゆくののである。逆に普遍はいつも經驗的個物に依て驗證せられるのであるから、そこに相貫的關係が存すると見られる。

要之眞理は經驗科學的には批判的のものであつて、プラグマチストの所謂實用的なるが故に眞理であり、人生に役立つが故に眞理であるといふ説は首肯出來ぬが、逆に眞であるが故に實用的であり人生に役立つと言ふ事は言ひ得られるであらう。實在と一致するが故に眞理であると言ふ素朴的眞理觀は取るに足らぬが、眞理はしか考へ得べきもので他の考察を許さぬものであり、妥當性を有する。時間的に永久に經驗に依て改廢さるゝ事なきものである。かゝる眞理は果して得らるゝかは疑問であり、理想であるかも知れぬ。が然し論理上は可能である。

此處に問題は次の如くに説き得られる。科學認識の方法は單に只一方向である。

而して個性認識は普遍に對立するものではなくて、普遍認識は當然個性認識を俟つてはじめて行はれ得るのである。要するに科學認識の方向は唯一方向である。若し果して然りとするならば西南獨逸學派の文化科學、引いて二元主義は破れる事になるが、かく斷案を下すには今少し説明が足らぬ。

總て經驗科學の對象となる自然の物象はその個性に依て存在を明瞭にして居る。個性なきものは認め得られない。名器の破片は名器の個性を表現して居るとは考へられぬ。それは破片の個性を表現して居るかも知れないが、全的統一としての名器の個性は破壊されて居て認め得られない。全景としての、全的統一としての個性を表現するのは文藝であるが、然し藝術的個性は科學のそれと幾分異なつて居る。而して可成多くの出來るならば自然の總てに普遍なる法則を要求する科學も、個性的に存在する實在より出發する。而して科學はその實在より普遍を發見するのであつて創造するのではない。此處に科學は藝術と區別される。創造は藝術に於てのみ許されたものである。故に科學には認識の方法に二途の相反する方向があるわけでは

なく、科學目的を達する爲、換言すれば必然的普遍妥當的な構成的概念に達する爲には、必ずや對象の個性を見出す必要が起る。ライブニッツによるまでもなく、總て何者と雖も二つと同じものはない。何故であるか、それは總ての個物は個性に依て存在して居るからである。補正成は全世界を通じて唯一人である。過去と將來に於て二人とはない筈である。補正成なる概念は補正成なる個性に依て得らるゝものである。一般的なものをして一般化の方法に依て主觀に取り入れる概念構成が科學であるが、一般的なものは對象の個性に内在して居る筈であり、その個性の特質を個性化に依て明瞭にするのであつて、それを文化科學と名附けて居るけれども、それを文化と名附けると否とは別問題としても、要するに一般化的概念構成に進むべき豫備階段であると考へられる。没價值的普遍化的の現象の個性記述と言ふ事は意味をなさぬが、没價值的普遍化的の現象と言ふものは實在しない。それは抽象的に論理上成立するものであつて、實在としての現象、經驗的事象は總て個性的實在である。故に個性認識は一般化の方法に依て没價值的普遍化的の特質を抽象する豫備で

ある。如何なる自然科學と雖もその素材を選択してかゝるのであるが、宇宙の森羅萬象を等しく残りなく同時に認識の對象とする事は理想であるが、時間と空間に極めて限られた僅少の存在である人間の知識と言ふものはかゝる廣大無邊の認識は到底不可能である。故に必ずや素材を選択する必要が起る。その素材選擇には必ずや没價值的であり得ない。素材を選択するには必ずや價值關係的である。價值關係は科學が素材選擇の上に必ず起り來るのであつて、豈獨り文化科學のみと言ひ得んやである。

吾人の認識 Erkenntnis は總て意識 Bewusstsein に於て成立する、而して思惟作用を受けざる意識の内容、換言すれば思惟以前の意識は内容のみであるが、即ち直觀と言ひ體驗と稱せられる。直觀とは主觀と客觀の區別なく、意識せられたる内容の存在するばかりである。而してその状態に於ては内容をなす處のものは夫々性質的に多様であり、價值的に個性を有すると考へられる。故に直觀内容は決して同一ではなく全然異質的であつて同じものは現れて居らない。が然しそれが類に依て統

一され、普遍的認識概念となるのには詳細に論ずれば幾多の精神的経過を取るものであるが、然しその認識以前の直観内容に於て既に異質的であり多様であり個性的であつて、次第に概念的統一を経て次第に高等の普遍的對象に進むのである。

總て認識の對象たるものは個性的に異質的である。而してその特殊の多様な個性は價値に依て認識の對象となる。如何なる經驗科學もその對象は價値に依て認識される。換言すれば事象は個性に依て存在し、個性なくしては認識され得ない。個性なきものはなきものである。故に科學に於ては對象の個性化、個性認識と言ふ事が根本的の基礎をなす個性認識なくして一般化普遍化はあり得るものではない。何故かなれば個性を否定する事は科學の對象の存在を否定する事になり、對象を否定する事は科學の存在を否定する。對象なき科學は存在しない。

宇宙間に個性なくして存在するものは何者もない。個性とはそれ自身物象存在の意義である。而して科學は價値關係的個性認識にはちまり、次第に抽出され共通點を集合して普遍的眞理性に進むのであつて、科學の認識は一途の唯一の方向がある

のみである。余は絶対に二途の方向を否定する。

以上述ぶる處に依て余は經驗科學の二元主義的分類に反對するものである。要するに文化科學とか自然科學とかの二途の全く相異なる方向があるものとは考へない。只その方法上發生的に種々相の科學がある事を認めるが、個性記述的のみ向ふ科學、普遍必然の法則定立とは全く相異なる反對の方向にのみ進む科學といふものを認め得ないのである。然らば如何なる科學系統を主張するか。余の科學系統案は次項に述べる事とする。

第四 發生論的科學系統案

以上三項に渡りて余は科學分類の概要とその異見を述べたのであるが、余は此處に更に余の發生論的科學系統案を述ぶる順序となつたのである。即ち前項に述べし處を回顧して次に進むべきが當然の方法ではあるまいか。

前述縷々説きし處を総合すれば、純粹に徹頭徹尾主観に依て構成せる概念より演

釋推理する事のみにて、少しも物象の個性に關せざる數學の如きは主觀的概念的科學 Begriffliche Wissenschaft と云ふを得べく、前述せし經驗科學、即ち經驗的に客觀の事物の作用關係に關する科學を客觀的對象科學 Gegenstandliche, w. と言ひ得られるであらう。而して客觀的對象的科學は西南獨逸學派の言葉に於ていへば、Naturwissenschaft. に相當するものであり、余をしていはしむれば經驗科學全體を指すものでなければならぬ。即ち科學は次の如くに分類される事となる。

Wissenschaft {
Apriori (Begriffliche w.)
Aposteriori (Gegenstandliche w.)

前者は Apriori として Demonstrative Erkenntniss. (Demonstrative Knowledge) に關するものであり、後者は Aposteriori として Empirische Erkenntniss. (Empirical Knowledge) に關するものである。而して西南獨逸學派と異なる處は Empirische Wissenschaft. に於ては Natur w. と Kultur w. との區別はなくなるのである。兩者共に Object として Aposteriori に關し Empirische のものであり、それに對して

前者は前述せし如く Subjekt として Apriori に關するものである。主觀とか客觀とかいふ言葉は誤解が起るかも知れないが、若し左様であれば此の言葉は捨てても良い。要するに先驗的と經驗的とである。而してザントの主觀的なる精神科學は此處では客觀的なる經驗科學であり、主觀的先驗的の科學としてはザントのなしたる如く、而して又ザント以前既にロックやヒュームがなした如く數學や其他先驗的論證的概念科學が配される事となる。(ロックは數學と道德學とを以て、ヒュームは單に數學を以て論證的科學といふて居るのである。論證的 Demonstrative といつても、Apriori といつても良い。尙先驗的 Transzendental といつても良いわけである。)

此處に注意すべきは先驗的科學なるものである。如何なる先驗科學と雖も、之を發生論的に考へるならば總て經驗的に發生したものであつて、科學發達史上先驗的の科學なるものは認められ得ない。即ち現今の所謂先驗的なるものも、總て經驗的に抽象され、それが發展し擴大されたまでであるから、根本的先驗的なる科學の存在はない。只發展し擴大された爲に、經驗科學の經驗的なる部分が廣大に抽象され

論證されて、「の先驗的概念にまで到達したものであるが故に、之に先驗的なる名を與ふるにすぎない。先驗的と經驗的とは西南獨逸學派の文化科學と自然科學の如く根本的に認識の方向を異にするものに非ずして、認識論的には同方向のものである。かゝる意味よりいふならば先驗科學は發生論的に科學の最高級のものである。

西南獨逸學派の所謂文化科學なるものは、價值關係的に個性記述的であり、リツケルトの言葉に従ひていへば個別的なるもの *Das Individuelle* の個別性 *Die Individualität*、一回的なるもの *Das Einmalige* の一回性 *die Einmaligkeit* を認識する事であるが、個別的なるもの一回的なるもの、個別性を、只一回起的の個別性として認識するといふ事は、たゞそれだけであれば科學としての普遍妥當に何等の系統も構成も體系も與へない。科學としては只それだけで以ては到底満足する事は出來ぬ。只吾人の興味に依て對象の個性を認めてゆくといふ事だけならば、常識的階段を一步進めた好奇的知識であるか乃至は文藝的素材となる事はあつても、それを一の科學の大部門に配置する事は出來ない。それは個々の知識が個々に存在して居る

のであつて、それは科學の素材とはなるが、それを只そのまゝ科學なりといふ事は出來ない。田邊博士は一般文化科學に共通性定立を許して置きながら、歴史にのみは許さぬといはれるが、歴史家とてもそこに各時代の又はその或る時期の共通性を許して居り、又事實に於て田邊博士の共通性位なるものは之を見出して居る、コムトの如きランブレヒトの如きは特別な例として、一般の歴史家も、大要に於ては通則定立を事實に於てやつて居るのである。かゝる意味に於ていふならば、西南學派の所謂文化科學なるものは、又歴史の如き、個々の個性に進むのみにては、歴史家はそれこそ物知り止まる。墓場の文字を最も正しく讀む人であるといふ事になる。然し個性へ進むといふ事は科學としてその素材的に必要不可欠な事であり、個性を明にしなければ到底科學的目的は達しられないのであるから、それは科學的目的ではない理想域ではないが、科學以前の階段として又は科學の第一歩として必要なのである。

科學を發生論的に考察するならば、常識の階段から進んで次第に科學的色彩を帶

びて來るが、其の最初に現れる科學の發芽は普遍的抽象的なものではなくて、個性記述的なものである。而して個性記述的に進んでゆく内に順次法則が発見され共通點が抽象されてゆくのであつて、普遍が現れ抽象的な法則が立せられ、而して後に個性的に個々の個體が研究されてゆくのではない。無論現今の如く或る程度まで科學が進んだ時期に於てはその逆にゆく事もある場合がある。何故とすれば法則は普遍でなければならず、且つ經驗以外のものも規定し得る事を力説する性質を有するが故に、天文學上の法則は將來の天體の運行現象をも豫知せしめ得られる。然しそれは或る程度迄科學が進歩し、法則が定立せられて後の事であつて、原始的にはかく考へられない。常識なるものは科學の前身であり前段であつて此の邊の事をよく物語つて居る。

それが更に今一步進むと、今度は幾分科學的色彩を有する記述科學 *Beschreibende Wissenschaft* の時代となるのであるが、記述的科學になると對象を分類し綜合し解剖し結合して通則定立の目的が大分に鮮明になつて來る。西南獨逸學派の所謂歴史

學なるものについて見ると個性記述であるが、現今の歴史家は只個性記述に止まらず歴史を貫通する又は一時代を一貫する通則とか時代の思潮とかいふ方面に於て或はその時代時代の特徵といふやうな點について、普遍的色彩をもつ共通的通則ともいふべきものを認めて居る。先にもいふ如く獨逸史家ランブレヒトの如きはその一例であつて、歴史家としても個性のみに満足する事なく、次第に共通的な通則を発見しやうと努力して居る。我國でいへば古事記日本書記の時代より稗史物語的な時代を経て徳川時代に至るまで、總て歴史家といふものはなく、歴史は文學者に依て研究されて居つた、それが明治に至つて、徳川時代の考證史風といふ支那風の史風と獨逸の史風とを混じて一の史料編纂的史風をなすに至つた。それでも尙最初は漢文學者なる星野久米重野の諸博士に依て研究をつゞけられて居つた。如斯にして次第に今日の歴史家を生むたのであつて、今日の歴史家も、通則發見に努力して居るやうに見える。歴史の法則は我國のみならず世界一般に未だ發見されて居らないかも知れない。又かゝる法則はすでに歴史に非ずして社會學の如きものとなるかも知れ

ない。然し抽出された歴史法則なるものが假令社會學的東西のものであつて、そこに歴史的色彩がなくなつて居るとしても、それは問題とはならぬ。抽出以前を歴史と名附ければ良いのであつて、法則が定立されてそれが社會學的東西のものであつても心理學的東西のものであつても何等さしつかへないわけである。

斯の如く個性記述的の歴史に於ても考證學派の史風は次第に抽出の性質を帯びて來て所謂法則科學の方向に近寄らんとして居る。尙又、記述科學に包括さるゝ動植物學の如きも、事實の記述に止まつて未だ説明の域に達しては居らないのである。個性科學や記述科學乃至は其他個々の事實を基礎として一般の原理を發見し、之に依て特殊の事實の根據を明にし、引いて經驗以外のものをも規定せんとする所の説明科學 *Erklärende Wissenschaft*. なるものは科學として最も代表的のものである。科學の目的とする普遍必然の妥當性を有する構成的概念を主とするといふ點より考へて、論理上最も高度の科學であるといひ得られる。其の内でも物理學はその代表的のものである。化學の如きも物理學に還元せられやうとし物理學もその内在科學

なる力學に還元せられやうとして居る。要するに經驗科學に於ける代表者として物理學を認める事は田邊博士の科學概論に於ても論述された通り至當である。

物理學は自然現象を統一的に説明する事を得る普遍必然の法則を定立する爲に、假說的なる概念を導來して經驗を數學的に説明し、更に經驗以外のものをも規定しやうとするのであるが、普通に物理學は二つに區分される。

- A. 實驗物理學 *Experimental physics*.
- B. 理論物理學 *Theoretical physics*.

前者は主として實驗的に現象の計量關係を法則に定立する部門で、後者はそれ等の法則を假説に依て統一し、數學に依て普遍的理論を構成する部門であつて、後者は自然科学の頂點をなすもの、經驗科學の最も論理的に高度の位置を占めるものと認められて居る。經驗科學の理論體系としては物理學に盡さる如くに思はれる。

(Poincaré. *La Valeur de la science*.)

次に發生論的に考へるならば抽象科學であるが、之は説明科學的法則定立を擴範

に發展せしめたものであつて、極めて論證的な階段である。例へば幾何學なるものを見るに、それは現今に於て經驗科學なりといふ事はいひ得ないかも知れないが、その依て來る發生的經過を見るならば、必ずや經驗より發展した事を思はしめる。幾何學はその經驗的の時代を越えたまでであつて、それが基本となりて發展し超經驗的なる範圍にまで進んだのである。幾何學に於ける點とか線とかは吾人の經驗外のものであるといふ。巾も厚さも長さもなき位置だけを有するものが點であるが、それは經驗科學的の物象の三次元又は四次元といふ事と相容れないから、經驗的ではないといふ。然し、點を定義すべき三次元の巾と厚さと長さといふ思惟は何に依て規定されるか、點そのものは超經驗的の存在であるが、その點を定義すべき規定すべき三次元の現象は經驗的に抽象されたものである。若し此の三次元がなければ點は規定されないであらう。直線は二點間の最短距離であるといふが、すでに點定まつて後の事である。而して又距離といふ概念は經驗的である。若しかゝる意味に於ける點が等しく同位置に二つ相重なり居るといふならば、物質的ならぬ三次

元ならぬ點なるものゝ、その最短距離は零になり、直線はないといふ事になるのである。然らば前の公理は次の如く改むるを要する。即ち直線とは二點間の最短距離の内、二點の相重なる場合を除く。但し之は經驗的にのみ許されるが、それより發展した幾何學の公理は規約的に二點間の最短距離と規定する。公理が證明を要しないといふ事は、又は證明不可能であるといふ事は、經驗的にいひ得られる事であつて、超經驗的の規約的のものであるからである。

以上述ぶる所の如く經驗科學の目的は經驗の無限に多様なる内より、事實の選擇を行ひ、經驗を單純化し、共通の要素を抽出し、普遍化の方法に依て、共通性の要素を相互に關係せしめ、一段と高度の法則を定立するものであつて、先づ經驗的對象の個性につきて出來得る限り研究調査し、最初に個性化の方法を以て特質を發見し、それを更に分析 Analysis して類似と非類似とを區別し、共通的要素を若干の種類に分ち、之を系統的に配列する。Classification. 如斯にして同類を表してゆく事を記述といふのであり、記述を目的とする科學が記述科學であつて、記述 Desc-

hebung と云ふ事は個性記述の意味でなく、論理的にはそれより一段高度のものであつて、*Systematische Wissenschaft* と呼ばれるものであるが、要するに系統分類といふ事が目的である。更に一段高度の階段に於ては、法則を立て、経験の範囲内に於ける共通性を今度は無條件的に必然的命題に立て、ゆゑのであるが、法則は更に高度の假説 *Hypothesis* から演繹せられる事となるのである。

Hypothesis は所謂臆説であつて、想定的なる本質、原因、法則等を指すのである。ニュートンは吾は臆説を作らずと *Hypothesis non fingo* といつたが、ニュートンの萬有引力の如きも、必らずや最初は臆説に出づ。而して科學の臆説に必要な條件は、

- A. 假説それ自ら矛盾なき事
- B. 假説の真理が實證さるゝ事
- C. 事實と既定の法則と反せぬ事

が必要である。若し調和するならば假令證明し得ずとも假説たり得るのである。又既知の法則と雖も根本的確實性のものではないから、あながちに既知の法則に反すると雖もすて去るを要しない。此處に到つて科學の最高階段に達するのである。

以上、科學の發生論的系統を説明したわけであるが、今之を表示すれば

- A. 個性認識の期……歴史學
- B. 記述科學の期……動植物學
- C. 説明科學の期……物理學
- D. 抽象科學の期……數學

即ち發生論的に考察すれば上表の順序に依て進み來つたものであつて、Aは科學として最も低度のもの、Dは最も高度のものと考へられる。此の高低といふ事はその科學の價值とか進歩とかいふ意味に非ずして、吾人の思惟作用として前段をなすものを低度といひ後段をなすものを高度といふにすぎない。

此處に誤解なからしめんが爲に一言附加するが、前表のAに屬する科學はそれ自身として何等低度であるといふ事はない。假令物理學を以て經驗科學的に高度のものといふも、前にもいふ如くに個性認識なくして經驗的に直ちに普遍法則には達し得られないのであるが故に、個性科學も、それ自身としては科學として成立するわけである。故に學そのもの、價値に高低のあるわけのものではない。只吾人の興味は如斯にして個別認識にはぢまり、次第に推理を押し進めて、系統的科學より普遍假說に進むのであつて、吾人の興味は如斯多方面に向つて推理を進めてゆく事になる。故に個性記述的なる科學や、記述系統科學は、説明科學の前段である。それは *Gesetz wissenschaft*. から見ていふのである。各學は各學として、その知識欲を満足せしむべく、その科學目的に進めば良いのであつて、科學の窮極目的は *Gesetz* に進めば良いのであるから、その意味に於ては *Hypothesis* にまで進んで居る科學を高度といひ得られる。

數學物理學の大家として有名なるウットワート Woodward は科學の發生に五時

期あるを認めた。

- A. Observational stage, …… 觀察の時代
- B. Classificational stage, …… 分類整理の時代
- C. Experimental stage, …… 實驗の時代
- D. Theorizing stage, …… 法則定立の時代
- E. Mathematical stage, …… 法則を數學的形式に表す時代

此の發生的分類に依れば、余の個性認識科學はAであり、記述科學はBであり、説明科學はCDEに相當するのである。而して彼は抽象科學を加へて居らないのである。(因にウットワートはカーネギー・インスティテュション・マスターであつた。)

以上余のなしたる説明により、此處に一の科學系統案を作り上ぐるを得たと信ずる。而して余の系統案は幾分從來のそれと比較してその不合理なる點を正し得たと思ふ。而して各科學は此處に發生論的系統を追ひて各部門に依屬すべきである。

前にもいふ如く諸分科を發生論的に考察するならば、その多くは對象的區分に依りて發達したものである。最初から整然たる系統のもとに發達したものである。然しながら今日より考へるとその對象を區別すると言ふ事は論理上至難の事である。そこで今度は方法論的に區別しやうとするのであるが、科學分類學の對象たる既成科學は、おほむね發生當時より對象論的性質を有して居り、今も尙その性質を除外する事は出來ぬ。そこで方法論的區別によるには比較的對象的特色を有し、さればとて對象的區別によるにはそれが論理的に不可能であると言ふ困難がある。故に科學を最も包括的に分類するには發生論的によるのが一番正確だと信ずる。之は又その科學の方法の發生的經過であるが故に、此の方法は方法論的にも確實であると信ずる。余の科學系統案は以上の理由に依りて出來たものである。尙現今に於てその性質の極めて不明瞭な科學や、又は科學なりや否や不分明なるもの等ありて、その間に複雑なる組織を要するが、發生論的には前述分類案中に包括さるゝ事となる。尙又混成内在の科學をも認められるのである。それは今少し證明を要す。

以上は學問大系の大要を述べたのである。先づ最初に於て大區分より説明する必要がある。科學を先驗的と經驗的とに區分する事は前に説明した。要するに先驗的なものも余の發生論的科學大系に於ては經驗的なものと大差なく、西南獨逸學派の如く根本的に異質的なものではない。余の先驗的と經驗的と言ふ二つの區別は、發生論的の一の階段であつて、相互に相反する方向に進む性質のものに非ずして同方向に進むものである。先驗的と言ふ言葉につきて説明すれば、普通哲學上に使用する意義に等しく之を採用したまでである。即ち先天的 Apriori 又は Transzendentally と言ふのは經驗以前と言ふ事である。超經驗であるといふ事ある。然しそれは時間的前後と言ふ意味ではなくて、知識の性質上論理上發生的に前後の關係である。時間より言へば如何なる認識も經驗と共に始まるが、それは經驗から生ずると言ふ事ではない。認識素材は無論經驗に依りて與へられる處である。然し認識の普遍性と必然性は經驗に超越するものであるが故に先驗的と名付けられて來つたのである。經驗とは別にそれ自身に於て確實性を有する。それ自ら絶對確實で普遍妥當な事と

如何なる經驗にも依屬せず、獨立性を有しなければならぬと言ふ事とが先驗性である。要するに純粹主觀に存して經驗に存しない。アプリアリはカントに於て初て明にせられ、新カント派に依て極めて廣義に用ひられる事になつた。然し余は根本的に發生的に之を考察するのである。余は先驗的と言ふ事を絕對なる意味に解しない。何故とならば發生論的には先驗なるものを認識する事は出來ぬ。數學の公準とか公理とかも、經驗に依屬せずして單獨なる假定とか假說的又は規約と言ふものに認められ得ない。公理とか公準とか、單に規約的のものであり、その相互間に合理的である事を要求するならば、合理と言ふ事は、その合理それ自身を認識するのは經驗に依るのでなくて何であるか、吾人の精神活動として超經驗なる合理なるものを余は考へ得ないのである。合理性と言ふ事の認識、規約的なる認識は必らずや經驗に依屬してのみ成立する。吾人は經驗なくして合理性を認め得ない。而して數學が規約的に合理的に組織されたる論理的數理大系である以上、吾人の經驗を超越する事は絶対に不可能であらねばならぬ。此處に奇論を提出するものあらん。吾人が生

れながらにして不合理なる世界、絶対に合理的ならざる世界に生活すべしとせよ。如何にして合理を認識し得るものぞ。更に言はむ。吾人が生れながらにして厚さを失ひたる平面の宇宙に生活すと假定せよ。如何にして立體を認識し得るぞ。幾何學に於て點と言ふものは厚さと巾と長さとの失ひ、位置のみを規定するのであるが、超經驗的にかゝる點を認め得られざるは明ならん。何故とならば厚さと巾と長さと言ふ三次元を認めると言ふ事は經驗に依てある。巾と厚さと長さとの認識せずして如何にして點を認識し得るものぞ。幾何學に於ける點の如きを、それ自身直接經驗する能はずとするも、そこに經驗的なる三次元の世界の認識が内在して居るのであつて、此の三次元性の認識なくして點は出て來ないのである。幾何學に於て二點間の最短距離を直線と規定するが、その距離と言ふ概念は先驗的なりや超經驗的に距離の概念を如何にして得べきや。而して又平面と雖も同様である。余は右の理由に依て先驗科學と言ふ言葉は用ひたが、之は從來の用語に従つたのみで、根本的に先驗的科學と認めたわけではなく、むしろ抽象科學と言ふが適當であると信ずる者

である。

數學實在論 *Mathematischer Realismus* はプラトール以來、デカルト、ライブニッツ、カントは勿論、新カント派の取る立脚であつて、數學先驗論はヴントの科學分類の所で述べた。要するに數學は純粹直觀に關し、(*Reine Anschauung*)アプリアリなる *Rationales* に基礎づけらるゝものとして之を先驗科學に入るゝのが從來の一般の定説である。之に反し數學の對象たる數の如きは實用的なる名稱記號にすぎざるものとし、公理の如きも一の吾人の規約にすぎずとするジョン・スチュアート・ミル、マツハ等の見解を普通に數學唯名論 *Mathematischer Nominalismus* と言つて居る。前者は先驗説であり後者は經驗説である。而して後者の説に對しては幾分論理の難點が存するが、余の此處に言ふは發生論的に論ずるが故に、前二者の何れにも非ず。發生論的には先驗科學も經驗的たるべきであるが、その超經驗的なるは經驗的より發展したるにすぎずとするが、余の取らむと欲する見解である。故に余は抽象科學と言ひても可なりと信ずるものである。勿論既成數學に於ては超經驗的なる

所あるべきは余も之を知る。唯その超經驗的なる性質も、吾人の經驗性を離れて發生し能はざるが故に、先驗的なる名稱を捨てず、從來慣用に從ひて用ひしにすぎざるものである。余は抽象科學として哲學と數學を配したのであるが、之れは抽象科學を二分して相對立せしめたわけではなく、哲學や數學は抽象科學に屬すると言ふ迄である。哲學も又數學と等しく從來の説に依れば理性 *Vernunft* に關して先驗的 *Rationales* に基礎づけらるゝものであるが、余の考としては數學の所に於て論じた如く抽象科學として認めただけである。

抑哲學とは何ぞ——之は随分大きな問題であるが故に、此處に論ずるわけにはゆかぬが、要するに哲學の内容は特殊科學の根本概念を反省して、一の知識體系に組織するのであつて、その内容に直觀から得る事はあつても、ベルグソンの如く直觀的知識なりといふ事はいひ得ない。何故かならば直觀はそれ自身直ちに哲學とは成り得ない。哲學は實在の根本概念を反省統一するばかりではなく、當爲の學としてむしろ價値の學問 *Werthehre* であるとされて居る。故に古くより哲學は學問の學問

といはれたのである。所謂最高原理の學である。カント以來哲學の方法 *Methoden der Philosophie* は先驗的であり批判的である。カントの所謂純粹理性批判である。知識批判である。知識の依て立つ所を明にするのである。科學批判 *Wissenschaftskritik* は哲學の仕事である。

然し此處に一言附加する必要がある。科學批判といふ事は諸分科の理論學說の當否を審判決定するの意ではない。諸分科は現象の認識であつて、科學以外には現象の認識はあり得ない。此處に哲學は諸分科の上に立つて君臨する王者の如く見える。が哲學が科學全般の上に關するといふ意味に於て余は學問の學問とするに躊躇するものでない。何者か科學の全般に關する科學ありや。而してそは哲學に於て認め得るのである。哲學は現象に關しないが故に、現象の認識は諸分科の獨特の價值を有する。然しその根本的基礎と方法に關し批判的に諸分科の總てに關するが故に、哲學は最高科學也といふも必ずしも過言ではあるまい。然し科學分類としては科學の最高位置たる抽象科學の部に位置せしめ置くが適當なるべし。

從來哲學はかくの如き考に依て説明されて居た。只哲學者の内には自然科學者の反對をよそれ、哲學は科學の最高の位置にある事を、近世の哲學者は説かないのであるが、余は右の理由に依てのみ發生論的にしかいひ得ると信ずる。而して何れの科學者と雖も、哲學なき又は哲學せざる科學者は之を眞の權威あるものと見る能はざるものである。

次に規範學であるが、今少し從來の定説を考察して見度い。規範科學は倫理學、倫理學、美學の如く、不許不の學問であつて價值判斷である。故に規範學は規範的意識に基くものであつて、經驗的眞理性を標準とするものではない。此の規範的意識の假定のもとに先驗的に進みゆくものである。Normative Wissenschaft とは要するに當にあるべき規範 Normative の學、更に換言すれば當爲 Das Sollen の學である。美學の如きも美的規範の意識を假定して立せられるのであつて、經驗的事實の上に立せらるべきものではない。

之を自然法則と比較すれば、規範學の法則が超經驗的なるに反し、自然法は現象

に契合する事を要する。水は正なりといふ事は、地球上之に反する現象を許さない。落體は9.8の加速度を以て地球の中心に向つて直線運動をするといふ自然法は、地球上の現象に反しない。若し之に反する現象あらば、此等の自然法はその眞理性を失ふ事になる。然るに規範學の法則は然らず。必らずしも事實に合ふとは限らず。人は正直なるべしといふ法則は不正直なる者に依て反せらる。人は盗みをすべからずといふ規範法あるとも、盗人なきを保し難きが如きである。規範とは要するに吾人の行爲思想情緒が、其正當なる目的を實現せん爲服従せなければならぬ原理であつて、吾人の(A)行爲(B)思想(C)情緒が正當の目的を實現するが爲には(A)善(B)眞(C)美の法則に服従すべしとする。即ち規範法則はベシの法則である。而して右の理由に依り、

- A. 行爲の規範を研究するものは……………倫理學
- B. 思想の規範を研究するものは……………論理學
- C. 情緒の規範を研究するものは……………美學

といふ三つの學が成立するわけである。即ち要之規範法は事實に一致せず、倫理法に反する惡、論理法に反する謬論、美學に反する醜ありて、自然法とその趣を異にして居るのである。然しながら根本的に深く立ち入りて研究するならば、規範なるものは根本的に法則と異なるものではなく、セントも言ひしが如く其間には極めて深い關係がある。西田博士もいはれた如くに、兩者を二途の根本的に別なものと考へる事は出来ない。元來經驗科學の法則も一面に於て直接經驗の内面的不許不に基づいたものであつて、事實に基くといふ事、事實の判断といふ事が既に一種の不許不に基礎づけられて居る。かくいふならば經驗的事實的不許不も論理的な不許不と同様に考へられ得られる。經驗的判断は要するに命令的判断である。内に向つて内面的不許不に達する事は外に向つては一般妥當性を要求する事であり、自然科學の要求する法則も要するに規範的たらざるを得ないのであつて、此の兩者の間には根本的絶對的無交渉ではなく、本質的區別があり得ない。

更に之を一切より解すれば、例へば善なるべしといふ法則は本質的なるものでは